川柳塔

昭和六十一年五月二十五日印刷
昭和六十一年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十二年　通巻七〇九号

日川協加盟

No. 709

六月号

友好と観光　中国吟行の旅

北京―万里の長城―大同

□61年9月18日出発
□6日間コース
□費用24万8,000円
（全食事付）
□人員25名かぎり
（詳細は逐次、発表します）

川柳塔社

NEW FORMAL COLLECTION

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF ORIGINAL DESIGN®

株式会社オーエスケー

〒540　大阪市東区南新町1―13
☎ 06(941)8015

ハイヒールと毛皮のえり巻

西尾　栞

五月号の「川柳の群像」に、東野大八先生が、故延原句沙弥さんのことを書いておられる。それで曾て、鬼遊さんから借りて写した「句沙弥句集」の帳面を読んでみた。当社の豆秋さんと並称されたユーモア作家だけに、句はもとより、「惚れたが因果」というエッセイが大変面白く書かれているので、転記してみよう。

「あばたもえくぼという諺がある。ほれこんでおれば南瓜豆の皮のようなデコボコ顔も、えくぼの鈴なりにみえるのである。川柳も余り別品の方ではない。わずか十七文字のチンチクリンで、短歌のように三十一文字のおひきずり姿でもなく、又俳句のように、ザァます言葉のよそゆき語でもなく、おます、おまへんの日常語を無遠慮に使う。あかの他人から見れば、誠にお粗末至極の代物とも見えようが、愛している我々にとっては、このチンチクリンがたまらなく可愛い。お体裁を作らずザックバランのむきだしのところが捨てられない。人が何といおうが、ほれたが因果でどうにもならぬ。然し連れそう以上は、ヘチャよりベッピンがよいにきまっているが顔や形は今更どうにもならぬ。醜女なら醜女なりに、知性に磨きをかけて心を光らせるより外はない。心に輝きが増せば姿態の醜さは問題でなくなる。つまりいい川柳を作ることだ。白粉を塗ったり、紅をさしたりして上っ面だけをごまかしてもだめである。宿命の顔と姿はどうにもならぬ。心に内容に磨きをかけるよりほかに「ああ川柳はいいものだなァ俺もこいつと一苦労してみたい」と他人に思わせる外手はないのである。俳句より上に見られようとしてハイヒールを履いてみたり、短歌よりお上品ぶろうとして毛皮のえり巻をしてみたりすることは愚の骨頂である。顔は素顔、姿は自然のままで何一つ飾らなくてもよい、心を温かく美しく育てさえすれば自分だけでなく、誰も彼もが、あばたをえくぼと見てくれるようになるのである。」

以上であるが、この句集は昭和三十九年に出版されたのだから、その当時はまだハイヒールをはいて俳句に背のびしたり、毛皮のえり巻をして短歌より上品ぶったりと言うておられる。又番傘の五月号に、石川勝さんが、去年十一月発刊の同人合同句集のアンケートの中に「川柳は俳句を超えられると思いますか」に、超えたいと思う、超えるが、超えられないより僅か多いという結果にいささかがっかりしたとの一文が載っていた。

さて、去る五月六日に文化庁より呼び出しがあって、藤島日川協理事長と渡辺蓮夫常任理事と私と三人出席した。短歌より四人、俳句より二人出席されており文化庁の文化普及課長外二名の合同会議があって「国民文化祭について」というテーマで検討された。それは本年十一月三十日に東京の日本青年館に於て、川・俳・短の合同文化祭をやる話であった。

川柳も愈々短・俳に伍して、短詩文学の一翼を荷なうことになった。洵に欣ばしい次第である。この最後の一文が、何年かの後の笑い草になることを希望する。

座右の句

ひたむきになれる事あり矢をつがえ　（美　代）

私の句

花嫁となる人と行く通り抜け

松本今日子

川柳塔　六月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

ハイヒールと毛皮のえり巻……西尾　栞…（1）
さくら……正本水客…（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…（4）
自選集……（27）
川柳太平記(97)　川柳の群像　今井鴨平……東野大八…（30）
連載　誹風柳多留廿六篇研究（二十五・二十六丁）……（32）
水煙抄……黒川紫香選…（34）
路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表……（51）
秀句鑑賞┌同人吟……里　小路…（57）
　　└水煙抄……江口　度…（58）
愛染帖……橘高薫風選…（54）

さくら

正本水客

日本の三名桜と言われているのは、その年輪と大きさから、淡墨桜（岐阜県根尾村）と神代桜（山梨県武川村）とそして滝桜（福島県三春町）である。今は桜の真っ只中であるが、これが雑誌に載る頃には少し時季外れになるのをお許し願いたい。

淡墨桜に会いたくて根尾谷を訪れたのは昨年の四月だった。樹齢一四〇〇年、高さ一七メートル、枝は四方へ二〇メートル余り伸びている。幹の太さは九メートルもあって眼を見張らせる。世界的な名木の魅力に圧倒されながら花の梢を見上げて周りを幾度か歩いてみた。淡紅色の花びらは散り際には淡い墨色に見えてくるので「うすずみざくら」と呼ばれている。

過去いく度かの台風や大雪のため、幹にヒビが入り枝は折れ曲り全身が枯れはじめた。昭和24年春、祈る気持で大手術が行われた。腐りかけた根と若い桜の根を一本一本つなぎ合せ、卵白を塗りワラを巻くこと二三八本に及んだ。七三人の人と一ヵ月をかけて人と桜

特攻隊と川柳……田中正坊…(59)
大同の石仏……東野大八…(60)
傍島静馬氏を悼む／西尾　栞・川村好郎……(62)
吉岡逓児君の死を悼む……恒松叮紅…(64)
国弘半休門さんを偲ぶ／弘津柳慶・石川侃流洞……(66)
初歩教室……阿萬萬的…(68)
「しこり」……清水一保選…(70)
一路集「派　手」……横地雅風選…(70)
「値　段」……中原比呂志選…(71)
柳界展望……(72)
本社五月句会……(74)
各地柳壇（佳句地10選／川上渓水）……(78)
■6月各地句会案内　91
■編集後記　93

座右の句

月見草ひとりの湖をもつひとに　（智　子）

私の句

前書も後書もなく人を恋う

佐藤藤子

の握手が美事に花ひらいた。痛々しいほどの数の添え木を眺めながら、私は言い知れぬ感動を押え切れなかった。

今年は神代桜に会いたくて山梨の地を訪れたのは四月十二日だった。前日の雨に引き替えて素晴らしい快晴。小諸から野辺山へ、此処には「日本国有鉄道最高地点」の大きな標識が建っている。来年になれば過去の記念物になって了うのかと思うと感慨深い。浅間や八ッ岳の山々が雪をかむって鮮烈である。

武川の実相寺は意外に開けた道路沿いにあった。神代桜は樹齢一八〇〇年、高さ二四メートル、幹の囲りは一一メートルで日本最古の巨木である。日本武尊が東征の帰途植えたと伝えられている、樹木としての天然記念物指定第一号である。本幹の上部は枯れて三年に一度ぐらいしか満開にはならないらしい。巨桜の風格は流石であるが、老衰の兆しは隠しようがない。

その日は河口湖畔に一泊、五合目辺りまで雪におおわれた富士の麗姿を満喫した。翌日は神代桜の燃焼不足を取り戻そうと身延山の久遠寺へ寄る。有名な菩提梯の石段は敬遠して女坂を上り詰めた境内には美事な枝垂桜が三本ある。雄大な堂宇と裏山の老杉をバックに咲き誇る姿は息をのむ艶やかさであった。来年はぜひ福島の滝桜をたずねたいと楽しみにしている。

西尾栞選

灯しても消しても老夫婦だけの夜
亡母憶うひたすら憶う啄木忌
世渡りが上手な人で距離を置く
意地一つ欲しい息子の吃るくせ
ふり向けば失くせし物の多い過去
落花さかんしみじみ思うわが命

大阪市　江城修史

春耕下いとのんのんと昼の月
若草の涙を見たり朝の鎌
安泰が続き無量寿だと思う
アイバンク無理よ私は乱視なの
死ぬほどの恋一億に人なきや
歯車が狂うと脆い天くだり

平田市　久家代仕男

花ごよみ母はだんだん足弱に
疑いを水洗轟と流し去る
女抱く軽々と抱く羨まし
こんにゃくの馬鹿正直は生まれつき
餅焼いて起死回生の策なきや
野垂れ死するなら城のある町で

松原市　谷垣史好

上司　入門　趣味とはそんなものですよ
幼稚園の帽子振り向いてはくれぬ
罰金を払うて酒を飲んで寝る
ハンカチはきれいなままで子が帰る
いりこの匂いやさしいおばあさんが住む
飛び下りて少女は鳥になったとさ

竹原市　小島蘭幸

それからの話がはずむ大ジョッキ
飲み仲間どちらも歌はうまくない
ライバルとはありがたい僕も頑張れる

松原市　玉置重人

生きてゆく義理が重たいのし袋
パーマから帰った妻に気がつかず
知らん間に花が散ってたスケジュール
松江市　舟木与根一

知恵の輪をいじる時間がながくなり
後美人けっこう楽しい万歩計
年金はループタイが似合います
見落しを狙い小さな但し書き
一発はジョークに包む含み針
旅行けばいずこも同じお手洗い
岸和田市　福浦勝晴

前作改作（一句）
自分から惚けたぼけたは惚けもせず
さくら散るほろほろと散る胃が痛む
ケラケラと笑えばすこし気が晴れる
倫落の渕でごくごく水を飲む
金策に走る途中で犬交る
山荒れる樹騒ぐのんびり明け鴉
大阪市　津守柳伸

夜遊びをプッツリ止めた訳がある
錠前を三回替えてひとり住む
梅林の和服は会釈して通る
沈丁花愛のあかしに触れもせず
女丈夫にされておしゃれにうとくなる
ひたすらに愛して枯らす福寿草
八尾市　宮西弥生

子を産まぬ乳房も好きな子守唄
三寒四温狂ったまんまの花暦
美智子妃と同じ傷もつ情もつ
母と歩いた足跡探している日永
真直ぐで正直でいて嫌われる
傷口がだんだん小さくなる春彼岸
八尾市　高杉鬼遊

六月や隣の鯉に負けたまま
六月の川は彼岸を遠くする
ポットからお茶も出ません妻は旅
留守番をたのむ大事な親がいる
割り勘になると忘れず呼びにくる
桜井市　岩本雀踊子

病院の窓口にある命乞い
一番近い味方の妻を忘れかけ
自作自演幕も私がおろす役
リウマチの女房をかばう雨つづき
貧乏の辛さを子等に教えとく
弘前市　波多野五楽庵

分水嶺越えると深い母の雪
百粍の雪にとまどう標準語
薄命の腕の静脈透けて見え
実生から育てた梅の初蕾
花の坪ぐらいは妻に奉る
下関市　石川侃流洞

縄のれん和む話が待っている

ぽっくり死あやかる母のお念仏
三面鏡の二面が好きなイヤリング
他人の地図ばかり歩いている疲れ
死んで咲く花の割符に用がない

伊丹市　樫谷寿馬

六畳の城にも春が窓の花
裏切った方が配所の月見てる
もの言わぬ亡父だった筈今解る
禅寺に赤靴一つありて寂
禁煙の朋友が益々眩しくて

島根県　小砂白汀

ひと足ふた足三足で飛ぶカラス
羊頭をかかげけっこう売れてます
負けぶりを敵も味方も賞めてくれ
阿呆面さげて並ぶとさくらめき
父の日を忘れていましたそれっきり

島根県　西村早苗

珍しい神話おとなも耳に入れ
散る花の鼓動が造花憎んでる
再就職に父の無精髭がない
扶養家族となり無口な父となる
老齢のストレス犬が散歩好き

島根県　堀江正朗

春の彩素足で踏めばよみがえる
春風の汚した窓を拭いてあげ
バランスの崩れを風にからかわれ
おやすみの挨拶入れ歯はいりません
若さまだ残す動きを指に溜め

島根県　堀江芳子

その昔むかしに嫉妬して女
ままごとのよう夫に酌ぐ春の縁
消しゴムにそっぽ向かれる深い傷
貌かえて故里の風遠くなり
浮気でもするかと盃寝てしまい

岡山県　嘉数兆代賀

姿見を丁ねいに拭く罪を拭く
ひと言がこんなに長い夜にする
罪のない猫がけられて雨季つづく
草に寝て草のこころの中に溶け
手の温い人だとおもう手をつなぐ

堺市　高橋千万子

むきになる話の奥にいる彼女
スミレからバラへと派手に替えた恋
仲直り罪なき母の方が折れ
アンケート浮気したいに丸をつけ
影法師私の荷物持っている

堺市　河内月子

花散ってもとの生活へ精を出す
灰かぶる覚悟でみんな引き受ける
スーパーのカゴが知ってる生活向き
ピアノソロやがては恋に終止符を
ゴーギャンも月もタヒチも夢の中

松江市　恒松叮紅

大学で親の甘さを暴露する
暖房が効いてゴキブリ住み心地
挙式からあとはピエロとなる父権
腹の立つ世相へ老化する背すじ
ファミコンがかごめかごめにそっぽ向く

松江市　柳楽鶴丸

何時までも妻の止り木でいてやろう
昔はよかった出世払いあったから
夢楽し天・地・人皆独占
自称文化人です花粉病
グロテスクな魚へ音痴も舌つづみ

藤井寺市　吉岡美房

やくざ死すうちは金魚が死にました
乾杯のコップに詰めてある妥協
馬鹿になる方が得だと知りながら
男なら迷う筈ない道迷う
男だけヒモと呼ばれる不公平

京都市　松川杜的

中途半端な音で古都の鐘が鳴る
サクラサクラよくぞ日本に生まれける
総入歯それから言えるラリルレロ
つくしんぼお地蔵さんの横が好き
禅寺を禅寺にする石の道

岡山県　土居耕花

胆のうの手術かそうかとは他人
手術してまでも生きたし八十歳で
採尿の管に男を盗まれる
点滴の中に小言が交ぜてある
美智子妃の手術は痛くなかろうに

高槻市　辻白渓子

終電で帰り残業だけでない
万国旗友情結ぶ風に揺れ
記念品贈って職場縁を切り
竹藪は嵯峨野の音で風が抜け
出石焼雪に降られて見に這入り

倉敷市　小野克枝

孝行のかけらを流す里の川
目が合って参千円の暮しから
紫陽花の気儘を許せない女
心とは別な言葉に裁かれる
飾られて花輪の花は無表情

大阪市　西森花村

ツインビルの傍に豆の木植えましょか
鯱鉾も勝手の違う春となり
後輩に席を譲った守衛室
銀貨より銅貨が多い子沢山
芸人の身内に逢えば無口なり

大阪市　本間満津子

旧友と娘に還るティールーム
ライバルとギッコンバッタン青い空
少しでもすこし楽しい内密金

褒め合うてまだ友達になりきれぬ
家計簿に誤算をさせるクレジット
兵庫県　遠山可住

定年へ花鳥風月とはゆかず
民宿の仲居は長靴はいて去に
世を捨てたとも爪研いでるとも見られ
お見舞の嘘へ子供が居て困り
害虫の持ち場へ春の生を享け
美祢市　安平次弘道

ヘルスメーターわが家は女性上位です
手品師の鳩も平和を考える
アリバイはないが悪人でもないぞ
軽いつづらを持って善人面をする
大臣の舌禍本音がもれただけ
米子市　林瑞枝

棒グラフいつも麒麟の首を追う
こんな私に神の下さる椅子がある
隠居所を造る一本杉の下に
子持ししゃも細い未婚の母もいる
背広着るロボットさんを吐く雪崩
富田林市　岩田美代

さよならが下手で春がまだ来ない
花吹雪暗い話が二つくる
どさくさにまぎれた傷に貌がある
筋一本通せば春が冷えてくる
水色の五月に負けぬリボンを結ぶ
岡山市　川端柳子

とことこと従いていったらお手洗
何も彼も許してかすみ草の白
病魔おずおずやって来たなら友としょう
花吹雪けむたい人を遠去ける
一しきりもめてもともと好きな人
東京都　増田次章

真っ直ぐの人生このごろ少し悔い
善い人が不思議に損な役まわり
人間の歴史は誰かが耐えてでき
他人からみればたわいのない悩み
兄弟も友も結論ことなかれ
豊中市　安藤寿美子

花吹雪子守の方がねむくなる
花の雨水玉もようの傘になる
紅椿コロリと死んでなどやるか
天知る地知る知らなんだのは私だけ
吉野山静御前は裾を引き
鳥取県　川崎秋女

哀しみがドッと襲って来た五月
ランドセルの音に昨日が疼きだす
愛の二字忘れてしもた木瓜の花
思い出をひとつ置いてく花の雨
コスモスよ薔薇に憧れてはならぬ
倉敷市　稲田豊作

紋章を子は十字架として背負う

山と積む蔵書の陰に妻貧し
これぽちの才かと原稿紙が笑う
やる気満々男の貌である
定離とは哀しきものよ雲の峰

寝屋川市　柴田英壬子

おぼろ月躍る言葉を聞くだろう
あいきさんご子息結婚
花咲いたばかりの夫婦と会う桜
その桜一期一会を咲き誇る
真心を教えて綺麗絹手毬
困難へ五体揃っている活路

宇部市　平田実男

仕事場の父は師匠の目に変る
ほっとしている目も混じる通夜の席
老人ホーム元肩書を言いたがり
大安吉日こちらの神はアルバイト
パトカーも5キロオーバーして走る

桜井市　河合茂雄

持ち駒も負ければ使い途もない
重箱の隅を残してやる情
小錦の相手は三人分疲れ
パチンコを止めると煙草の数が増え
新聞の予想で馬は走らない

和歌山市　若宮武雄

この辺でお別れします花吹雪
葉桜の下の広さへねむくなり
妥協せぬ男が好きな鬼あざみ
欲捨てた代りが欲しい喜寿の坂
F16一機ゆずって欲しい福祉

和歌山市　西山幸

どの面をつけても春は退屈だ
白足袋がふと脇道へそれたがる
空振りが続いて終らない喜劇
赤い靴いつか悪女になりました
さよならへ交わすジョークの二つ三つ

和歌山市　内芝登志代

頑張ってがんばり通して今ひとり
この辺は傘屋鍛治屋のあったとこ
筋道を通せばけむたい人にされ
ひと言が道を閉じたり開いたり
お互いに器用貧乏を笑い合い

和歌山市　垂井千寿子

若者のビックリ箱に馴れてくる
花束ぐらいで癒えぬ心と知りながら
玉手箱の煙にしない原爆忌
ひとり言言えば心が決まるかも
虫干しのつもりで着物を着よと言う

和歌山市　福本英子

フェニックス痛い約束してしまう
百ヶ日風雪越えた春霞
休み癖ついてしまった艶ぶきん
双子合格西と東へ走る春

金比羅の石段年々高くなる
和歌山市　松原寿子

熱い瞳よたしかに負けた糸切歯
魅力こぼれる黒髪を梳くあたりから
豆腐は四角おんなはまろい愛を抱く
プレゼントがとても嬉しい女です
逢えたときだけあなたのこころ放さない
大阪市　西出楓楽

無くすものないのでこわいものはない
融通が利かない白いエプロンよ
赤ワイン情熱的に酔えそうで
正直な数字をうらむこともある
一寸の虫がわたしに反旗ふる
寝屋川市　稲葉冬葉

東大がなにさ旨いめしを炊く
午前二時帰宅の妻を叱れない
靴下を繕う指が病んでいる
花曇り健忘症にしておこう
万病に効く温泉へ花曇り
京都市　都倉求芽

ハレー彗星より僕にはおぼろ月
さくら餅外はまだまだ針の風
いい声の間違い電話惜しかった
メニュー見て結局言い易いのにしとく
奥様の浮名を映すシャンデリア
京都市　山本規不風

桃の花恋うて桜に誘われる
人妻になり甘えてみたい無理がある
大人です仮面を取らぬまま別れ
知らぬ事にして騙し舟を流す
見限った女に逢うた藤の棚
米子市　林荒介

狎れあいの忘れごっこの今日昨日
ゆっくりと男が作る羅漢像
一刀両断にしてくれたのも悪友
病だれ一会一会と灯をかさね
意識の果てで摩崖仏とならぶ
米子市　菅井とも子

くに訛あの頃の夢捨てました
里心出ると見えなくなる外野
六十の骨へ警鐘うち鳴らす
言い訳は何時も抱いてる亡母の前
散りぎわに桜は母のこと想う
米子市　政岡日枝子

九族の手綱の先にいる新婚
秒針に追っかけられて二十五年
昨日のことはみんな忘れて山眠る
花いちもんめ忘れているか狂うたか
期待外れの鐘すすり泣く様に鳴る
米子市　寺沢みど里

帯締めてすこし固めの花言葉
水鏡あしたの月も予約する

吉と出た日から高所恐怖症
ひれ伏した天狗の鼻が高すぎる
方言の味さわやかな風となり

米子市　田中亜弥

幸せの真っ只中へ母すわる
鮫の歯が恐くて海にもぐれない
摑み取り素直な心くずれだす
向う岸へ運ぶ知恵ならおしまない
一寸法師の箸をさがしに旅の空

兵庫県　辻文平

米を研ぐ妻に野心など見えず
片意地で夫よりほかの愛知らず
福耳へ世の蔭口が届かない
満ち足りて次々と出る老いの愚痴
気休めの言葉で母と鬼ごっこ

近江八幡市　前川千賀子

風薫る猫と同んなじ夢を見る
カップスープで恋の行方は追わぬよう
しかし しかし しかしで凡な生終える
父の眼に桜哀しくなるばかり
恋の季と花も雀も歌うけど

富田林市　藤田泰子

三分咲き五分咲き市場の往きかえり
五十には五十の春が訪れる
星仰ぐ心配ごとが小さくなる
迷う時耳底で鳴る通りゃんせ
据膳がたのしかったも二、三日

富田林市　田形美緒

気が強く涙にもろく生まれつき
鷹を生む欲目にみても私の子
弱点も知って生まれた友情で
聞く耳を持たねば外れる神の声
ほどほどに褒めるのが良い妻の友

名古屋市　越村枯梢

深爪に痛みの残る夜泣きそば
中流を自負する夜の皿の数
鎖一本切れない象でもあるまいに
珈琲カップのやけに重たい朝のうつ
男運なかっただけで才女老い

寝屋川市　江口度

ノーエ節妻の化粧が早くなる
吉報がキリンの首から降りてくる
トイレから戻ると話題変ってる
古里の柿に大きな種子がある
外科手術蜥蜴の尻尾なら生える

西宮市　西口いわを

乱雑な机が好きな原稿紙
たくさんの人に見られて散るさくら
春うらら少し疲れた登山帽
胸の奥恋の記憶はすみれ色
仁王さん怖い顔にもあきてくる

西宮市　奥田みつ子

杖をつく姑に泣き言もう言えず
藤棚を白く塗ってる春の午後
スイートピー墓にも春の話する
金平糖鬼の涙のように見え

楠部彌弌遺作展にて

今もなお白磁に鷺の息づかい
松原市　佐藤藤子

思いつづけて湖は碧さを増すばかり
心なき噂を嫌う花の芯
赤ちゃんを抱きお陽さまと向い合う
一生の願いに弱い父の酒
犬洗う少女に緑の風がある
八尾市　宮崎シマ子

諍いも一つのゲーム老夫婦
心の中写す鏡を母は持ち
むっつりの息子友とはよく笑い
忍の字は頭にあるが血がたぎり
ソックスも薄いのに替え花の宴
今治市　矢野佳雲

凪の日を信じて買うた定期券
四ツ辻を敵も味方もみな通り
食べかねて育った子等の親思い
母にない三面鏡も持って嫁き
父ちゃんは馬鹿だと思う反抗期
守口市　野呂右近

背が寒い同年配の人の訃に
捨て猫の目を見てからの物思い
泣くも武器笑うも武器にして女
ダイヤルを途中で止める日の迷い
尼崎市　春城年代

あんぱん二つおいて机に向い合う
二三行書いてやっぱり嘘にする
神様の思い違いもあるドラマ
ポーカーフェイス心のなかは踊ってる
沈丁花いつまで亡父を慕うのか
島根県　榊原秀子

球根の芽が出た出たと心浮く
笑い声みなぎるわが家サクラサク
恋さがしそんな気にさす春の風
春の陽の匂いをたたむ洗いもの
又逢う日待つ美しい花時計
大阪市　長谷川春蘭

アルバムに残るあの日は幸多し
草餅にひきとめられて長話
開花宣言人より桜わきまえる
倦怠期など無いまま父は喜寿迎う
添え乳の児へ果てしなき未来図を
大和高田市　岸本豊平次

ハンカチに土筆包んでいるロマン
広告はお行儀悪いのが目立ち
痩せたいわ太りたいわと久し振り

いい事が起る期待の星月夜
老人会神と仏と温泉と

大阪市　柳原静香

花冷えや息子に嫁がまだ来ない
桜に飽いた瞳にひときわ白し雪柳
花吹雪私に修養がまだ足りぬ
外孫よりも親しきものに猫と寝る
春愁や故郷へかける虹の橋

兵庫県　藤後実男

雪だるま片目でだんだん痩せてゆく
箸の先何を食べても春の声
定年へ意地捨て義理捨て父の背な
煙草止め父に淋しい外野席
この味はどこかで出された三次会

大阪市　中西兼治郎

合格の母もう着物考える
初出勤起さなくても起きて来る
プロレスの女オッパイ邪魔に見え
二枚目の舌は使ってならぬ舌
宝石の光が女弱くする

姫路市　丁坪サワ子

美容院噂が尾ひれつけて出る
選抜にファミコン熱が少し冷め
お互いの苦労ばなしを聞く陽ざし
世話好きの鴉が仲をつつきに来
姑ならば如何されたかと姑の齢

吹田市　茂見よ志子

発想を変えてみたとて白昼夢
杉苔を間引く指先蟻慌て
姦しい恋の詮議のクラス会
引越した理由は焼場の煙とか
ハイネの詩好きで五月の美しさ

大阪市　古川美津枝

病院の前で大きく深呼吸
仏壇へ一寸会釈の派手を着る
降りかかる花の吹雪は憎うない
見物で鈴なりになる歩道橋
南風一度さそって見ておくれ

橿原市　岩井本蔭棒

山里は主婦の背中を遊ばせず
恍惚が勅語すらすら言ってのけ
答弁の裏も勘ぐらねばならず
口実に時どき持病役に立ち

倉敷市　野田素身郎

満開になったところへ低気圧
一周忌境内の桜今見頃
駅裏の居酒屋やっと落ちつける
嫌煙権人の楽しみ奪う気か

出雲市　原独仙

傷心の肩抱くだけにまた嗚咽
煮え切らぬ返事再婚脈と見る
春盛り生きとし生ける皆弾む

生々庵先生を偲ぶ

佐賀弁をミックスをして訓された
倉吉市　奥谷弘朗

良心を守り通した和が光り
慕う気が妻にあるからあたたかい
元気だけ俺の宝として生きる
損のない足並だけがよく揃い
鳥取市　両川洋々

俺も気違いだろかゴッホの美に出逢う
人妻を慕う鉛の靴をはく
亡命の指にダイヤのありったけ
おんな一匹鬼と指切りしてしまう
綾瀬市　大山と金

早つづく日ねもす茄子と共にあり
いつも逢う人の名前も物忘れ
悪いことせねば勝てない選挙です
六道の辻に茶店を営まんか
熊本市　有働芳仙

警察でやさしい声を聞いてくる
前向きになると面の皮厚くなり
箱入りを貰って倖せですと言う
周りからやいやい結婚しちゃおうか
大阪市　天正千梢

みほとけの寝姿拝む阿蘇五岳
深呼吸公式的な意見出し
潮騒は何語るらんいねがたし
長外套いっぱしの人生語るなり
東大阪市　森下愛論

悪口を素直に聞くほど丸くなり
年老いて不満を内によう溜めず
今だから話せる不倖笑い合い
喧嘩した子と子の中にある意見
柳井市　弘津柳慶

何もかも中途半端な現代子
勉強は第二ファミコンに熱中し
強い事言っても所詮女なり
おめでたよ嫁の吐き気に気をくばり
大阪市　中川滋雀

遍路みち背なの祈りに今日をゆく
言い勝ってみても外様の群にいる
その先を言わぬ笑顔の見舞客
アイロンの余熱ほのかに夫婦老う
玉野市　小谷仙山

かえらない繰言ばかり春ごたつ
親の池子に深からず浅からず
人情が溢れて丸い国訛り
花曇り兎角予定を狂わせる
諫早市　原田メイシュン

梅から桜俺は医者から禁酒され
若い娘の三ツ指どころか立ってわび
苦労して来たとは見えず肥満体
宮仕え離れ女房に使われる

島根県　栂　みどり

Uターンする息子へ花道あけて待つ
幾山河たえて羅漢の顔に似る
間延びした顔半衿のいろでしめ
ぼんぼりの絵はがきでくる花便り

守口市　羽原静歩

幼稚園（一句）
公害の風は知らない鯉のぼり
ループタイ老いの坂道きびしくて
釣り書の中に女の性を見る
菖蒲園苦海浄土の夢を見る

奈良市　森田カズエ

ハイキング妻のペースに歩が揃う
ファイトまだ消えず保険をかけつづけ
子の親になって肩書き欲しくなる
ミカン箱が机だったと老母語る

島根県　錦織文子

来年またお逢いしましょう箱の雛
好きでない柄はタンスで年をとり
虫干のたびに読みかえす軍事便
いくたびか巡りめぐった春の曲

大田市　藤田軒太楼

死線越え受ける恩給の幸思う
この年で土に親しむ過疎の春
またとない縁談娘より親乗り気
新妻の明るさ茶の間湯がたぎり

倉敷市　藤井春日

花咲けば咲いたでつれない風に泣き
出て行けとうっかり言えぬ子に育ち
一鳥一草野生の姿に有る恵み
嬉しくて両手差出すよもぎ餅

今治市　越智一水

女ごころバスが揺れても編んでいる
恋猫の目と出合った昼の月
夜桜へ夫を誘う仲直り
石でさえ春夏秋冬彩粧う

東大阪市　斉藤三十四

酔うた時本音いっぱいさらけ出す
更生を誓う汗ならふいてやる
古都の鹿少し英語も聞きわける
下っ端に好かれる上司出世せず

竹原市　森井菁居

父に似た地声を或る日もてあます
成るようになるさと影も動き出す
行革へだんだん褪せる組合旗
旧道が好き旅人に成り切るか

羽曳野市　佐野白水

沖縄に旅して
沖縄の空米軍機に迎えられ
戦争を知らぬ世代にひめゆりの塔
海軍壕断末の声聞こえそう
自決した弾痕へ血の気引く思い

米子市　小西雄々

カルチャーへ毛並みの良さの語をさがす
跳び越えたつもりの溝へ残る悔い
実力をどんぐりころころ比べ合う
調子よく進まぬ恋へ花を活け

米子市　石垣花子

竹取りの絵がまだ消えぬ竹の節
白寿まだ種を播く日の暦くり
失った時間を言わぬ思いやり
人形に慕われている人形師

米子市　野坂なみ

この島の氏神様は太陽だ
九十九折り越えて展ける春の道
口下手に飾るものなし文字を選る
実年のポッケにひそむ小さい鬼

米子市　青戸田鶴

はるばると黄砂運んで春の風
いぬふぐり空の雫を一つずつ
チャンネルを廻すとグルメ語り出す
そして又亡母の言葉にたどりつく

米子市　澤田千春

ほころびをつくろう月の思いやり
母の影慕う花野に手まり唄
夕焼けに指切りの指うずきだす
赤い靴はいてライバル追いぬこう

米子市　茂理高代

カタツムリ歩くだけでは能がない
幸せと背中合せの今日に生き
おきなさい歩けば運もついてくる
人間が恐いと地蔵の鼻が欠け

米子市　光井玲子

水鏡揺れてわたしを突きはなす
いつからか夫に台本握られる
開かない花のささやき聞いている
雪柳一粒ずつのつつましさ

唐津市　仁部四郎

「忙しいでしょう」を言うとき真心で
新しい椅子に落ちてたリトマス紙
赤信号曰く散歩はぜいたくと
留守番のパパへ電話で特価品

唐津市　田口虹汀

強そうなポーズ三面鏡といる
花と飲み花と仮寝の瓢かな
玄関の時計貫禄見せて鳴り
子は子なりに父の歩幅を読んで住み

唐津市　浜本義美

飾らない言葉こころの温かさ
年金のくらしを義理が脅かし
冗談が本気になった嫁き遅れ
春宵に酌む盃へ舞う花弁

唐津市　浜本久仁於

一生の損は女に生れけり
雇用均等紅一点は忘れられ
傷口へ妻の推理が触れてくる
花吹雪歴史は城のこの辺り

唐津市　久保正敏

鶴を折る少女に春の芽が伸びる
次女の背が伸びて長女の服を買う
靴ずれを知らない強い亀の足
国策は高いレモンを厚く切る

寝屋川市　宮尾あいき

けぶる雨桜を気高い彩にする
息子の新居桜並木と緑い土堤
末息子のスイートホームでおじゃま虫
楽隠居夢みる程に甘くなし

七尾市　松高秀峰

花粉症美人も困る花見時
白蟻のような男に攻められる
だんだんに気の毒になり疎遠がち
打ってみな裏目裏目の人生譜

東大阪市　崎山美子

底流を無視して足元すくわれる
ラッシュ時の流れにとけるランドセル
万歩計に歩くよろこび教えられ
批判しつついつか時流にながされる

西条市　片山明水

逢いに行くハンカチを嗅いでみる
仕事場の灯には大きく映る父
鎖から離れてあとの知恵がでず
連れが来て蝶は隣の庭へゆく

鳥取県　林露杖

すすり泣く女の肩に触れるまい
黒髪を梳き上げ尼の夢がさめ
蕗のとうほろほろ苦く亡母想う
円高も利下げも関わりないくらし

尼崎市　春城武庫坊

花の下世帯話は止めにする
電車の中で話す言葉を準備する
人間の錆がぼちぼちつき始め
ゲンコツで拭いた涙に血がまじる

鳥取市　森田熊生

人がいい方で一肌脱いでくる
疑問持つ子の瞳文化の芽が伸びる
他人から見れば屑かも知れぬ夢
自信ある暮らしおだてに乗らずいる

倉吉市　野中御前

気心がわかり火種をあけ渡す
男運うすい女の太い指
情熱の瞳あつめた箒星
一枚の切符が分けた生と死と

河内長野市　井上喜酔

ボールペン途中で止まる誓約書
でしゃばりが自分のペース見失い
ポケットで拳を握る待ちぼうけ
やせ我慢いつまで続くダイエット

八尾市　山下みつる

スキャンダルあきれる程に誇大化し
ふところに諭吉の居ない日の寒さ
強盗が紳士の顔で来る恐さ
おトイレと女上手な無札犯

大阪府　坂口公子

花盛りちょっとゆすってみたくなり
春嵐びっくり箱の蓋開ける
鍵のない箱の仕掛けに気がつかぬ
白髪へ釣り合う顔のむつかしさ

高知県　松岡三吉

もの思い女は米を研ぎながら
薬局のくすりばかりの医者嫌い
充電の一升ビンが減ってゆく
折詰の中にあなたの嘘がある

高知県　赤川菊野

電卓をあくまで拒む帆前掛
白昼夢さめて内職急かされる
後追いも出来ず一人の米をとぐ
かたくなに寡黙を通す北の窓

芦屋市　竹中綾珠

クラス会泪の出る程面白し
散歩道すみれタンポポ春の道
値段見て買うか買わぬか決める母
親友も私も八十笑い声

岸和田市　清野こう

草餅で賑やか彼岸の台所
卒業の脳裏に残る城の四季
軽々と引受け責任重くなる
愚痴聞いてあげれば治まる老いの胸

倉敷市　小幡里風

ボケの花咲く陽溜りで妻の私語
仏壇に造花供えてパスポート
あの人の心も読めた岐れ道
対決の笑顔に機先を制せられ

大阪市　神夏磯道子

豆ごはん去年のことをよく覚え
マネキンの誇りため息聞いている
空きすぎる腹八分目のむつかしさ
結論はいつも老人ホームなり

大阪市　北勝美

二十一世紀重荷背負うて呱々の声
娘の躾過ぎてもしやと思う親
ねぎ坊主頭揃えて風薫る
レッテルを貼られてからの硬い椅子

出雲市　吉岡きみえ

七十五日噂の処刑に身をさらし
炎えるだけもえて儚ない落椿
冬眠の夢にすまない鍬の先
わだかまり捨てて仰ぐ空無限

神戸市　山口美穂

明日への詩高らかに葱坊主
葱坊主蝶のささやききいている
葱坊主昨夜の夢は赤い花
千羽鶴翔び立つ日はいつ長く病む

岸和田市　古野ひで

早春の輝きルンルン一年生
咲き満ちて花は明日の夢を見る
傷心を優しく包む花吹雪
風有情落花の舞に酔い痴れる

和歌山市　神平狂虎

愛の無いチューインガムを噛み続け
足元を掬う優しい風である
飴玉の苦さを知っているわたし
耳を澄まして還って来ない風を待つ

浜田市　中川幸一

いじくったバランスシートで蛸の足
しくしくと泣いて喧嘩は妻の勝
門札の姓筆太にひそと寡婦
篤実な人と連れ添う味気なさ

姫路市　松浦輝月

花吹雪天上人になる心地
親子程違う妻持ち悩まされ
妻居ない家に吹いてるすきま風
受験期に子無し夫婦のフルムーン

川西市　松本ただし

渦潮の流れの絶えぬ世にもまれ
粋な人もう居まへんな法善寺
吹雪く夜の不倫捕えた逆探知
日本酒が本当に旨い梅一輪

尼崎市　角野かず子

梅雨からの戦に入るかたつむり
むりに穿く靴でシンデレラになれぬ
裏口にまわれば話うまくなる
ネクタイをゆるめ不足をのぞかせる

羽曳野市　中村優

自惚れの美人にさせたペンの罪
御多福が凄い美人と思う鬱
潮満ちてしこりが消えた砂の文字
残照の花道風が押しにくる

寝屋川市　平松かすみ

雨の日も跳躍したい棒グラフ
あれこれと叩くハタキの気儘者
のんびりと出来る夕刊来ない里
百枚のハガキクイズをあきらめず

倉吉市　渡辺菩句

最低でいい莫迦でいい放哉がいい
莫迦笑いしているのど仏見てしまう
天にいる凧は午後からこころの凧よ
どちらもどちらダイヤも山も高すぎる

出雲市　板垣夢酔

旅にまでついて来たのか雨男
快復の箸は鯛の目まで喰らい
定期預金期間は寿命内ときめ
足りぬ具へたっぷり七味唐がらし

岡山県　岩道博友

老骨が花蔭を掃き夕焼ける
時刻表変って再会間に合わず
くすり指見せて引退語る女
税還付貰って通勤定期買う

和歌山市　福井桂香

アップルパイ故郷は白い花盛り
紅白のまんじゅう眠くなる祝辞
ひと先ずは手だけ洗って待っている
間違っていてもエホバに楯を突く

姫路市　人見翠記

雪解けの日射し湯豆腐動き出す
嘘ついてその場逃れる嘘の嘘
花冷えの冴えかえりつつ春半ば
お花見と雪見の出来る四月尽

宝塚市　丸山よし津

ぎっしりと小学生にもある予定
人生のスリルを抜けて来た自信
新入社員花見の席を取る仕事
鉄橋は郷里へ帰った音がする

大阪市　大塚節子

遠足が乗り込んで来て陽の匂い
名人気質奇人と似たりよったりで
生きものは飼うまじ別れのあるものを
気にかかる長いまつげの通夜の女

鳥取県　新家完司

深呼吸して潮騒を抱きしめる
一族を結ぶ九献の酒に酔う
哀しみをゆっくり運ぶ夜の汽車
さわやかな幕切れだった骨拾う

和歌山県　寺田裕美

言う時が来たら言葉がいきづまり
ひょっこりと出逢いを想う花の道
荷車よ石ころ道が恋しかろ
足元を天狗の鼻がじゃまをする

和歌山市　中島正博

淋しさを隠す多弁とは知らず
たった今約束したよりいい話
温室の花は打算の色で咲き
神様も賽銭箱の音が好き

羽曳野市　田中隆二

悔い一つ流してくれぬ小糠雨
漁火の向うに亡父の唄がある
春愁や単身赴任の辞令出る
おっさんの屋台にうまい酒がある

和歌山市　坂部紀久子

情のない女は世話をやきたがる
マイペースこれも一つの言い訳か
小銭入れ五百円は小銭かな
日本人でも日本の着物畳めない

弘前市　田中叶

屋台出す一番星の見える頃
先生のおごりで食べたソバの味
言うことを聞いた時にはもう末期
病院の廊下の窓の春の雪

鳥取県　広本文子

坂道で人が勲章捨てるとき
酔いしれて白もくれんの精になる
ときめきに揺れる花芯に出逢わねば
おだやかな淵の流れを見きわめる

豊中市　田中正坊

もともとは誰のものでもない地球
鮭たらこ目刺し男の市場篭
小さ目の椅子を選んだ二度の職
エンジンがやっとかかった二度の職

西宮市　草刈堕駄

貧しさが涙となって慰める
エメラルドよくよく見れば蛙の目
春が来た僕の財布は冬のまま
低能を書き忘れたる血統書

和歌山市　堀端三男

花の下隣の女も酔うてはる
花の下年休とって来た夫婦
花の下ゆっくり遺言考える
楽園を修羅の巷にしたりんご

和歌山市　後藤正子

ボタンひとつ大切にする作業服
不用意な言葉を捨てる水たまり
コンパクトのぞき自信の程を知る
ためらう母を一番前に座らせる

高槻市　竹内花代子

老母と娘の無口へ暮れる春炬燵
飯つぶを貰いに走る喉の骨
葬儀参列にやきもきさせた私鉄スト
満開の桜を車窓で見る喪服

大阪市　鈴木節子

どの絵馬も入学させたい天神さん
花言葉芝居上手に咲き誇り
子離れは出来てる筈のお臍の緒
母と子のはなしの中にいちご皿

尼崎市　奥山美智子

手鏡はわたしを隠すためにある
書き足りぬ自画像かけて酔うている
ひと言で天にも昇る心地する
母と子の願いはひとつ星光る

岡山市　時末一灯

愛情へつのる不安よ流れ星
少年の瞳がにごり街にごる
反対も同じミカンの皮をむき

大阪市　河井庸佑

嘘が嘘うんであとへはもう退けず
お互いに面子たったで妥協する
逆説を出して相手の出方見る

新宮市　川上渓水

脳ミソのどこが違うか出来不出来
皮下脂肪金が無いとは見てくれず
折り鶴の数へ福祉はついて来ず

鳥取県　清水一保

還暦という卒業証書なら要らぬ
文化勲章お前も貰えほととぎす
考古学太古の恋も掘り起こす

笠岡市　松本忠三

この頃の父ちゃんどうかしてるわね
鼻薬きかせても駄目筋違い
難しい年頃でありほっとけず

岡山県　直原七面山

類焼は隣りまで
正論を妻は吐き
案持っていて黙り

西宮市　野呂鵜汀

消える迄見送る愛はもうもたぬ
ハエ叩き叩けぬ老いを今悟る
手におえぬ子が一番の親思い

神戸市　仲どんたく

老木の意地空洞のままに咲き
愛犬に今日の不倫をなじられる
胸くんで対峙している明日の地図

浜田市　佐々木裕

余生への布石の一手定まらぬ
面白く無い日風呂の湯かきまぜる
曇のち晴れて孫抱く若夫婦

大阪市　黒田真砂

土に帰る落葉を焼いて居る安堵
遠来の友をねぎらう花ざくろ
生きて居る倖せに酔う祝い唄

町田市　竹内紫錆

新調の服でも日々のスポーツ紙
頭やわらか動脈は硬化中
追悼記故人の知らぬワープロで

兵庫県　中田白李

星の降る夜は迷いが深くなる
献血へ並ぶと背がシャンとする
米櫃の中に勲章錆びている
高石市　浅野房子

歳月が似た者夫婦にしてしまう
菜種梅雨人恋しくて受話器取る
映画館出ると静かな春の雨
仙台市　川村映輝

芸人で得た人気で立候補
薬ろくに飲まずせっせと医者通い
無駄のないくらし息がつまりそう
大阪市　藤田頂留子

雨も良し裏番組は時代劇
参詣は露店出る日と決めている
つり橋に来ても女はゆずりあう
岸和田市　原さよ子

仁王さん桜吹雪の中に立つ
先生が好きで数学好きになる
お隣も鍋物らしい換気扇
岸和田市　芳地狸村

煤とりの灯り厳しい墨づくり
外人にイエスとノーでこたえてる
花もよしぼんぼりもよし城まつり
福岡県　横地雅風

愛される党とは厚かましい自信
盆栽は虐め抜かれて愛される
岡山市　行吉照路

背伸びする長女に母が旗を振り
ある誤算笑顔の仮面とは知らず
出向の燃える抱負に触れる酒
島根県　松本はるみ

からませた指が知ってる即興詩
さりげなく使い減らした糸切歯
月と歩く急ぐ用事でないわたし
和泉市　岡井やすお

一日を生き一日の幸に会う
小笠原トイレの作法まで言わず
虎猫も所詮猫だと諦める
島根県　藤原鈴江

悩んでも泣いても現実には勝てぬ
和を保つ苦心もくずれてゆく自虐
三絃の道を選んだ猫の皮
姫路市　大原葉香

石仏が千の思いで立ち並ぶ
年頃の娘がいて一家の灯がまぶし
朝刊を午後に読んでは絵にならぬ
岡山県　二宗吟平

一畳の城でなごめる遍路宿
八十を二十の孫がたしなめる

納経を背負い心もシャンとする
出雲市　園山多賀子

花曇り昨日の誤解融けぬまま
古里を捨てた娘に咲く枇杷の花
蜃気楼旅を育ててくれるだろう
尼崎市　西村かすみ

春うらら一駅歩く市場篭
町はずれ初老が通う喫茶店
会いに行く妻の指紋を消してから
岡山市　井上柳五郎

本心を聞くまで手かえ品をかえ
秒読みへもう退けぬほぞをきめ
焦点をしぼればやはり金のこと
島根県　松本文子

昨日今日嵐の音を聞きながら
笑み一つずつ消していく白い数珠
明日埋める文字を探して湖に立つ
大阪市　坂本仙吉郎

五月雨を外して最上の船遊び
孫にやる行李の底の柔道着
七歳の少年剣士に面重し
島根県　大森孝華

花の雨地蔵に願う一ひしゃく
春雨の湯気立ちのぼる馬車に揺れ
念仏の虹にとけ合う手の温み
島根県　岸本輝水

この辺でダム反対が腰を折り
献眼の柩の涙拭いてやり
ウインドに写した姿だけにする
境港市　細木歳栄

美しい心に似合う面欲しや
合い部屋の女患それぞれ影を引き
足跡もたがいちがいの人と添い
高知県　曽我部裕

内股が少し気になる好男子
旅に来てまでバーゲンをのぞく妻
父も母も癌で亡くしている自覚
羽咋市　三宅ろ亭

音無しの構えができるゆとり持つ
満足感なし飽食の日々の果て
春雨に緑の伸びるスピード感
和歌山市　山川克子

めんどうな話はやめてやと酌がれ
Sサイズにも Lサイズにも悩み
御主人の黒子の場所を知ってるの
貝塚市　行天千代

一人居の無言のままで今日も暮れ
雪柳一枝欲しい通り道
孫に来る手紙丸文字漫画文字
大阪市　塩田新一郎

オクターブ高い挨拶久しぶり
御立派な御体格ねとしか言えず
一坪の庭に梅東風桜東風

松原市　小池しげお

まだ思案つかない儘に桜散る
ぼろ口はほんまかいナと梯子酒
兄弟のしこりが解けた男泣き

西宮市　津山冬子

久し振り友も出世をしておらず
孝行に白南天の箸を買う
花の頃行くと返事の母が逝き

寝屋川市　堀江光子

白酒のおしゃべりを聞く桃の花
住職の都合でときにずれる鐘
墓参もう日帰りにする里帰り

寝屋川市　岸野あやめ

お人好し味方にしてる頼りなさ
患いを抱く身へ旅の話など
福相印あつらえてから落目なり

交野市　山本テルミ

社会人一年生であるファイト
親切にゆずってあげたバスで酔い
お好みやき女同士の気が揃い

鳥取県　土橋蛍

ぬくもりが乳房の蕊にこみあげる
ふるさと慕情雲が流れる陽が沈む
明日も生きる今日のツリ銭がある

大阪市　板東倫子

アホなことするなと言いたくなる事件
四月馬鹿に興じる人の外に居る
春の雨単身赴任の人送る

大阪市　吐田公一

控え目な言葉の中に母の芯
本当の自分の顔がないピエロ
身を捨てる覚悟を母はいつも持ち

島根県　北川民子

母の知恵ミカンの皮が干してある
まだ固き桜の下に鯛焼屋
わたしが病むと秒針まで止まる

大阪市　北山悟郎

セールスの笑顔の罠に丸い背な
指切りを信ずる孫に廻り道
ホテルから出て店屋もん口に合い

大阪市　渡部さと美

男性に負けられません肩パット
いずれ子は出てゆくものよ夏みかん
頑固者ほめてくれるを背で聞き

豊中市　奥田満女

下る利子上る物価は春四月
アンテナで街の雀は恋をする

キリストはワイン牧師さまは酒
大阪市　松尾柳右子

一応はうなずいている新社員
冷蔵庫きれいにさらえ雨つづく
老眼鏡頭にかけて探してる
大阪市　山根いつを

世のうつりマッチも隅へすみへ寄り
缶詰めとカン切りみたよな夫婦居る
遠慮してなんにもたべてくれぬ客
豊中市　上田登志実

灯明のゆらぎ魂のある如し
散ってなお優雅な色の花筏
豊満な胸が見えそな服装う
神戸市　山片紀雄

双方が平和唱えていくさする
日本で異人館撮る坂の街
咲く花に散る花に酌む独り酒
富田林市　松本今日子

男にもリボン着けたい均等法
春炬燵かこんできこえぬ老い二人
ままならず春の愁いを菜種梅雨
大阪市　町田達子

黄砂の夜中国偲ぶ朧月
風化した愛なつかしいモカの味
旅路まで噂話の好きな女
和歌山市　細川稚代

招かれた時から迷う帯の色
ライバルはもっと大きい筈だった
天国で果たす約束ある別れ
和歌山市　玉井豊太

辻つまの夫に嘘が出来すぎる
折れて出る今は息子の持ち駒で
峠越す祭りが近い寿司と餅
大阪市　稲葉星斗

やっかいなお布施拝観京の寺
一本のさくら寮にも春が来る
西宮市　藤村宏子

生活の疲れがのこる橋の下
虹の橋甘い生活つづかない
高知県　小澤幸泉

卒業試験ただ黙ってペン走る
実年の言葉は知らぬ朝の靴
島根県　城角鶏生

ご老体よもぎ摘むのに狩り出され
曲っても唯我独尊の一人っ子
富田林市　新開千代女

引き出しに一つ残った耳かざり
独り言耳遠い人返事する

自選集

高橋操子

足音もなく秋が来る孫が嫁く
愚痴だとは知っているのに出る涙
御長寿の陛下のお食事にまなぶもの
びっこでもええわといたみやっととれ
春の陽がまぶしい試歩へ沈丁花

八木千代

旅の中ほどから本に庇われる
火を逃げてたどり着くのは母の森
神の木へ斧ふりあげたこともある
声高に話しはしない峠の樹
実年に花たまわらば曼珠沙華

小出智子

根負けをしたのか雨が止んでいる
思い出と重なる飴玉口にあり
息子には話しておこう川の幅
風はみどり侮り難き体重計
花とケーキ買って忘れることにする

月原宵明

ややこしい話は酎ハイ嫌いです
交通の腕章花見の渦に立ち
末席の正論酒が切れている
いい人と言われただけで忘れられ
恋一つ失った日の糸柳

金井文秋

百兆越す借金があり富める国
栄枯盛衰建て増した家を売る
意地悪なパズルで人生の指針
お嬢様指向へマナー出来てない
ふるさとを宅急便が近うする

尼緑之助

エンジンがかからぬ煙草三本目
地獄耳過密日本を走る風
犯罪も酒も同権春あらし
進　入　卒　ああややこしい春の幸
個利個略国会という伏魔殿

仰山に襁褓がかわく団地の窓
鍵っ子で育ち根性と意地を持ち
九分九厘きめてとなった左きき
つたなくも足跡残す句を書こう
ついほろり甘い涙にだまされる

藤村〆女

水無月の水底に映ゆ真珠貝
宝石展四桁のゼロ安く見え
鼻折ってからの天狗は親しまれ
大黒天一生の荷を担う笑
過去未来くるくる廻る救急車

川口弘生

カットグラスに海の深さを見てしまう
水に流して呉れと貧乏くじを引く
向い風寄り添う人がひとり居る
地図かいてもろてラーメンのうまい店
苦手意識は花束だけ置いてくる

正本水客

合格へのびのび春の風を吸う
直線の道にはわなが仕掛けよい
鯉のぼりもつれたままに風かおる
騒音の保証へ耳をとぎ澄ます
突然のポストへ椅子がなじまない
満開と書けば花びら散りかかる

小林由多香

風が舞う七難八苦我にとや
数を読むひとつのことにこだわって
猫だけがちょこんと留守をする在所
みの虫も住居標示が欲しくなる

黒川紫香

男の貌で時に火の付くくじも引く
妻と灯を消すと甘えがよく判る
明日のある生活に夫婦背が丸い
流転輪廻笑顔で終るむつかしさ
積立ての苦労に嫁がいてくれる

市川鈴魚

白紙にはもう返れない返せない
わが道を行くひたすらにひたすらに
惚れぼれが嬉し涙にふとかわり
褒め上手とお世辞上手が差し向い
古切手に難民救済手伝わせ

本田恵二朗

人の情うすれる如く夏が降る
故郷の四季がだんだん消えてゆく
善人の笑顔が喋る京の坂
中国に行くことのない詫びがある
もうお世辞言うことも無い歳となり

児島与呂志

盛者必衰宮殿を追い出され
諭吉・稲造・漱石の世に巻かれ
何様じゃなし表札は人並みに

工藤甲吉

見られては困る拳で拭く涙
円高の差益ちっとも市場籠

大矢十郎

心なく恩師へ健康食を説き
決心がつかず電車のドアが開く
少しみじめを少しいたわる他人さま
物言えば損自治会の役が来る
テトラポット私の夢はそんな役

野村太茂津

抽象画の闇に蠢くもの一つ
数えると靄の中なる詩語幾多
訊ねると怒る作者も解らない
本尊が解らぬまして他人は目眩する
桂馬跳び思考で男まだ幼稚

長野文庫

明々と点けて桜を眠らせず
来年の用意今年の花撮す
親切で呉れるコブ茶をもて余し
目的に反し副作用の方に効き
塾へやる親は高小出たばかり

山内静水

葬式用の写真飾って満ち足りぬ
ジャンケンポンすれば負けると知りながら
よく笑うとても和服の似合うひと
お受けします私でよかったら

古稀を祝われて

泣いてたまるかチャンチャンコ着せられて

藤井明朗

喜寿からの余生働く詩がある
孫　子等へ弱気は見せぬ喜寿祝う
朗らかに演出家族の和を保つ
日本の平和へ世界の目はきびし
働ける幸しあわせな喜寿の春

水粉千翁

水ぬるむ沼々として悔い流す
捨て切れぬ筆の重さに血が騒ぐ
ひと呼吸止める墨痕淋漓たり
目を閉じて語り尽くせぬ花の下
一服をせがんで孫の背が直ぐい

米澤暁明

四月馬鹿だって言ってはならぬ嘘
野の花で飾ってこそのおしゃか様
風船に知恵はいらない風まかせ
うぬぼれと知らず負け犬とも知らず
世はまさにちょっと行てくるパスポート

市場没食子

嫁が嫁がと嫁奉る歳ぞ憂し
勉強が出来るでいじめっ子が来ない
御近所にお手本がありなさぬ仲
合格不合格一括絵馬を焼く煙
パンパース未だもないうちからさされ

川柳太平記 (97)

川柳の群像

今井鴨平

東野大八

鴨平は本名今井俊二。明治31年2月11日岐阜県加茂郡東白川村に六人兄弟の長男として出生。高小卒業後、地元の白川鉱山の一労働者として働く。適齢で徴兵検査を受け乙種のため、長野県松本市の魚問屋で五年間勤め、主人の許しを得て長野県上松町の叔父をたずね、同地で妻帯して魚商を開業したが失敗、菓子商に転業、これも失敗。静岡県の製糸工場に就職したが生活苦にさらされた。この間、彼の私生活を支えたのは短歌だった。

昭和2年岐阜市に移り新聞配達をし、一子を抱えて妻も日傭いに出る等して苦闘をつづけ、昭和20年米軍の爆撃により家を失い無一物となったものの、屈することなく生活協同組合をおこし、専務理事となり戦後の生活物資の獲得と配給に全力を尽し、その協組の解散後、その実績と人柄をかわれ山新青果㈱に招かれやっと生活も安定した。

―暗い納戸の灯に女いくたりか老け　鴨　平

これは郷土東白川村の合掌作りの生活記録を捉えたもの。また協同組合時代には

―草の実の春ある土をうたがわず　鴨　平

を作り協同組合運動の哀歓をのべている。

岐阜市には大正11年ごろ柳誌「よのころ」があり、昭和7年「こがね」に継承され終戦直後、岐阜川柳社が結成され「川柳鵜篭」(篠田半面子編集)が創刊された。この柳誌は間もなく「川柳うかご」と改題され、その三号(昭21・5)から鴨平が編集に当った。孔版12頁のものであったが、保・革寄合世帯の柳誌であった。このため鴨平は昭和23年8月うかご付録として「新川柳会報」を出し、現代川柳志向の意志を明らかにしている。

「詩人の感覚は、何物にもとらわれない自由なものであってよい。よし、川柳という形態の伝統的なレールの上に乗っているにもせよ、近代的感覚がそこに求められない道理はないはずである」(同誌〝鵜の目〟)

昭和21年川柳鵜篭が発刊された時点で、清水旺夕・金田眸花の「川柳花火」が岐阜・大分二元編集で創刊され、現代川柳運動に大きなくさびをうち樹てた。鴨平の革新川柳はこの刺戟をうけ一段とエキサイトした。その具体的な鴨平の現代川柳運動への志向は、さきのうかご付録の「新川柳会報」を改め、昭和28年1月「人間像」の創刊で開花した。

かくして昭和32年5月全国の革新川柳派を糾合した現代川柳作家連盟創立総会が東京で開かれた。河野春三、山村祐らの現代川柳派のリーダーたちは、挙って鴨平をその初代委員長に推した。そしてこの機関誌「現代川柳」(昭32・7創刊)がスタートした。

「今井鴨平は現代川柳連盟創設以来、毎年の総会における役員改選で、常に圧倒的多数の票をもって委員長に選ばれ、文字通り終身委員長であった。彼がそうした人望を負うに至ったのは、現代川柳の母体となったとみられる一九五六年の岐阜における当時のいわゆ

る「詩性川柳」派有力者の全国的会談で彼が長老として、また「まとめ役」として頭角をぬきんでていたことから出発したと想定される。もちろん同時に戦後早く「うかご」を主宰発行し、さらに「人間像」「創天」「地上」と次々に革新的柳誌を発行して実作家としての資格を十分そなえていたことも、人望の一原因を成した。第二年以後は、それに加えて現川連のために私財を投じて惜しまぬ人でありかつそれだけの実力を有する人であることが有力な理由となったと思われる」（「川柳現代」No.17〝今井鴨平追悼号〟石原青竜刀）

しかし現川連はこの昭和31年のスタートの時点では、一見まことに華々しいものがあったが、六年後の昭和37年には「現代川柳」第33号（不定期刊）も全く生彩なく、同年の現川連第6回総会では、その発行継続の熱意もなく総会も無気力そのものの会合に終った。

この原因は現川連の加盟有力者が、委員長の鴨平一人に現川連の運営を押しつけ、めいめい勝手に自己の柳誌経営に打ちこんでいる現況に由来する。口にこそ出さなかったが、現川連会員のこの無責任さにさすがの鴨平も肚に据えかね、昭和37年7月「現代川柳」を「川柳現代」と改め、その創刊号を世に送った。そして翌年の第七回総会で「現川連解消・現代川柳懇話会への移行」という爆弾提起を行っているが否決されている。

「川柳現代」は鴨平ひとりの独立発行で、しかも月刊であった。それにもかかわらず不定期の前身であった「現代川柳」よりもはるかに内容は生彩があった。

鴨平は昭和39年2月10日旅先の岐阜県郡上郡白鳥町で急逝した。享年六十五。このため鴨平が手塩にかけた「川柳現代」十月号は、〝今井鴨平追悼号〟とめいうつ百余頁の大冊（通巻第十七号）をもって幕を閉じた。この特集号は鴨平の同志清水旺夕（現在俳人冬視）の献身的な奉仕によって生れたものだ。

「生え際の薄い頭髪、やや突っ張った頬骨にてかてかとした顔、句会の満座の中にあぐらをかいて、やや巻き舌で駄洒落を飛ばしている菜っ葉服を着た痩身の中年男……それが後年の現川連委員長、今は亡き今井鴨平氏の映像である」（今井鴨平追悼号寺松凡石）

「一方、現川連自体は、ノウノウとこの鴨平一人にオンブし、委員長に鴨平を推しつづけ重任また重任で七選八年を無為に送り、年一回総会を開くだけになってしまった。現川連会員のすべては今からでは遅いが、セメテ衷悼の心を中心に深く頭を下げるべきである」（同・石原青竜刀稿要約）

鴨平は川柳は民衆的文芸であると確信し短歌を離れ、川柳に傾倒し新しい短詩型の一行詩としての川柳革新に打込んだが、柳樽には眼もくれず、また評論らしい評論も皆無であった。そして晩年は俳誌「青玄」に走り、そして「おれの句集を出すにしても、それに川柳という名称を入れないでほしいものだ」といい「作品に推敲は無用だ。心に思ったままの一行こそが短詩型作品の真だ」と語ったことなどを筆者はよく記憶している。

鴨平の死の直後、鴨平の夫人は筆者に屈托なくこう語っている。

「句集は息子でも誰でもない私の今井すうの名で出します。とうちやん（鴨平）は、食うや食わずの暮しの底で短歌や川柳に打ち込んで、金もないのにそんな本を作り続けて苦労した。そのくせ貸した金や、新聞代の集金のような貰う金まで気の毒な人だとようとらん。そんなあの人が一生懸命に作ったうたは私こそが面倒をみてあげねばならんのです」

鴨平句集はかくして生れたのだが、亡き鴨平自身にしても、こうして出た句集こそ、おれの本当の本だと莞爾と微笑をもらしているように思える。晩年の作。

―杖曳けば悪鬼の相の既になし　鴨平

★次回は「山本浄平」

誹風柳多留廿六篇研究（二十五丁～二十六丁）

八木敬一・鈴木　黄・石田晋一
南　得二・小野真孝・本多正範
石田成佳・大屋六郎・多田　光
故岡田　甫

422 **てんくり返しする傘を伊勢やかし**

八木＝「でんぐり返しする傘」とは、おちょこになる半ばこわれた傘であろう。

川柳では、伊勢屋―ケチ、のパターンが決っている。越後屋の豪勢な貸し傘とは違って伊勢屋のケチな貸し傘である。

石田晋＝賛。

ひろげるとひつくりかへる傘をかし　一七42

多田＝賛。**岡田**＝同。

423 **天の網間男蚊屋て押へられ**

八木＝「天の網」は、『老子』第七十三章にあり、悪事には早晩必ず天罰があることをいう。

間男が逃げそこなって蚊張でとり押えられる、これを「天の網」を作って表現した句。

石田成＝賛。

饅に当って即死とハ天の網　五〇39
天の網間男蚊家でとつかまり　四一31

多田＝賛。**岡田**＝同。

424 **しらみにたとへかつのこてしかられる**

八木＝今はシラミもいなくなったが、本句時代には多かったであろう。変な風習だが、シラミをとると口の中へ入れ、「プチッ」とかんで捨てた。その「プチッ」を数の子を食べる時にシラミに例えたので叱られた、という句。

小野＝虱をつぶすのは両親指の爪ではさんでつぶすのであって、そのプチッという音が数の子をかんだ時の音に似ているのを言ったものでしょう。

多田＝賛。現在ほどではないが、やはり貴重だったのであろうか。

岡田＝同。

425 **世渡りもさま〴〵股をくゝる也**

八木＝よく知られた「韓信の股くぐり」の句。

石田晋＝大井川の渡しの句ではないか。川越人足が旅人の股にくぐって、かついで渡す。

南＝同右。

二タ宿クはまたをくぐって世を渡り

またぐらの首が取レると遠江　一六29　篇二38

多田＝右同。**岡田**＝同。

426　**あくぬきを〆たので下女がんづかれ**

八木＝句意、はっきりしないが、柿の渋を抜く灰汁桶の蓋をしめた（所をみつかった）ので、下女のつまみ喰いがみつかってしまった——というのであろうか。

大屋＝「灰汁抜き」には「純粋」そのものの意があります。「しめる」は「手に入れる」「物にする」、「かすめとる」、「交接する」、「釣りあげる」などの意があります。

本句は、下女が「まじりっけのないもの」「純粋なもの」たとえば本珊瑚玉のついたかんざしとか、本絹の襟掛けとかいうもの誰かにもらって身につけているので〆めたので）ハハアン、さては色男の好いのでもできたなと感付かれた、という意味ではないでしょうか。

多田＝大屋説のように思っていました。

岡田＝ハッキリしない句ながら、やはり大屋説あたりか。

427　**役者附娠どれ見せな〳〵**

八木＝誰かが「役者付」を手に入れてきたので、嫁も早く見たがって、「では見せて」といっているのであろう。

石田晋＝芝居のこととなると、平生は控目である嫁も夢中になるようで、当時の婦女子が芝居に熱中する様子を嫁にたくしてよんだものとおもいます。

多田＝賛。**岡田**＝同。

428　**隣へ嫁か来ると聞キ病ミ出し**

八木＝同様な適齢期の息子が当家にも居るのであろう。こちらはまだ決った女性もなく、ノイローゼになってしまったのであろう。隣へ嫁がくるという情報が発病の引キ金になったのである。

鈴木＝異説をのべれば、息子の母親を考えてみてもいいような気もする。

南＝病み出したのは娘と思っていました。隣の息子をかねて思っていた娘、病気は労咳。

ろうがいのしさいかならずとなり有　一八16

小野＝片思いの隣の娘と思っていました。

多田＝賛。

岡田＝同。

429　**其名も月の色人を両度買**

八木＝「其名も月の色人」は、謡曲「羽衣」からの文句取り。

句意は、美しい遊女に吉原の二度の月見の紋日を二度とも仕舞ってやった、という句。

多田＝賛。**岡田**＝同。

二十六丁

430　**歯ハたゝぬはつ神詠も岩ほせ**

鈴木＝白楽天の故事による句。楽天「青苔衣を負いて巌の肩にかかり、白雲帯に似て山の腰をめぐる」。住吉明神漁翁「こけごろも着たるいわほはさもなくて衣着ぬ山の帯をするかな」。

要するに白楽天が住吉明神の威徳によって日本から唐へ追い帰されたことである、との意。

神詠にこりて交るき船斗　二七7

大屋＝賛。

海ィまん〳〵とこいで来てはじをかき　安六松2

多田＝賛。

（岡田先生御病気のため、当分パスして行ないます）

黒川紫香選

鯛焼きふたつ買って見舞に妻がくる　長岡京市　木本如洲
花の窓おとこをひとりずつ想う
生き方が下手でペダルを踏んでいる
つまずいた石はこころをもっている
菜の花の道を曲って墓地に出る　尼崎市　福田礼子
雨の日の女と思う沈丁花
子の育ち見守って来たもめん針
○印が多い手帖で忙しい
髪切ると別れが軽く言えそうで
終点で降りると磯の匂う町　熊本県　大川幸子
平和ですブランド品に身を包み
田植唄等は知らないコンバイン
乾杯はまだ早すぎる遠花火
弁当が増えてるたのしさ忙しさ

円借款どんな意味だろ辞書を引く　大阪市　清水康恵
こだわっているのは私ひとりの絵
三猿を使い分けてる妻の椅子
もうすこし強くおなりと母の鈴
花屋から優しいことば持ち帰る
すわりだこ女の歴史ものを言う　藤井寺市　赤木和子
桜にうかれて帽子が喋りだす
見切り発車悲鳴ひとつが残される
好きになりそう返信はしたためぬ
優しさを量ろうてのひらの葉書
ではさようなら船頭が気にいらぬ　八尾市　高杉千歩
一輪のぼたんの一生画布に埋め
どの恋も不発四コマ放浪記
糸電話おとぎばなしが続きます

モチーフが突如浮んだ波しぶき
長梅雨に安否気づかう赤電話

久留米市　鶴久百万両

フランチェスカの鐘が流れる丘が好き
売られたケンカ買うわと妻も負けていず
きみと歩く五月の空に修羅はない
ラブコールに誤算があった魔女の鬱
駅ひとつ乗り越す恋もまた楽し

佐賀県　寺中三枝子

一直線に歩いてふたり輪にならぬ
ペンで切るなどといやーなことを聞く
意地をはりひとりぼっちの夜がくる
おぼろ月のような私にある魔性
バラードの調べに浮かれ雨期がくる

高槻市　河瀬芳子

生きざまで亡母は答えを出している
おふくろの腕に馴染んだ和庖丁
翔ぶことを赦して呉れぬ薬指
不死身ではないロボットの生あくび
梅づくし並べ南部の梅の里

大津市　安田志津

ふまれ咲く草へも土の思いやり
見舞客身の上相談して帰り
掘りかえす土がいきいきしゃべりだし
情熱をラストダンスにもやし切る
野仏のどなたも春でいいお顔

熊本市　宇野昭代

キズついた私に温い母の膝
サバサバと発つ子へ母は物足りぬ
おねだりの謎へとぼけた煙草の輪
三代目少し冒険したくなり
連休の雨に家計簿ほっとする

熊本市　永田俊子

花吹雪一期一会の人に散る
春の部の幕風が引く花吹雪
せっかちがストーリーの先を読んでいる
ゆれ戻る柳に筋目つけている
開け閉めの気配に淋しさ分かち合う

西宮市　紀市郁栄

誕生日盃の数だけ過去がある
競輪の配当妻に知らせるな
月を待つ花の在りかをさぐらんと
どこか抜けてる主婦でみんなが寄ってくる
見送っているのに男振り向かぬ

富山市　舟渡杏花

星影のワルツに乗ってる老体操
小説を地で行く始発のベルが鳴る
再会へ駿馬がロバの貌でくる
三振を演技と見抜く目がひとつ
風下に育って共にたくましい

東予市　小山悠泉

ライバルに我が社に欲しい人が居る
過去帳を繰れば仏の灯がゆらぎ
返り血は覚悟赤旗振る度胸
家計簿も息つく暇がない四月
花冷えへ屋台のおでん売り切れる

名古屋市　藤井高子

許すしかないと鏡は言うけれど
駅の灯へ出逢いと別れいくつ積む
温い瞳へ問わず語りに身をさらす
還暦に新の絵筆で虹を描く
自叙伝に化粧回しが目立ちすぎ

堺市　桜沢あか里

菜の花の黄色が好きな春帽子
寡黙なる大樹の下の思いやり
看板の下でピエロの待ち呆け
道祖神曲りくねったとこに立ち
雨しとど友と電話が長くなる

岡山県　山本玉恵

うれしい事聞きもらしてからの耳鳴りよ
萌えたがるものへ恵みの春の雨
今日の夢拾い集めて詩にする
握りしめたこぶしに悲しい風を見る
言い訳のもつれにコーヒーの苦い味

京都市　松川芳子

気使うてうるさがられて恙なし
恋少しあたためてます春の宵
あのセンスちょっと盗もう喫茶店
ランドセル一年生という重み
ふる里を持たぬ淋しさ旅が好き

吹田市　井上照子

音大をくぐるピアノの音続く
置き薬なんに効くやらある安堵
春がすみ絵心さわぐ渡月橋
還らない友を弔う雨が降る
水蜜桃唇つけてもの思う

和歌山市　桜井千秀

とっときを着て出てやっぱり雨にあい
目立ちたい日の足音は軽くする
梅雨の窓身近な自然と対話する
口ごもる返事は水を向けてやり
判断が先立ちやる気に影がさし

富田林市　田原久子

人恋えば海鳴り遠し桜貝
ライバルの心は読めぬコンピューター
傷口の深さ女をしたたかに
女みる女の評価手きびしい

尼崎市　丹下玉子

春が逝く死蝶抱いて嫁眠る
弔問の客の目をひくチューリップ

下駄箱に帰らぬ人の靴がある
びっくり箱の底にひそんでいる情け
尼崎市　児玉歌子

余白にはちゃんと爪あと残してる
両親を座らせて会う連れが出来
帳消しにすると匂わす男の手
自前では決して飲まぬ聞き上手
京都府　木村たけし

蟻の道ときどき邪魔な森がある
笑ってる横顔春を知っている
気の多い鬼を叱らぬ石だたみ
あいまいな暮しに馴れて旬の四季
高槻市　笠嶋恵美子

海の青さに身を沈めたし珊瑚礁
散り際の勇気与えてくれる花
花の下愚かな死など思うまい
美しく死ねる小石を積んでいる
唐津市　浜本ちよ

蕗のとうフライにぬたに春を盛る
心開き話せばみんな翔びたがり
四季の花咲かせ豊かな人が住む
堂々と女名前で猫と住む
西宮市　松本一郎

古傷が時効にならぬクラス会
約束をやっと果したえび料理
トップの座つかみ孤独に耐える椅子
懸命に生きて出世に遠くいる
竹原市　信本博子

腹いっぱい言葉を食べて満ち足りる
子が巣立ちデジタル少し怠け出す
おぼろ月女の涙見てしまう
人信じ人形愛し花が好き
高松市　竹川憲一

花盗人とっちめるには惜しい月
ジンタで掻き立てたとて象の芸
子を持てば雀も朝が忙しい
電話機にただ恐れ入り恐れ入り
今治市　野村京子

逢えそうな予感迂回路まわります
泣きに行く里は花咲く無人駅
コーヒーを愛して溶ける角砂糖
結び目が緩みぱなしの倦怠期
鳥取県　田村きみ子

孫の髪輪ゴムで飾る楽しさよ
風呂敷にわたしの本音入れてある
さわやかな笑顔をくれる嫁が来た
甲高い声倦怠期かも知れぬ
兵庫県　森脇和子

ポケットの穴からこぼれる内緒ごと
野の花も唄っているらし蝶が舞う

強がりの涙の私語を聞く枕
さし向い悪女になれぬレモンティー

米子市　木村富美子

高い山雲がお世辞を言って行く
残された日々を高める友と居る
向きをかえ人指し指が身をせめる
誇り高いバラが棘から枯れて行く

尼崎市　山田保蔵

ひとりでは着れない着物タント持ち
夫婦げんか話ついたら夜があける
十日前別れた妻と街であう
気疲れか医者のことばで安堵する

吹田市　栗谷春子

誘われもせぬにうきうき花だより
他愛ない秘密が好きなお嬢さん
摘み草の中から蜘蛛が這うて逃げ
痛いとこみんな治って春うらら

鳥取県　福田あや子

母さんの指に脇役などはない
来世にも世話女房になる覚悟
春爛漫甥姪婚礼五組かな
使い良い父さんばかり店の番

羽曳野市　吉川寿美

矢面に立って厳しい男の樹
敵に塩天地無用の函に入れ
遠くて近い男と女の影踏みや
ジャンプした処にあった水溜り

鳥取県　羽津川公乃

杉の子の夢にあすなろ聳え立つ
ガソリンの値下げ分だけ遠出する
満ち足りたあくび五体のネジ弛み
出向に今年も帰る椅子が無い

守口市　森川まさお

感受性強い娘と梅を見に
暖かくなると良い絵が見たくなり
枯れてると変なほめ方されている
机ばかり拭いて電話を待っており

大阪市　藤森小雅子

東西屋若い夫婦の足を止め
しゃがみ込んでから易者ぼちぼち説きはじめ
道化師に郷愁があり国訛り
幻が消えてあなたの星になる

岡山県　小林妻子

ふところのグーのこぶしを見透され
三人目の娘も嫁く事に決めた春
ライバルの始まり鯉のぼりの高さ
題名のない下町の処生術

岡山県　矢内寿恵子

春一番冬の掟はそのままに
スクラムを組む反抗の双生児

亡父の遺品にまだ硝煙の匂いして
ちぐはぐの歩幅で暮れる共稼ぎ
兵庫県　脇田米朝

噛んで砕いて聞かせてくれる父がいる
義理一つ果たすに軽い熨斗袋
逃げ道を塞ぐと恐い敵になる
娘と嫁に贈る言葉を吟味する
羽曳野市　麻野幽玄

炊き直しましたとどうでも食べさす気
逃げて来る孫の砦にしかなれず
二人だけの老後へ妻も花を植え
五月雨も一日二日は慈雨にされ
大阪市　上田柳影

まっすぐな心を貰う子供部屋
よりどころ持たず無心に反旗ふる
罪一つ重ねて化粧あつくする
物分りいい筈遊び馴れてはる
尼崎市　森安夢之助

雑用を言い残し母留守にする
髭をそり次の対策考える
自画像を描けば漫画になるだろう
風向きが変ったところへ客が来た
熊本県　高野宵草

つきあいが面倒になり老い孤独
妻が呼ぶ声現実に引き戻す

プライドをくすぐっている騙しの手
お喋りのなかで娘の瞳が生きる
貝塚市　池田寿美子

自分らしさの智恵をしぼっている生活
靴音を待っている人羨まし
御堂筋雨のファッションが見当らぬ
貯めようと思えば味気ない日々で
愛媛県　八塚三五島

幾度か影の重さに立ち止まる
チグハグな暮しに馴れている無官
定退のどの服着てもみな軽い
裏道へ来ればあるある水たまり
米子市　川上より子

四月から弁当箱が増えて晴れ
子を慕う便りポストがまた笑う
木蓮は空を見上げて無心なり
切れ味を誇るハサミが花芽切る
静岡市　渥美弧舟

残り火を燃やし続けて詩になる
亡友の名に朱を入れ暗し住所録
鎮魂の墓に華やぐお彼岸会
聞き流す妻の愚痴にも三分の利
尼崎市　鈴木良征

一升瓶さげて花見の輪に入る
流行におくれてひいた春の風邪

夜のとばりおりても走る救急車
ショック死が怖くて注射やめました
高槻市　川島諷云児

ジンクスに逆らい夜の爪を剪る
三面鏡邪心を叱る顔がある
俎板の鯉の言い分聞いてやる
真実を吐けば訛りもついて来る
寝屋川市　立床晴風

処方箋明日の命は書いてない
作業着が物干にある連休日
本当に困った顔が行く夜道
気に入らん枝は鋏の好きにさす
熊本市　北川一進

針と糸持たす単身赴任の子
接待も派手に魂胆あると見た
酎ハイの顔心得ているカウンター
賭けごとに凝ったばかりの離婚沙汰
川西市　野村静雄

敬礼をされ戦友と思い出し
仕返しにあったらしくて左遷かな
お彼岸に隣の墓と見比べる
揉み手して笑えるまでに要る年季
竹原市　岩本笑子

笑くぼから幸福もらう一人旅
友達になりたくて小さいウソをつく
酢じめした鯖はウインクなどしない
ハレー来る地球が汚れているそうな
尼崎市　吉永伊三郎

蹲いた男いたわる春の空
一徹な老いをいたわる出来た嫁
最大のピンチ女房が帰らない
膝枕は知ってる男の嗚咽
守口市　結城君子

捨て石を打ってじっくり策をねる
安らかな寝顔みてから仕舞風呂
かたつむり春じゃ春じゃと樹を登り
出雲市　小玉満江

野菜売り料理法まで説明し
ポケットのへそくり顔を出したがり
手みやげも広げて嬉しいお茶を入れ
大阪市　亀井円女

長雨が好きで冥想欲しいまま
犬が好き小鳥も花も人も好き
夫でも犯せぬ空間とって置く
弘前市　斎藤劦

干餅をかじると津軽は春となる
獣医師が牛にも会釈して転勤
売る決意牛の瞳がまたさせず
静岡市　永倉僕川

頑張れと肩におかれた手の温み

名案が浮かんだその日電話口
雲行きが一変し夫婦貝になる
米子市　小村　てい子

苛立ちの髪を洗って泣かずおく
花便り友の誘いを待つ日和
同じ高さで翔びたつ春の小鳥たち
尼崎市　古川　幸次郎

看護婦の顔で痛さが違う針
春風が不倫の噂撒いている
会うだけと言ったつもりが共白髪
広島市　望月　晴彦

どん亀の魅力は泥をつけたまま
浮き袋隠して泥の舟に乗る
お人好し神を味方にだまされる
富田林市　片岡　智恵子

人形師の筆が笑うたこけしの瞳
紙人形裳裾に楚々と艶を秘め
悠久のロマンを偲ぶはにわの眸
青森県　福士　トキ

それぞれの個性あらわに飯場の灯
左手で書く店員の字に見とれ
卒業歌聞いて道行く足を止め
高槻市　津田　スミ子

授業料はらうと通帳風邪をひき
ピカソ展幼児はうまく解説し
相部屋も共にカメラの人となり
尼崎市　佐藤　美代子

桜一本バス待つ人に話しかけ
どん底の苦労話がベストセラー
玄関先へうぬぼれ鏡掛けておく
新発田市　上鈴木　春枝

ヘソクリがあって少うし贅沢し
捨てられぬ肩書き抱いて粗大ゴミ
ライバルがさっと職変えして慌て
鳥取県　乾　隆風

さわやかに別れてうしろふりむかず
切り口のみえぬメロンを一つ買う
こころ根のやさしい白い葱を植え
兵庫県　野々口　ゆう也

寄り添うて鳴らぬ鈴振る老夫婦
終章を飾る嘘なら許される
句友逝き柳誌崩れる音をきく
愛媛県　石手　武

梅雨空に肌が病んでる紙人形
よう寝たと満足そうなノビをする
コンパクト食後の顔を補修する
熊本市　黒田　緑

はじめての道新刊を見る期待
勝ち越してこそさわやかなプロの水
青春の一齣埋まる百年史

尼崎市　尾宮弘治

たこ焼きで昼を済ませる妻の留守
子の命救うてくれた注射針
蓑虫が冬の帽子を脱げと説く

唐津市　相葉あき

ずっしりと父の重石が効いて居る
先代のしこり二代でやっと解け
ランドセル教育ママの夢を詰め

鳥取県　さえきやえ

春の駅お国なまりで発車する
もつれ糸解く指ならば持っている
困ったら登ってみたい山がある

岡山県　戸田種子

床の間の軸かけかえて春を呼ぶ
春ですがまだ重ね着をしています
商売に慣れて老舗を守り抜き

寝屋川市　井上すみれ

兎も角も二人三脚馬鹿でよし
大邸宅すげない顔が門に出る
雪月花額にはめたい四季の窓

鳥取県　土橋はるお

嫁が強うて小面のにくい時もある
パンパースはかせて親が安眠し
定年後は漢方薬の本を読む

藤井寺市　福元みのる

閣僚の本音に首相ただ詫びる
日帰りの旅に一日中の雨
利子つけて返してと孫貸してくれ

山口県　高崎雀声

可も不可もなく定年がきてしまい
上司への無念を捨てにくる屋台
つまずいた石は笑って見上げてる

鳴門市　八木芳水

ぜいたくがしみ込み物価高を責め
さびしさも楽しさもあり独り者
満員車に揺られてたどる2DK

米子市　神崎あいこ

美しくうつる鏡は曇らせる
スカーフの結びあれこれ変えて春
やわらかい刺なら摑む気ままな掌

岡山県　牧野秀香

暖床で育てたワラビ高く売れ
ぬぎ捨てたシャツに生活の汗におう
ちらかした部屋に気兼ねのない生活

十和田市　阿部進

子のためになり振り捨てて屋台引く
お互いに愚痴もでてくる夫婦酒
乱れ篭ストレス皆んな脱ぎ捨てる

大阪市　井上白峰

頂上でやっと夫婦の歩が揃う

地位と金無くても歩く道がある
神仏に参るも欲のひと節か
島根県　小田川　智重子

日脚伸び小窓に朝をせかされる
栄転ですそして単身赴任です
外の風吸わずに一日暮れちゃった
出雲市　竹　治　ちかし

ライバルに負けたと思う日の長さ
鬼の面仏の面も父は持ち
口調まで亡父と良く似て子を叱り
尼崎市　野　瀬　昌　子

日曜日風の噂を聞いている
後五分眠りたいのよ目覚しさん
男ども油断めさるな妻のスト
堺　市　矢　倉　五　月

嫁さんの名ばかり呼んでボケはじめ
嫁が来てサラダオイルの減る速さ
怪我たえぬ腕白坊主が期待され
大阪市　秋　田　　茂

少なくとも夢だけあった四帖半
行商の老婆に桜美しい
いちごよりトマトのような妻が好き
西宮市　秋　元　てる

当てにならぬ大関も居て場所たのし
ちょびちょびと品数多い祖母の膳

涙声あわてて受話器置く気配
長岡京市　山　田　葉　子

一羽だけポツンと残ったゆりかもめ
こもごもの顔を覗かせ人事異動
何ごともなかったように桜散る
高槻市　芦　田　静　江

造花だけ残し娘の七回忌
化野に安らぐ石を積んでいる
逢いに来て幸せ知った乳母車
鳥取県　乾　　喜与志

死ぬまでは生きる勤めの薬飲む
祭り酒まだ若い血が踊り出し
指五本揃う初孫ご誕生
鳥取県　津　村　八重子

蝶一羽舞って無縁の墓いとし
よい嫁が笑い袋もさげて来た
ふる里の民謡母の膝思う
尼崎市　小　熊　江　美

地下街を歩いて夜を忘れてた
マンションは廊下がなくて息苦し
料亭の渡り廊下で口説いてる
弘前市　真喜内　實

遊んでるりんごの花を蜂見舞う
青い背広にくっつきたがる赤い糸
小川から春を歓ぶ水溢れ

背もたれの柱探している不精
何かある娘にビール酌いでやり
コーヒーで暮しのリズム作り出し

今治市　渡辺伊津志

指ひとつ触れぬ花ことばを贈る
気位の高い女の影を踏む
六尺の高さに母は背負われる

鳥取県　太田幸枝

牡蠣舟を岬へ廻す海女の腕
無骨だが殻割りゃナウイ牡蠣の味
柔鶏卵置いて牡蠣殻貰ろて来る

唐津市　筒井朴竜

一行詩あなたにあげる愛がある
あきらめが少し混じった夫婦の和
秘めごとを重ねて重い帯の位置

兵庫県　東浦砥代

来世までなどと女は恐ろしい
言い負けて負けん気二つの辞書を引く
駆け込み寺へ行くにも金が要るそうな

旭川市　朝倉大柏

俺に似た声で息子の電話口
　再就職して（二句）
金もうけのきびしさがある昼休み
流す汗も違う穴から出て来そう

新潟県　高野不二

草野球ホップステップジャンプして
検証のすまぬ現場へ火事見舞
竹垣の中の竹の子よく育つ

大阪市　島路太郎

ぼろ口の話一枚かんでおく
客らしい客来ないのに応接間
万年床冬の陽ざしに覗かれる

河内長野市　大西文次

二三日トクホン臭わす山登り
商店街祭り祭りとたくましい
潮騒のように愉快な園児行く

静岡市　青柳金吾

交換で着こなす姉妹の仲のよさ
母の日は実家の母にもプレゼント
ポケットの小さなノートに秘めた恋

出雲市　小白金房子

蕗のとう摘めば指先匂う春
いさかいを孫があっさり解いてくれ
捨てる気であった小犬の家を組み

兵庫県　円増貞子

筋道を通して皆にうとまれる
指切りの孫に一本してやられ
カレンダー一枚はぐと桜咲き

岡山県　池田半仙

大阪市　川原章久

八起目も北風が吹く世間の目
エアロビクスあのかあちゃんが水に魚
カラフルに春日を受ける布団干し
大阪市　桝本蕗児

水子仏いまさらなんで風車
停年が近く名刺もきれたまま
街角の易者あまりに若すぎる
河内長野市　植村喜代

よその花そんなに赤いかと蝶に聞く
山裾を歩いて春に答えてる
墓参りきまったことをして帰り
岡山県　後安ふさえ

子の寝顔涙が母を放さない
商人の笑顔の裏にある苦労
ウインドの買う気もないに柄を選り
豊中市　小畑よし子

春がすみ母の手紙と山菜と
口紅を一度もつけず母が逝く
初孫につける名前が辞書にない
鳥取県　西川和子

熟女です今日も真赤な服で行く
さわやかな想い出だけを壺につめ
親だから高い望みも押しつける
唐津市　山口高明

箆鮒の竿が自慢の隠居部屋
久々に逢うて白髪を数え合い
新任の教師を泣かす蛇を獲る
唐津市　米倉彩女

ピカピカの一年生のいい返事
御役所へ顔がききます渡り鳥
誕生日息子がくれた春ショール
京都市　小林英子

紙風船一人で跳べた夢を見し
温かい言葉の沁みる春の宵
比良八荒終れば京に花ざかり
島根県　喜島ノブ

桃の花くすりの匂う部屋で咲き
おとなりの欠伸を貰う春日和
掃除して失くしたはずの金が出る
青森県　荒田つる

言葉にもならず再会手をにぎり
先生も借り物らしいモーニング
窓あけておきますピアノ買いました
岡山県　黒住美穂子

こんな事朝飯前と世話が好き
満たされぬ心の和む朝の虹
バラ咲く日わたしは恋がしたくなる
堺市　小西小雪

八重桜あれやこれやと通り抜け
白髪染いやで母より白くなり

お喋りな妻が無口になる不安
岡山市　中嶋千恵子

溜息をついて女の五十路坂
交際の下手な女の泣きぼくろ
交際費飲み屋のつけが上のせし
大阪市　工藤陽子

大家族背負った父の顔に張り
頑張れとしんがり選手に旗を振る
噂話気にして自分を見失い
八尾市　鷲見章

自分史は一枚で足る原稿紙
接待の甘酒を待つ花疲れ
遠き日の覗きからくり春彼岸
富田林市　大沢二四子

一年生希望が光っているリボン
雑音は聞きたくないが耳掃除
あの酸さを何処に持つやら梅の花
岡山県　平田たけよ

ひょっとして農ついでくれるかも子沢山
くつろぎの真中に母がいてる幸
もの好きが又セールスに乗せられる
大和郡山市　岡田寿美礼

酢の物のおいしさ楽しむ歳となり
終い風呂余生楽しむ有難さ
大阪市　喜多佐津乃

恥じらいか少し彩るさつき鉢
紙おむつスキンシップの邪魔をする
泉佐野市　真崎浪速子

隣から届く土産を小さい使者
付添いも軽い鼾に安堵する
大阪市　横山為子

子沢山みんな嫁いで犬と住む
吊橋の真中辺で深呼吸
和歌山県　森三枝子

隠すから覗いて見たいサングラス
捨て犬に情をかけて住みつかれ
兵庫県　奥野テル

帯きりり一家支えた母の背
歩く日を唯ひたすらに車椅子
京都市　山脇正之

鈍行で旅を楽しみ旅費稼ぐ
友達が出来て喜ぶ転校生
桜井市　前山美恵子

公園のベンチに集まる愚痴の声
かたつむり知らない子が住むニュータウン
大洲市　西山えつ美

赤チンキわずかな傷へ派手にぬり
茶の間でも校歌覚える甲子園
大阪市　末永芙久枝

公園で遊ばす親も楽しそう

派手な人心はいつも孤独かも
今治市　月原つくし

人恋し屋台の灯向いて行く
春風に歩幅の合わぬ嫁姑
米子市　金山夕子

さわやかな今朝を織り込む電話口
慕うのに姿を隠すお月さん
豊中市　一瀬福一

手に載せて軽き哀れな流しびな
心まで濡れて別れる春の雨
八尾市　松下蕉露

局部麻酔冗談言いつつメスを入れ
段々と離婚太りをする女
吹田市　西岡豊

見渡して真の仲間をかぞえてる
ちょぼちょぼの仲間で遠慮ござんせん
岡山県　松本元江

新しい家に息づく窓明り
花開くかすかな春の音を聞く
和歌山市　三谷周三

笑ってはいるが迷惑らしい声
反対を知ったか筋道たてて来る
鳥取県　鈴木ふみ子

ふたたびの愛に女も若返り
ガラス越し女心がすきとおり
島根県　坂本雪路

好き嫌い若い素直な返事くる
せせらぎの水へ素足の心地よく
豊中市　辻川慶子

日帰りのプラン練ってる桜餅
アンケートうっかり書いて買わされる
茨木市　井上盛雄

説教が増えてる老化には注意
本当は弱音自分に吐いてみる
和歌山県　田中隆積

小人閑居して大望に酔い
再生がきくなら愛を解したい
和歌山市　森敏子

試着室大根足が見えかくれ
さんざめく花の下なら素通りし
唐津市　児野今子

朝靄に外灯ぼやけ午前四時
バーゲンに家計預かる主婦の垣
泉南市　坂根流水

早出です電車で口紅濃くひく
春の海うっとり見惚れ句にならず
高知市　北川竹萌

蛍とぶ頃里帰り組む予定
余生城通路玉砂利敷き替える
岡山県　伏見すみれ

一縷の望み抱いて古里Uターン
日曜の楽しみ寝床できく七時
呉市　蔵重成人

苦労した話は母が聞いてくれ
小細工はするなと叱る父である
橿原市　西本保夫

妻が傍に居るだけで室内犬よく眠る
野菜売りに来る老婆にも意地がある
米子市　宮本佳女男

最善を尽して天運を待とう
色褪せた国旗も廃棄せぬ明治
島根県　森山英子

生きざまをそっくり月に見透かされ
淋しさをまぎらすための長電話
奈良県　和田萬里

見舞客あと片付けもしてくれる
ぼちぼちと気になり出したポックリ寺
広島県　田村新造

棒グラフ伸びずに靴が減るばかり
聞くだけで結論出さぬ代理さん
島根県　園山世似

はたかれる障子の音も春になり
独り居へ草餅とどけてくれる人
岡山県　千原理恵

風ひゅるり真鯉緋鯉が空に舞う
とまどいの女にするり縄梯子
吹田市　山田里子

卵の目取らねば食べぬおばあちゃん
ジェット機の影ゆるやかに流す川
岡山県　福原悦子

負けて勝つ一手を妻は持っている
逢えそうな亡母と話す古日記
島根県　菅田かつ子

祖母の死を悼む（二句）
夕焼けの中で静かに息をひき
天寿でしたと言うは他人のこと
富田林市　友碇雅子

手のうちをみんな広げて求婚し
振り上げて打つことはない仁王の手
大阪市　宮下とし

平和です釣鐘まんじゅう孫と買う
切った方が早いと医者は簡単に
堺市　江辺天鳳

句碑七つ小谷城趾は早い春
落ちた日の孫へ話題をかえてやる（孫受験に失敗）
藤井寺市　菊地繁男

長靴を履いて市場で魚買い
肩書で受付け急に畏まり
茨木市　堀良江

長髪も短くなって新入社

寝ころべばれんげが匂う娘は嫁って
京都市　山脇正之

喜寿にして初めて貰ったバレンタイン
谷間での雪の乱舞の美しさ
今治市　山田宝保

少々は期待していた玉手箱
十五夜は狸囃子の輪で見よう
八戸市　島田昭治

神様が嫌いなやつが金溜める
戦友会夜が明けるまで語り合い
益田市　里本たかし

うなずいてゆけば春の雨になる
湯豆腐で呑ませる店で友となり
静岡市　丹羽定次

好きな娘はいつのまにか嫁に行き
気ののらぬ返事してからしこりでき
島根県　高尾よし子

円高も円安もなし老いの部屋
ある時は聞えぬふりの老狸
大阪市　今西静子

生涯に握ることない億の金
油断して団地の風に乗る噂
島根県　岩田三和

コルク栓を発酵菌がふっとばす
風向きを耳に感じて野良仕事
岡山県　杉本伊久栄

年の順言わず妹先に嫁き
老いて尚恋の花咲く種を播く
岡山県　富坂志重

松山を歩き松の匂いを持帰り
よい天気ポツポツ風鈴のほしい風
大阪市　堀口欣一

春うらら迷子があるよ天王寺
春の絵を見せてくれたはお姉さま
唐津市　浜本治幸

老境に入りておしゃれが気にかかり
挙げた手が振り下ろされぬ勇み足
大阪市　新井川青舟

春色の服をまとえば風騒ぎ
相続をしたが税金残っている
大阪市　野村八重

旅に出てふとわが家を思い出し
重い腰上げた甲斐ありこの桜
八尾市　椎尾公子

ジャンケンに負けてトイレの掃除なり
書斎より茶の間が読書しやすくて
泉佐野市　大工静子

チャラチャラと雪駄鳴らして八十歳
健康はよし両手で顔洗え
大阪市　橋本悦子

〆切りに湯治の宿で苦吟する
行けもせず桜前線聞くばかり
堺市　宮本かりん

孫のもりテレビ漫画に助けられ
草や木へ囁きかけている小雨
和歌山県　山田久子

弱音など似合わぬ花の真盛り
米研いで今日も明日も暮れてゆく
倉吉市　田中八太朗

戦中派粗大ゴミ出す目が惜しむ
あぶれ雨胃袋だけは休まない
大阪市　田中節子

ネオン消して街からハレー眺めたい
一人だけ置いて行かれた孫が来る
和歌山県　北山凡太

靴音で分かる夫の酔い加減
向き変えて見れば晴れ間が見えてくる
大阪市　平井露芳

入学祝孫に年金噛じられる
大阪城名所にツインのビルが増え
豊中市　額田明吉

五月晴れ真鯉緋鯉の数がふえ
賀茂川も春のおどりで水うるむ
大阪市　渡部トキワ

庭桜可憐な顔で咲き誇り
この成果コンピューターに感謝する
広島市　花田繁子

抜け目なく値切り上手のあとにつく
一人言言うて答えて笑ってる
新宮市　船越正

弱視さえ初夏の海面はまぶしくて
五十年好きやと言わせた事もなく
大阪市　朝田晃世

花びえでオカロン持って桜狩
春雨に湯けむり包む飛騨慕情
熊本県　立道善太郎

やあうまく打たれましたと解説者
泥遊びする場は残し庭造る
岡山県　後安江山

三姉妹それぞれふくらむやさしい芽
毒舌で話し上手でしたしまれ
堺市　安西カネ

菜の花に息洗われる朝の道
満腹の瞼ふさがる午さがり
大阪市　冨岡温子

桜咲く便り貰って窓をふく
奈良県　山村有佳

ジュニアの部

本が好きむらさきしきぶの本がすき
つくしんぼうだれの子ふでの子元気な子
米子市　渡辺智栄

61年度

路郎賞 川柳塔賞 候補作品中間発表

自 昭和61年1月号
至 昭和61年4月号

路郎賞候補作品

野村太茂津

やがて二人そして一人の旅に出る　遠山　可住
返り花急にいのちが惜しくなる　西山　幸
雑踏にまぎれて妻と手をつなぎ　河内　天笑
野分け一陣ひとの心も西ひがし　越村　枯楢
ほほえみをひとつ明日のため残す　牛尾　緑良
信じたし袴が似合う男たり　岩田　美代
冥土までねたむ台詞を用意する　小西　雄々
騙されぬ女が球根埋めている　杉浦婦美子
さいころの数が出過ぎて上がられぬ　坂口　公子
身を守る棘があるとき邪魔をする　久保　正敏
友達になりたい人が敵にいる　西口いわお
燃やしても燃えぬ落葉に似た私　高橋千万子
自殺するひまがないほどいそがしい　新家　完司
雨が降るから赤い花束買ってくる　春城武庫坊
掌に合った小さな石をしかと積む　林　はつ絵

正本水客

いのちふたつあれば悪人にもなろう　小島　蘭幸
秋空やクレーンの背のび見ていたり　都倉　求芽
何事もなかった様に起きてくる　河内　月子
ひたすらに歩いて川に突き当る　福本　英子
愛すると聞いた気がする風の中　春城　年代
門灯を消してやったと朝帰り　河内　天笑
苔むして石やわらかく見えてくる　神夏磯道子
ビル横になれば楽だろヌッと佇ち　川端　柳子
間違いでよかった元日の電話　野田素身郎
すぐ寝つく妻よお前は幸せか　塩満　敏
裾野から駈け登れそう富士が晴れ　高杉　鬼遊
珈琲がこぼれ笑いが止らない　林　瑞枝
発送を以て発表来たことが無い　久保　正敏
二人居るから喧嘩まだ出来る　菅井とも子
留守の間に来たかて来たとは言わさへん　安藤寿美子

黒川紫香

フンフンとうなずく老母で欺されぬ　嘉数兆代賀
ひたすらに歩いて川に突当る　福本　英子
善人にされて断りきれまへん　森下　愛論
冬の雲ちりめんじゃこが干してある　高杉　鬼遊
門灯を消してやったと朝帰り　河内　天笑
口紅の彩から答もれている　松原　寿子
子の便り帯に挟んだまま暮れる　岸本豊平次
勝負勝負と妻が花札出してくる　小島　蘭幸
校長の家だな国旗が出してある　高橋千万子
友達になりたい人が敵にいる　西口いわゑ
怒らせたのでしょうかきみの標準語　佐藤　藤子
月の砂漠を妻と歌ったことがない　波多野五楽庵
文鎮の重みぐらいの課長が来　有働　芳仙
ときどきは拗ねるライター持ち歩く　越村　枯梢
どの箸がねても気にせぬ箸枕　菅井とも子

西田柳宏子

冗談で言えず本音でなお言えず　川上　渓水
しまったと思う瞬間冷凍魚　江口　度
方向音痴に太陽は東から　土橋　蛍
家族合せのカードが揃う春の宴　高杉　鬼遊
右左軍手個性を持ちはじめ　寺田　裕美
堪忍袋には母の血が流れ　舟木与根一
みの虫に冬の暮しを教わろう　土居　耕花
天に星地に花わたしに五人の子　嘉数兆代賀
正夢を信じて女走り出す　津守　柳伸
今朝も無事ひとり舞台の幕をあげ　古野　ひで
片付けてしまうと寒い一人部屋　藤田頂留子
泣けるだけ泣かしてくれる仕舞風呂　川崎　秋女
ばあちゃんは何も知れへんそれでよし　神夏磯道子
神様が聞いてくれるという自信　内芝登志代
同じ血を引くと思えぬ出来不出来　野呂　右近

橘高薫風

老妻と同性愛になりました　土居　耕花
火に油そそぐ酒とは知らなんだ　両川　洋々
還暦や落馬の数も三ッ四ッ　天正　千楮
離婚したのにも一枚おめでとう　山根いつを
草刈機で刈られた草はすぐ生える　小池しげお
衰えぬ美貌人事に口を出す　田中　叶
容疑者の方が元気な民主主義　岩井本蔭棒
裸木の一つが火柱に見えた　八木　千代
森消えて魑魅魍魎はどこへ行く　安藤寿美子
そのうちに笑い袋も怒るだろう　岩田　美代
ゼンマイを一杯まいてまだいくさ　林　荒介

矢絣が別れの夜をおぼろにし　石倉芙佐子
月の砂漠を妻と歌ったことがない　波多野五楽庵
フィクションとノンフィクションのはざまに妻　柳楽　鶴丸
アメリカの悲しい花火大花火　工藤　甲吉

川柳塔賞候補作品

高杉鬼遊

うるのおくやま越えて来ました坐りだこ　永田　俊子
我が家にも英霊在わす神ならず　高杉　千歩
人の上に人をつくったお立ち台　鈴木　良征
ぬるま湯に浸り十把を抜け切れず　藤井　高子
正月も終わり子供も叱られる　栗谷　春子
君は風男の心弄ぶ　山口　高明
舟舵を嫁に任すと風いでゆく　太田　幸枝
正月は月がかわっただけのこと　和田　萬里
皿割ったぐらいの罪は着てあげる　福田　礼子
たかが噂に溺れておんなというものは　吉川　寿美
よく分りましたと女言っただけ　野村　静雄
もう一本おつけしましょう春はそこ　石原　淑子
足音が小さくなると風が吹く　田中　晴子

紙風船ほどの情けの人と知る　河瀬　芳子
当ったら怖い宝くじを買う　土橋はるお

小出智子

ひと昔前の記憶で迷う街　石手　武
徳利を振って男の甘え方　秋元　てる
うるのおくやま越えて来ました坐りだこ　永田　俊子
白足袋を心の晴れるまで洗う　福田あや子
古里は雨下駄はいてひとまわり　田村　新造
真実は一つ南天の実の紅さ　笠嶋恵美子
冬の寺赤いヒールが脱いである　福田　礼子
まだ直しますかと靴屋念を押し　山田　宝保
ジャンケンで福引に行く児が決まり　鷲見　章
本当の話へ誰も寄って来ず　高杉　千歩
とまり木へ上役下役ご同役　田原　久子
鬼の面外せば僕のお父さん　立床　晴風
風花は忘却からのメッセージ　森山　英子
踏切りを渡ると朝の顔になる　木本　如洲
子がくれた風邪がなかなか治らない　赤木　和子

谷垣史好

うるのおくやま越えて来ました坐りだこ　永田　俊子
天女舞うすこし淫らな雲に乗り　木本　如洲
拠り所欲しいと思うぼたん雪　桜井　千秀
橋のない川もたしかに夕ぐれる　さえきやえ
償いに戦さごっこの玩具買う　鈴木　良征
来る来ないそんな女が一人居る　児玉　歌子
核心にふれると引込む膝小僧　脇田　米朝
樹に登ると足の裏まで見透かされ　藤井　高子
雪おんな恩を返しに来たようで　久保　和友
父さんの手では作れぬ騙し船　小山　悠泉
昔読んだ本を見ている冬の夜　森川まさお
からくりの糸がほどけて女病む　山本　玉恵
裾野まで来て顔の無い富士に遭い　相葉　あき
ひとり居は糸屑付けたまま暮し　笠松　高子
奇を衒うこともなかった昼の月　桜沢あか里

板尾岳人

花屋まで情を買いに行く女　千原　理恵
少しずつ悪女になってたそがれる　光井　玲子
竹光と知らぬ男の慌てよう　鶴久百万両
ブランコがひっそり揺れる冬の月　辻川　慶子
空缶を見ると蹴りたくなる空虚　永田　俊子
和解するきっかけ探す昼の月　桜沢あか里
遮断機がゆっくり降りて長い冬　赤木　和子
約束を信じているから対の箸　高杉　千歩
ひとひらの雪に賞ったうす情け　寺中三枝子
傷心の私を吊るす秋の風　野村　京子
三面鏡の奥に広がる冬景色　福田　礼子
嘘一つ作ってのぼる縄ばしご　山本　玉恵
凧の糸切れてかすれる子守唄　舟渡　杏花
足音が小さくなると風が吹く　田中　晴子
フライパン男を上手に裏返し　脇田　米朝

河内天笑

夕焼けをカラスが急ぐわたしも急ぐ　信本　博子
時効にはしない女の記憶力　田原　久子
冬の寺赤いヒールが脱いである　福田　礼子
シャッターへ背のびしている貸衣裳　上鈴木春枝
お茶こぼしてから緊張がほぐれ出し　宇野　昭代
画廊には少しきどってゆくつもり　山田　妙子
夕刊の来る頃ふっと物思い　栗谷　春子
味噌汁のお代りをして仲直り　赤木　和子
ひとり芝居だったいちにち黄昏れる　高杉　千歩
視線泳がせ君はサヨナラする気だね　寺中三枝子
はなしたくない七十の恋をする　紀市　郁栄
血統書つきの犬だが皿なめる　結城　君子
坊さんがホルモン屋から出て行った　土橋はるお
人が見ているから握手だけにしよ　若林　一止
離乳食かあさん先に口があき　宮本かりん

愛染帖

橘高薫風選

このままになるとあかんで救急車　大阪市　川口弘生
来し方がくるくる廻る救急車　伊丹市　樫谷寿馬
春愁や星は氷であるという　青森市　工藤甲吉
人生が一人寝ころぶ畳の間　名古屋市　越村枯梢
蕗のとう二合の酒で楽しまん　大阪市　小出智子
野仏はこくりこっくり花林檎　笠岡市　木山遠二
象まつりの象は喜びなどしない　米子市　八木千代
償いに焼芋ひとつ握らされ　大阪市　小出智子
泣き虫を運びのこした春のバス　笠岡市　木山遠二
六月の雨と約束してしまう　米子市　八木千代
わたくしの樹を伐りにくる足の音　大阪市　小出智子
この年も半ばとなりし雨の音　笠岡市　木山遠二
寝たきりへ孫がチョコレートを呉れる　大阪市　島路太郎

目標を白寿にせよとすすめられ　富田林市　岩田美代
紫陽花が濡れると憶いむらがりぬ　守口市　森川まさお
限界を見るのはよそう花霞　寝屋川市　堀江光子
言葉少なく看護婦になると言う　島根県　榊原秀子
出発に低血圧の人が来す　大阪市　北勝美
考古館歩をめぐらせば鐘の鳴る　岡山市　川端柳子
煙草持つ肘のぞいてる春の窓　兵庫県　野々口ゆう也
平凡な戦後史書けるありがたさ　鳥取県　土橋蛍
うっかりとかくれ忘れた昼の月　唐津市　田口虹汀
青い実を五六個つけた鉢の梅　大阪市　川原章久
山すみれ山の姿で街の庭　大阪市　島路太郎
水溜り女のまこと見抜けない
役員会赤飯好きな人が居る
もう急ぐことなき八十路亀の歩で
過去となる刻美しく言うて妻
さわやかに紅茶をくぐる銀の匙
学なりがたしのびのびバスト八十五
身を捨てる勇気がなくて隅にいる
花は花団子は団子別けて生き
出迎えは猿の玩具がジンタ打つ

飛花はげし白一色の出石焼　米子市　林瑞枝
マジシャンの指から増してくる宇宙　米子市　林荒介
手鏡と毀れて百の顔をつくる　鳥取県　さえきやえ
風紋はそのまま砂の遺書となる　八尾市　松下蕉露
忠即孝ならざりし子の墓洗う　藤井寺市　赤木和子
口髭がうっすら存在感が増す　唐津市　久保正敏
メルヘンを一つ毀した宇宙服　高槻市　川島讃云児
砂丘魔術師風紋一瞬に花紋　富田林市　藤田泰子
狂わない時計がだんだん重くなる　近江八幡市　前川千賀子
ステンドグラス懺悔を彩るものとかや　岡山県　土居耕花
びくびくと暮らすか胆の無い日から　和歌山市　西山幸
とある日の靴の吃きひとり旅　尼崎市　春城年代
じんじんと炎えてるときのシクラメン　名古屋市　藤井高子
心から笑うた皺の美しさ　寝屋川市　岸野あやめ
藤棚の下に子が居て孫が居て　吹田市　栗谷春子
待ちかねた芽が出た朝よ有難う

鳥取県　新家完司
こころには大きな窓を開けてある

米子市　田中亜弥
ひとり言になれ一合の米を磨ぐ

守口市　結城君子
夕御飯ある日は仮面つけたまま

羽曳野市　吉川寿美
祝結婚　塩満元子さん
時おりは火の輪くぐりもして夫婦

豊中市　田中正坊
亡妻と来し哲学の道人あふれ

今治市　月原宵明
赤鉛筆持てば非情な人となる

鳥取県　林露杖
美人薄命それの心配だけはない

西宮市　草刈堕駄
点滴の滴滴と身にまわりゆく

和歌山市　細川稚代
やさしさに飢えては好きな鬼あざみ

米子市　川上より子
百円の威力ハガキと切手買えました

堺市　桜沢あか里
親離れ子離れ自分とのいくさ

豊中市　一瀬福一
革命をまつにあらねど風の音

高槻市　河瀬芳子
黄砂降る遠くて近い国と知る

和歌山市　神平狂虎
掌の中の海を今夜も視続ける

松江市　竹内寿美子
妖精が裸足で歩く春の土

小松市　小森靖江
家移りにふとのこってる子の遺影

茨木市　井上盛雄
子育ての後若やいだ友になる

尼崎市　春城武庫坊
沢山な人がいるから孤独です

唐津市　浜本ちよ
滝の如女の感情落差持つ

唐津市　筒井朴竜
自由への勝利でコリーしこり晴れ

島根県　堀江正朗
闇無限夕陽ふたたび戻らない

吹田市　後藤火鳥
老いの夢二十一世紀覗きたし

米子市　門脇晶子
夕暮れに仏の顔が近づいた

唐津市　松高多駄子
かけひきの修業も上達京の僧

弘前市　波多野五楽庵
弘前市大字弘前津軽弁

鳥取県　乾隆風
ひと皿の中に五人の知恵を盛る

米子市　小西雄々
絶頂へ仏の慈悲が届かない

島根県　小砂白汀
黄金の炎もらいしきんぼうげ

茅ヶ崎市　山上元孝
拝啓も敬具も邪魔なラブレター

岡山県　千原理恵
思い出の人に出会うて若返る

岡山県　松本元江
花霞恋にやつれた朝の月

大阪市　市場没食子
全粥につづく胃の重さもつづく

米子市　寺沢みど里
美しい言葉はいらぬかごめの輪

宝塚市　丸山よし津
駅ビルに入り老舗の味が消え

堺市　宮本かりん
アコーディオン弾いてた彼がいる故郷

羽曳野市　田中隆二
春風が笑い袋の口を開け

八戸市　島田昭治
正論を繰り返し友胃に穴が

平田市　久家代仕男
木蓮が咲くと仏の日を思う

豊中市　上田登志実
ツインビル天辺見れば動くよう

竹原市　信本博子
風よ風命のことは任せます

和歌山市　三谷周三
凡人の騒ぐ頃にはブーム去り

大阪市　桝本露児
男です極楽とんぼ装おえど

豊中市　奥田満女
親よりの医業静かに村の医者

寝屋川市　平松かすみ
書道展いやいやサインして帰り

大阪市　井上白峰
結構なお手前虚栄の味がする

和歌山市　三宅一郎
保母はつい見知らぬ子にも声をかけ

岸和田市　原　さよ子

隣の子に同じおみやげ買うてくる
米子市　小　村　てい子

歳月に言葉を選ぶやさしさも
岡山県　矢　内　寿恵子

老残の我身を叱ることですみ
今治市　野　村　京　子

野心ない母さんの目はごまかせず
高石市　浅　野　房　子

雪柳夢さめた目にまぶしすぎ
吹田市　西　岡　豊

前向きの話に白い歯が光る
和歌山市　森　敏　子

花の下ミステークなど止めましょう
佐賀県　寺　中　三枝子

花の雨宴帰りの背に温い
堺市　小　西　小　雪

風一陣花の絨毯渡り初め
倉吉市　奥　谷　弘　朗

格調が高い句とでもいっておき
豊中市　額　田　明　吉

桜散り御仏灌ぐ花まつり
今治市　渡　辺　伊津志

実り来る葡萄の粒の尊かり
米子市　青　戸　田　鶴

花も木も私も包むかげろうよ
岸和田市　古　野　ひで

永らえてまだ彩褪せぬわが命
岡山県　福　原　悦　子

退職し庭の松まで活気づき
米子市　光　井　玲　子

鬼を刺す針はいつでも持っている
川西市　野　村　静　雄

腹きめて配所の酒がうまく酔え
芦屋市　竹　中　綾　珠

得手のもの沢山あって趣味豊か
大阪市　松　尾　柳右子

貴婦人の気分にさせてシャンデリア
米子市　菅　井　とも子

着飾ってうつろな靴の昼下り
鳥取市　森　田　熊　生

責任のないいねむりの中にいる
益田市　里　本　たかし

合格の子の声誕生日に貰う
橋本市　岸　本　木　魚

ひっそりと暮す金利が又下り
島根県　松　本　文　子

闇の中泳ぎ続けるデスマスク
高知県　赤　川　菊　野

病窓へ春を知らせる風の色
貝塚市　行　天　千　代

ハワイへは行けないからと椰子の額
藤井寺市　福　元　稔

努力など見ないで運と人は呼ぶ
唐津市　野　田　旭　恒

遠足へイルカは高く跳んで見せ
愛媛県　石　手　武

キャンパスに少しみだらに裸婦を置く
静岡市　渥　美　弧　舟

終章の願い生命の句に挑む
堺市　高　橋　千万子

倖せか過去の男の低い声
和歌山市　山　口　三千子

一日が長い桜の散った夜
鳥取県　土　橋　はるお

課長の机と角度が合いすぎる
茨木市　堀　良　江

客席も舞台も締る今日初日
倉敷市　藤　井　春　日

晴れてよし雨またやすらぐ京の四季
兵庫県　北　川　とみ子

廻り道無駄でなかった詩がある
西宮市　奥　田　みつ子

月の砂丘みな王子さまお姫さま
岡山県　小　林　妻　子

春四月未練がましき寒椿

＊

投句先　〒560 豊中市中桜塚三丁目13―15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課　題　「　傘　」　選者　**森中恵美子**
締切　**6月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3―43NHK
大阪放送局〝さわやか広場〟係

発　表　6月22日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

秀句鑑賞

―同人吟―

―前月号から―

里　小路

六十の節をトロ火で煮詰めよう

林　荒介

実年の名称が生れた。永年の足跡に、前途の開拓に、悔いのない人生をと、その表現が素晴らしい。

広辞苑で酸素不足を補おう

神平　狂虎

酸欠になりそうな頭へ、日頃世話になっている助っ人、それは広辞苑なりか……同感。

銀行へ入る真似して又歩く

土居　耕花

何と旨い句。好きな句だ。まるで豆秋さんが歩いてはるみたい。

ストライクゾーンを時に外さんか

西出　楓楽

プロ野球に、打者泣かせの新ストライクゾーンなるものが誕生した。その枠内から主婦が日常の解放感に結びつけたところ、作者ならではの句。

わたしにもイジメ血圧飛び上り

堀江　芳子

イジメの記事が今日も載っている。日々心痛の心情が端的に表現されている。お大事に。

だましには一人も来ない無一文

山根　いつを

悪徳ペーパー商法等に対する警告句でしょうか、ご用心。

重い荷を背負い初めたランドセル

藤田　泰子

幼児の殻を破り、少年期の第一歩を踏み出した姿勢を、同時に、あの頃、あの道、ランドセルのなかった時代を想起させられた。

中飛車で堂々勝負かけてくる

宮口　笛生

相手が苦手と解っていても、強引に真向から挑んでくる。さて無心だろうか、これには兜も脱がされそう。

どこへでも行けと叱った子を捜す

板垣　夢酔

私にもあった。三人の子供のどれにも、その頃は兎に角若かったんだ。一撃されたような思いで鑑賞。

人嫌いには非ず酒場の隅にいる

谷垣　史好

止り木では端っこを好む。酒落たお馴染みさんで、それでいて社では部長さんとか…。

腹立てて見てもお酒はよう飲まず

辻　白渓子

喜怒哀楽、酒をたしなむ者の特権か。重宝な時がある。然し甘党にもそれなりの場があるようで……。

本心を試すかわいい嘘をつく

森田　熊生

本当の気持を聞き出す手立ての一こまに使う嘘。嘘にもいろいろあるが、旨い嘘の作品なり。

お人好しだけど貰くものがある

岸野　あやめ

見かけによらぬ、一本芯の通った頼母しさを感ずるお人。さて何方のことかしら…。

骨折り損一つ賢くなりました

本間　満津子

他人のためとはいえ、力を尽したのに、無駄になった。その自戒の姿を、話し言葉で旨く納められている。

飯蛸ともずくとそこへ熱燗と

春城　年代

鯛の生き造り、いやいやこれだけ揃えば言うことなし。五七五　上手に並べてくれはった。好きですねエ。

口角泡を飛ばしてたかが釣

野呂　鵜汀

何のことない、たかがそんなことでと、はた目には一笑ごとも、それぞれの持つ趣味の違いで格別な場が生まれるものだ。

てにおはに少うしボケが出はじめる

舟木　与根一

話の辻褄が合い難くなるのも、年かいなあと、日頃自分の思っているところを、ずばり刺されたような感嘆句。

秀句鑑賞

—水煙抄—

—前月号から—

江口度

背ボタン一寸甘えた声を出す

大川幸子

何時も口やかましい女が外出時、新調のワンピースの背ボタンがかけられなくて「一寸きてー」と甘えた声で呼ぶ。何気ないところをとらえ背ボタンを凝人化した表現のうまさに脱帽。

妥協した目にうっすらと見る涙

東浦砥代

言うだけは言った。口惜しいが一歩自分がひかないとその場は治まらぬ。自分の言い分が正しいだけに、涙をこっそり拭いて耐える作者の床しい心情が彷彿としのばれる

年毎の不漁に蟹がうまくなる

野村静雄

いま迄は、蟹がふんだんに獲れたが、海の汚れや、二百海哩とかで漁場が狭くなり不漁が当り前になって来た。味は昔と変らないのだが、高嶺の花となると食べてみたくなる。うまい物と思ってしまう。人間の心理をうまくついている。

こぼれ種大地に芽ぶく春の音

奥野テル

窓を開けて庭をみる陽気な午下り、名は知らぬが、種をもたげた芽があちこちに出ている。恐らく野や山からこぼれた種が一斉に芽吹いているのだろう。耳をすませば大地をゆるがすように聞えてくる。自然界の素晴らしさ、春だ、ハミングがひとりでにでてくる。

さりげない別れにしたい春の雪

安田志津

テレビドラマのようにさりげなく去って行きたい。別離の悲しみまで、周りがお祭りにしてしまうことが多い。折りからの春の雪の繽紛と降っては、儚く消えてゆく。私の別れは、さりげなく、さりげなくこの雪のように……春の雪が非常にきいている。

クシャミ一つ椿の首は落ちました

舟渡杏花

丁度、椿の花が落ちる時にくしゃみが出たという同時性、作者は、椿の花よもっと咲いていておくれと願った途端に、くしゃみが出て首を思わす重量感のある花が落ちた。くしゃみの出る時は、その瞬間に思っていたことが成らない現象で、くしゃみで花を落してしまったのではない。花を愛する心情が巧みに表現されている。

義理果たす文へ四角い字を並べ

上鈴木春枝

義理を果すのは窮屈なものです。それを、四角い字で代弁したのは見事なものです。

笠取れば女が匂うへんろ旅

月原つくし

お遍路さんといえばお年寄りの代名詞。抹香くさい感じを、女が匂うと仕上げたのは流石、それに女性の美しくなりたいという性をからめたのはうまい。

心細い親にだんだんなりそうな

高杉千歩

軽薄短小技術は、年寄を置いてけぼりにしてゆく。孫達はファミコンや、ワープロを体の一部のように使いこなす。どんな質問が飛び出すやら……。心理的な描写で心細い親を表現した手腕に感服。

ともかくも住めば都とお茶を入れ

栗谷春子

軽いタッチで達観された御夫婦の幸せな家庭を垣間見せられたような佳句。

砂に水しみこむような安堵感

片岡智恵子

全く見事な言い廻し。

紙数が尽きましたので残念ですが、心惹かれた句を掲げ擱筆いたします。

今一つ無になりきれぬイワシ雲

竹治ちかし

弱音吐く男の瞳定まらず

川島諷云児

逢える日の空は果てまで透きとおる

福田礼子

特攻隊と川柳

田中正坊

金子兜太の『わが戦後俳句史』の中に、

朝はじまる海へ突込む鷗の死

という句がある。俳句専念を決意した朝の眼前の風景に、珊瑚海で死んだ零戦搭乗員のイメージを重ねたものと自解している。

ところで、私は最近、第二次大戦の末期、爆弾を積んだ飛行機もろともアメリカ軍の艦艇に体あたりするために編制された神風特別攻撃隊員が出撃直前、多くの川柳を詠んでいたことを知った。

これは、戦歿海軍飛行予備学生の手記『雲ながるる果てに』に収められたもので、四名が百句を残しており、若くして散華した青年の心情が〝川柳〟という形で赤裸々に表現されている。彼らは昭和十八年九月、学業半ばにして海軍予備学生として航空隊に入隊して訓練を受けた後、同二十年三月、神風特攻隊に編入され、鹿児島県の国分基地に集結している。

川柳は予備士官宿舎で、あるいは待機中の指揮所で、さらに出撃命令が下ってから作ったもので、

生きるのは良いものと気が付く二日前
まだ生きているかと友が訪れる
後三日酔うて泣く者笑ふ者

と、拙いながらも真情を吐露しているが、中でも「生きるのは良いもの」という言葉が切々として胸を打つ

特攻機は雨が降ると飛び立てず、出撃が日延べになる。生死に直接つながるだけに、天候への関心が強い。

雨降って今日一日を生きのびる
宿の窓今日は静かに雨がふり
明日の空案じて夜の窓を閉め

四名ともに二十三歳。平和な時代であれば春秋に富むわかものたちが、雨が降ればホッと一息つき、酒を酌みかわす春がせつない。

戦時下といっても、学園生活にはわずかな自由が残っていた。それをなげうって予備学生を志願したのだが、やはり青春への思いは絶ちがたいものがあったに違いない。

アメリカと戦ふ奴がジャズが好き
ジャズ恋し早く平和がくればよい

出撃待機中の宿舎では、まだ学生気分が抜け切れない彼らだけに、いろいろと議論に花が咲く。

痛かろういや痛くないと議論なり
幽霊はあるぞないぞと議論なり
明日の晩化けて出るぞと友脅し

まことにたわいない議論もあるが、敗色日に濃い戦局に思いをはせ、期せずして本音ももれる。

勝敗はわれらの知ったことでなし
必勝論必敗論と手を握り

当時のマスコミが鉦や太鼓で特攻隊をおだて上げることにも、彼らの目はクールだ。

特攻へ新聞記者の美辞麗句
神様が野糞たれたり手鼻かみ

特攻のまずい辞世を記者はほめ
そうしているうちにも、友は次々と飛び立って行く。

還らぬと知りつつも待つ夕べかな
友を待つ空にまばらな星のかず
今日もまた全機還らず月が冴え

そして、出撃の日は訪れた。

死ぬ間際同じ願いを一つ持ち
父母恋し彼女恋しと雲に告げ

黙送の中を静かに特攻機

四名の名は、及川肇・遠山善雄・福知貴・伊能二郎。彼らの搭乗した零戦は、鷗のように南の海に突っ込んでいったのである。

雲崗石窟

■中国吟行の旅への誘い 3

大同の石仏

東野大八

昭和十四年八月号の「川柳大陸」に、私は〝京包線旅帖〟と題するルポを書いている。以下はその47年むかしの一文の抄録である。

○あご撫でて日本人が下駄で居る　大　八

朝六時半、黄塵の中に目指す大同駅が待っていた。街まで相当ある。私は城内行きのバスに乗った。黄塵は陽が上るにつれ益々猛威をふるい、遙かに連らなる大同の城壁を埋め尽くさんばかりで、街道の並木は根も抜けそうに鳴っている。城壁は岩の様に堅固で逞しく厚っぽくて高かった。日本の兵隊が防塵鏡もつけず城門の入口で警備についている。

バスはここで車内を隈なく点検される。砂塵の中に立たされた私の眼に城壁の「親日救国」の文字がクローズアップされていた。

大同の市街は現地人十万、日鮮の在留邦人は三千人、皇軍一個中隊が守備についている。この大同は紀元四三〇年の頃、五胡十六国を平定した北魏の首都で平城と呼ばれたが、十余年にして首都を洛陽に移したため、この街は朔北の一都市に転落し急速に寂れた。

そうした三千五百年の歳月に晒された大同のいまの街も、街筋は商牌を並べた中国人の商家が軒を連ねているものの、どこか陰気で活気がなく、街筋の道は中心街というのにひどく狭く、ところどころにある牌楼も垢抜けせず、洋車に乗ると頭がつかえそうに低い。こんな大同銀座だが、日本人経営のカフェーや飲食店が四、五軒眼につく。

○黄塵の切れ目あそこが自治政府　大　八

普北自治政府は一見内地の町役場なみだ。ここで山寛子さんにあう。彼女昨年北京から一人で赴任した若い大和撫子。彼女の案内で名刹華厳寺を見物。その時、彼女は、夜は拳銃を枕元に置いて寝るときかされて愕いた。

大同市内のシナ旅館で一泊し、翌早朝、雲崗石仏行きのバスに乗る。幸い今日は好天なので有難い。バスはくたぶれた車で前のボテから湯気が出ている。乗客は興中公司の社員や内地からきた大学教授らに私の六人。日本の兵隊五人が警乗で乗り込んでくれた。

雲崗の石仏は、大同の西北五里の寒村雲崗鎮にある。よたよたのバスはここまで行くのに二時間もかかった。窓外は殺風景な黄土層の丘陵で至るところで野兎が跳ね回っている。警乗の兵隊に話をきくと、彼等は石仏擁護のため、雲崗鎮に駐屯していてバス警乗も任務の一つ。この大同辺はよく土匪が出る由。

やっとの思いで現地に着くと、四、五人の兵隊が銃を片手に出迎えた。中に無精髭だら

けの若い将校がいたが、この人がこの駐屯部隊の隊長だ。乗客らはこの人の案内でまずは巨大な露座大仏の前に連れていかれた。

「この雲崗は涼州の高僧曇曜という人の開基で、北魏文成帝の庇護によって西暦四五二年に第一窟を掘った。御覧の通り崖の中に蜂の巣のような仏龕を彫ったが、横への長さ約千五百㍍、とても一日で見物はムリだ」

とガイドのこの将校も苦笑まじりだ。あたりは寒煙蕭条たる土民部落を抱え込んだ黄土層が果てなく展り、一方の懸崖は千体万仏を秘めた洞窟のジャングルである。風もなくこのあたりには死のような静寂に包まれ、夏というのに肌身が引緊る思いだ。ガイドの汚い軍服の将校はなかなかのインテリで、この地に居ついて私は幸せです、といった別れの言葉が印象的だった。

私はこのルポに続き雲崗石仏拝観記を纏めているが今は各辞典に詳しいので割愛する。

さて前記したルポの記事中、雲崗石仏到着のくだりに出てくる、巨大な露天座仏（詳しくは第20洞の目玉で高さ14㍍）の膝になんと麻生路郎先生がのっかっていられたのであった。昭和十三年十月のこととあるから、私のかいた旅帖の中身より約一年前のことだ。この石仏座上のワンカットは、古い川雑誌上を飾って柳界でも話題をあつめたものだ。

「こんど大同へ行くなら、この雲崗の大仏さまの膝へ、路郎先生気どりでのっかってみたい」

というのが橘高薫風さんの宿願ときいた。私とて同じ思いである。もっともこの雲崗あたりの地質は、軟弱なジュラ紀の砂岩層だから48年もの風雪に、現在もこの仏さまの膝が健在なのかどうかは話は別である。

「麻生路郎先生を蒙彊北支の旅に招待したのはわてだす。箸の上げ下ろしまで面倒みましてな。そりゃあ喜んで貰いましたんや」

朔北名物の駱駝の鈴をききながら、生粋の大阪弁を駆使してこう語る岩崎柳路さんの言葉を今も忘れない。その傍らに駐蒙軍軍医少佐小川静観堂さん（川雑同人）の姿もみえた。

昭和12年（一九三七）七月七日蘆溝橋事件が突発し日中戦争の火蓋が切られた。八月八日日軍は早くも北京・天津を占領。この作戦と併行しチャハル作戦が展開され、張家口を占領したのが八月二十七日である。そして蒙古連盟自治政府が樹立されたのは十月二十七日である。この戦塵収らぬ中の昭和十三年九月、麻生路郎は蒙彊の土を踏んでいるのである。内地直輸入の娘子軍60人を擁したカフェー東亜会館の経営者に過ぎない岩崎柳路の、まことに怖るべき政治力というほかはない。

私は蒙彊新聞北京支社在勤から、張家口の本社詰になったのは昭和十八年夏、そして召集の赤紙を貰ったのはあけて十九年の二月であった。この時、北京に出て今の妻と形ばかりの挙式のあと応召地山西省路安に向った。同年四月洛陽攻略戦を終えて、奇しくも転進したのが蒙彊の厚和（現在フホホト）であった。同年十一月この駐屯地へ新妻が独り北京から二日がかりで面会にきてくれた。わずか半日の逢う瀬のあと、新妻はその帰途、列車が兵匪の妨害に遭い不通となり大同で下車し一泊のやむなきに至った。

「真暗な大同の城壁の底を私は独り歩いたのよ、暗くて寒くて心細くて、でも私はちっとも怖くはなかったわ」

幸い現地人にかどわかされもせず、王昭君の二の舞いにもならずにすんだ妻は、そう恬淡と明るく語っていた。その思い出の大同へ茫々四十年の歳月をおいて、いま相まみえようとしている哀妻である。

傍島静馬氏を悼む

真面目なお父さん

西尾栞

隠岐の島の西郷町の国民宿舎の朝の六時頃私の寝床の隣で、素裸の身体を握り拳で叩く人がいた。

「アンタ、何してんねん」

「これが私の健康法でんねん」

というて胸から腹から脚から腕から、真赤になるまで、リズムをつけて叩いている人は静馬のお父さんだった。白髪まじりのチョビ髭の口を一寸尖らして、得意然と話す静馬さんは全く「お父さん」という親しさのある、お父さんの感じであった。

その静馬のお父さんが、呼べど帰らぬ人となったということを聞いたのは、開花の遅い今年の桜の花もポチポチ散り急ぐ四月十五日であった。四月五日に歿くなられて、六日が告別式だったそうである。それで遂に式にたつことが出来なかった。洵に残念である。

でも「願わくば、桜の下に我れ死なむ」を地でゆかれたことは、立派なことであった。

静馬さんは明治三十三年一月二日のお生れだったから、享年八十七歳の天寿を全うされたわけである。既に八年程前から心筋梗塞で入退院を繰り返されて、川柳から遠ざかっていられたが、入院中に「柳行李」という変った名の句集を発刊されたので、私達はびっくりした。その句集は、几帳面なお父さんらしく、川柳に手を染めた昭和二十八年二月からの入選句と天、地、人、佳、特選になった句を分類して、特選句は選者の評も載せた、正確を期した句集であった。

お父さんは、常に蝶ネクタイが好きで、キッチリと結び、風貌も亦立派な英国型の紳士で、細身のプロポーションは清潔そのものであった。お父さんからくる便りや、投句の文字は一画一画もおろそかにしない固い性質そのものの文字で一見して静馬さんを思い出さ

合同句集「風」出版記念川柳大会

日　時　昭和61年6月15日(日)10時開会

会　場　なにわ別館
松江市北松江　松江温泉

★事前投句＝出欠不問（締切）

題と選者　「花」時実新子／「明るい」柴田午朗／「朝」天根夢草／「仏」山根梟人／「風」金築雨学（謝選）

当日出句＝締切11時・出席者のみ

題と選者　「笑う」室田千尋／「生きる」高杉鬼遊／「流れる」津川紫吻／「飾る」園田恵美子／「声」但見石花菜

当日会費二、〇〇〇円（懇親宴・大会報）

〈合同句集出句者〉三鈷・千代・荒介・瑞枝・千秋・健次・乃里子・かずお・楓佐吉・久枝・寿美子・雪子・操子・圭詩朗・美智子・ミツコ・馨子・嘉寿子・一笑・昭二・ひさお・博子・雨学

主催　川柳研究「風の会」

れる文字であった。今はなき吉田圭井堂さんとは大の仲よしで、傍目にも良い朋友だなア、柳友だなァと羨ましく見たものであった。牛は牛連れで同じ齢頃の圭井堂、多久志、小松園、川村好郎、大坂形水、と自分と柳々会という会で、三方五湖や北陸の温泉廻りを楽しんだものである。

静馬さんは昭和四十五年頃より恩師路郎著の句集「旅人」以後の麻生路郎作品を、労をいとわず摘出して下さった。そして昭和五十二年五月発行の「旅人」の普及版に載せることが出来たのは静馬さんのおかげである。

句集「柳行李」の二枚目の写真版に、昭和三十七年九月六日の路郎先生からの葉書の一文をコピーで掲載している。それは川柳雑誌は当時、九月の川柳忌の句会を期して新選者を発表する慣わしであったので、その報せの葉書である。昭和二十八年から始められて、九年の間に公的選者になられたことは、刮目に値する進歩であった。

とまれ、真面目と真剣とは静馬さんの身上で八十七年の生涯は立派なものであった。今頃、閻魔さんから、リラックスにリラックスにと言われていられることでしょう。謹んでご冥福をお祈りしてペンを擱く。　合掌

静馬忌やほろほろほろと桜散る　栞

親友　静馬さんを悼む

川村好郎

思えば約八年前傍島静馬氏は心筋こうそくのため急に倒れ、それからは懸命の療養とご家族の看護のおかげで一時は回復されたが、次第に老弱になり、点滴輸血の甲斐もなく寝たきりのまま肺炎、心不全のため遂に去る四月五日ご逝去された。行年八十六歳。

若本多久志氏提案の九十歳までは頑張ろうと静馬さんと私と三人同盟契約したのに。「君も冥途へ早う来い」と手招くように、ここ二、三年のうちに何だか私ひとりぽっちに遺された気持で寂しく悲しい。

永い間路郎師門下生として私は静馬さんとは親睦深く、教えられたことは多かった。静馬さんは実直丁寧熱心な性格で、書体も正確に筆を執る如く、句会にもきちんと折目正しく服装を着て、誰からも英国紳士だと言われるほどだった。そういう人だから本社句会へも月一回欠くことなく、万障繰合せ二十余年出席をつづけ、川柳塔社から表彰されたのだ。句風は須崎豆秋氏を師とし、軽妙な作品が多く、選者が披講された時、あー静馬さんの句だと判るほど独自なおもしろい句を川柳塔にも投句していた。病臥の日も投句し勉強し、たとえ書けなくても私とは電話で川柳を話し合ったのがしばしばであった。静馬さんは愉しく川柳に生き川柳によって生かされた半生であった。

静馬さんは旅行が好きだった。晩年はご子息たちにすべて仕事も任し、悠々自適、句会や旅行、俳画など楽しんでいた。

昭和四十二年六月、西尾栞、若本多久志、吉田圭井堂、松江梅里と私と、率先して静馬さんが会をつくり、安宅の関、山代温泉へ二日一泊で行ったのが振り出しで丹波篭坊温泉白浜など菊沢小松園、大坂形水も誘い、若峡湾めぐり三方五湖など愉快な年一回の楽しい会ばかりだった。わけて岡山湯郷温泉の時のことは静馬さんと私とはよく思い出話をする。露天風呂で六人衆がほんとうの真っ裸でうちとけて談笑したことは忘れられない。刎頸の交りだった。あの懐かしいスナップは改めて出し繰り返し見ている。

静馬さん、また話そうと電話をかけても永遠に応えが無い。痛恨の極みだ。謹んで御冥福を祈るのみ。

吉岡逓児君の死を悼む

恒松叮紅

人間の歳時記に春と秋乏し

主なき書斉の額に逓児が遺した句がある。

逓児が入院したのは、昨年の11月半ば、家族にはその時既に、癌の末期で早くて四ヵ月程の命であるという苛酷な診断が知らされていた。無論本人には何もわかっていなかった。私にも奥さんからそっと聞かされて愕然とした。それから数ヵ月、肋膜炎だと偽り本人に知られないよう世間へもひたすら隠して、懸命に介抱して来られた奥さんの胸中には耐え難い苦痛があった。又、私も素知らぬ顔で面会し、時には同人費など貰って帰るのはとても辛かった。4月1日に容体が悪化し個室に替ったという報せで、面会に行った時には、点滴と酸素吸入で苦しそうに病魔と闘っているやつれた逓児の姿があった。印刷の出来上った「川柳塔まつえ」No.97を持って、3日の朝再び面会した時にはもうそれを手にとる力さえなかった。そして4日の午前3時55分六十二歳の生涯を閉じたのである。死顔はいとも安らかな眠り顔であった。

逓児と私は、昭和14年頃勤め先の松江郵便局で同僚として知り合い、ふたりは不思議と気が合って、川柳を通して四十五年余の今日まで兄弟同様の家族的な交友の絆を保って来た。翌15年には、これも同僚であった、現松江番傘川柳社の本庄快哉と職場に川柳会をつくり、松江逓友ぎんりん会と名付けて青春時代の情熱を傾け、ぎんりん会の三羽烏と自称していた。戦時中に逓児が「赤トンボもう日の丸に空はない」の句を作って憲兵からひどく大目玉を食ったという話は最近聞かされた。戦後、逓児は松江電報局へ、快哉は島根県庁へそれぞれ職場が替わり「逓友ぎんりん」は「パロマ」と改題して松江郵便局に残った。

21年3月に松江柳城社が〝柳城〟を創刊、逓児は第6号から編集人として活躍している。41年には川柳塔まつえを復刊、同人となり、文才に長けた逓児は編集に手腕を揮い、今日の川柳塔まつえの基礎を作った。44年4月に郵政川柳人連盟中国ブロック会員となり、7月に川柳塔本社同人になっている。51年に島根県川柳協会が改組され、常任理事として、今日まで会の運営に尽力して来た。

病床にあって、松江電報配達事務所所長の重責を感じ、一日も早く退院したい一心で、「寝すごした半年を埋む今朝の靴」と紙片に書いて、今の自分の心境だと言っていたという。癌性胸膜炎という病魔に川柳人吉岡逓児を奪い去られた。彼の温和な人柄には再び接することはない。

本昭庵法昇信士。謹しんでご冥福をお祈りする。

合掌

遺句

それまでは他人ごとでした五十肩

男六十　もう戻れない橋渡る

胃袋の懺悔を癒すパンシロン

◇

川柳塔社常任理事会（5月1日）

出席者＝栞・紫香・薫風・太茂津・柳宏子・雀踊子・萬的・文秋・鬼遊・白渓子・杜的・智子・天笑・小路・一二三・武庫坊・正坊・凡九郎・史好

〈議事並に報告事項〉

▽紫香氏より藤井明朗喜寿祝賀観桜川柳大会の報告あり。

▽国民文化祭（仮称）の打合せのため栞主幹が5月6日再度上京される。

▽中国吟行の旅、9月18日出発と決定。

■6月の常任理事会は**2日**（月）

海族のタカラジマ、鳥羽《答志島》。

旬の味覚を存分に…
潮騒の香りでおもてなし。

鳥羽随一のフィールドアスレチック。

仲間と自然の中で楽しむバーベキュー。

海水浴、釣り、ウインドサーフィン…
プライベートビーチで、ちょっとリッチに。

幹事さん
ラクラクのご宴会
パックから、ご家族・
少人数さまのプライベート
プランまで、各コース
ご用意いたして
おります。

●料金のごあんない
◆大漁コース …13,000円
◆潮騒コース …10,000円
◆松籟コース… 8,000円
※1泊2食、税・サ込です。※休前日は2,000円増です。
※12月31日～1月4日 4月28日～5月5日 7月20日～8月25日は除く

交通のごあんない
- 大阪ナンバより鳥羽(近鉄特急)——2時間
- 名古屋より鳥羽(近鉄特急)——1時間40分
- 伊良湖より伊勢湾フェリー——60分
- 大阪よりお車で西名阪～伊勢自動車道を経て—約3時間(専用駐車場あり)

施設のごあんない
●全館冷暖房完備 ●大・中・小宴会場、ラウンジ、展望大浴場、アスレチック、プライベートビーチ、キャンプ場

とっておきのパーソナルアイランド
リゾートホテル
サンビーチ鳥羽
伊勢志摩国立公園 鳥羽・答志島

三重県鳥羽市桃取町字平石1591番地
鳥羽郵便局私書箱16号

お申込みご予約は●大阪案内所☎06(226)0931●ホテル☎0599(37)3315

国弘半休門さんを偲ぶ

弘津柳慶

六十年七月号の川柳塔「柳界展望」に、三月十八日、小野田市山口労災病院に入院、投句を休ませて頂きます、と半休門さんの書信がありましたが、八、九、十、十一月号に病床からの投句があり、快方に向われつつあるのだと安堵し、一日も早く退院されることを祈っていましたのに。下関一杯水誌の四月号で、半休門さんが七十九歳で四月四日午後十時五十五分、逝去されたと知らされ、驚いています。

私との出会いは、昭和二十五年九月、竹原から下関へ転勤し、川雑下関支部句会へ十一月十三日、駅長公舎に出席して、初めてお会いし、それから毎月句会で色々と川柳会の事などをお聞きして、楽しい語らいに過したものでした。一時、半休で投句されましたが、路郎師から、半休門でいいではないかと言われたとかで、半休門にそれから統一されたと聞きました。川雑下関句報も、一杯水と誌名をつけ、二代目会長として、下関句会を盛り上げられ、会員も三十名を越す盛会でした。暮には、半休門さん宅で年末句会を開き、一年間の皆勤者賞、上位入賞者賞等が出て、打揚げには、闇汁を計画されて、各人が思い思いのお菜を持ち寄り、電気を消して、なべの中に投げ入れてつつき合う楽しさを味わったものです。中には手の込んだ、干瓢でわらじを編んだものもあり、ワイワイ、ガヤガヤと一晩を過した思い出が今更のように懐しく思われます。

小野田の駅長に栄転され、小野田世面多留川柳会、宇部五平太川柳会、等々後輩育成に尽力され、国鉄職員を川柳会に引張り込まれて、下関句会でも国鉄職員が大半をしめる程でした。一杯水誌も、三九五号が出るほど長く続いているのも、基礎を作られた半休門さんの人格と人柄の賜だと、しみじみ感じさせられています。

二等車を千鳥に買けてみるアロハ　半休

の短冊を頂いて、大切に保存しています。

十一月号の病床よりの句が最後だったのでしょうか。その十一月号の句

半年も寝てると医者のことも言い

故 白岩文衛
句碑建立記念川柳大会

とき **昭和61年6月29日**（日）
除幕式 午前10時から・乾杯祝宴
於 大原町宮本・武蔵生誕地
句碑 **白百合の白さこころの紋とする**
句会 讃甘公民館
お話 西尾　栞
兼題 白　本田恵二朗選
百　橘高　薫風選
合う　水粉　千翁選
心　土居　哲秋選
紋　青山　岳峰選
岩　神原日出夫選
文　田中　正坊選
立つ　土居　耕花選
出句締切り12時半
（投句は辞退させていただきます）
会費 千五百円
呈賞 総合10位まで

主催　大原川柳社

運命は天にまかせと他人は言う
クーラーで板にされそうな冷えが来る
お盆も過ぎて巨峰で見舞われる
健康が崩れて不治よと消光す
ご冥福をお祈り致します。

暗なべをつゝきにこいと笑ってる　柳　慶

石川　侃流洞

四月六日、下関市伊崎町利慶寺において、川柳塔同人・勲六等単光旭日章・国弘半休門さんの葬儀がしめやかに行われました。法名「浄勲院釋弘教信士」四月四日没、七十九歳。

半休門さんは、温厚で決断力に勝れた人でした。昭和八年川雑五月号に路郎師の選に入選してから本格的に川柳をはじめ、昭和十五年不朽洞会員に推薦されて川雑下関支部を支えて来られましたが、終戦とともに川雑再刊を機に、川雑拡張に敏腕を振われ、市内最大の吟社を育てられました。

当時市内には、夫々に本家、元祖を名乗る排他的吟社が雨後の筍のように声をあげましたが、半休門さんは、先ず市内最長老の藤井米三翁を川雑下関支部の顧問に迎え、新しい企画を次々実行して、各吟社との融和、交流を成功させ、昭和二十五年一月柳派を超えた下関一杯水川柳会を発足させ、去る者は追わず、来る者を拒まずの柳人交流の広場を作られたのです。

私と半休門さんとの出会いは、昭和二十一年一月、軍隊が消滅して下関駅に就職した時で、川柳に誘われ、句報の印刷や句会のお手伝いさせて頂いたのが始めで、半休門さんはその後転勤はありましたが、下関に居を構え活発な活動を続けられました。

昭和二十八年十一月、半休門さんは、宇部港駅長に栄転され、下関在住ができなくなり私が後のお世話をすることになりましたが、会員の転勤や指導者の死去等で、苦しい運営を続ける結果となりました。

半休門さんは、次々に栄転され、任地で宇部五平太、東広島照明灯、小野田世面樽などを育てて活躍される一方、任地から或は下関に帰って、私たちの面倒に奔走されました。

私も昭和四十三年二月、下関を離れ、停年後の勤めの関係で、お会いする機会が少なくなり、一年前に小野田市の山口労災病院に入院と知ったものの、お見舞いに伺う機会を失しておりました。

幸い、今年からフリーになり、三月に病床を訪れたところ、奥様の心遣いで、窓辺に蜜柑を並べ、沢山の目白を寄せ、明るい雰囲気の闘病生活を送っておられました。

暖かくなったら、車椅子なら句会に出られるだろうと至極元気でした。しかし、四月四日午後十時五十五分突然に逝去されました。病名は胃癌と聞きましたが、苦しまれた痕もなく、川柳染め抜きの浴衣で眠っておられる姿に、思わず熱いものがこみ上げて来ました。

今日の下関川柳が大同団結して根を下すことのできたのも、半休門さんの川柳愛によるものであり、その功績に深く感謝し、安らかな眠りに、合掌を捧げました。

待っていた再起の春へ風無情　侃流洞

第1回
川柳塔勉強会

日　時　**昭和61年7月4日(金)5日(土)**
場　所　伊勢鳥羽答志島サンピーチ鳥羽
集　合　4日午前9時45分
近鉄上本町駅地上改札口
句　会　お話　西尾　栞
兼題　縞　宮口　笛生選
爪　小出　智子選
千　橘高　薫風選
観　光　鳥羽湾めぐり・鳥羽水族館（ラツコの親子）・伊勢神宮・二見浦・パールロード
会　費　二万円
申し込み　6月15日までに
板尾岳人・春城武庫坊まで
TEL・06(431)1152

主催　川柳塔社

初歩教室

題 ― 友達 ―

阿萬萬的

友達という課題に対して皆さんはお齢を召しておられるせいか、過去をふり返るような句が多かったようですね。先ず戦争経験の句。

班長と今も呼ばれる戦友会　兼治郎
友呑んだ海が矢鱈に恋しくて　昭治
友達と酒くみ交す笑顔の父　登美子
（いい顔で戦友と酒交す父）
戦友会みんな昔の顔になる　新造
友達に戦死が多い名簿見る　金吾
戦友会夜が明けるまで語り合い　昭治
（戦友会昔の歌に飲みつづけ）
友眠る凍土の解ける日はいつぞ　喜代志
お互いにひとのことは笑えませんねえ。
笑うてた友達にも出た前立腺　章久
染めてるのと聞く友達も髪を染め　八重子
歌の文句じゃないが、会いたいなああの人にの句もありました。
葉桜になれば会いたい友がいる　公乃
菜の花が咲くと友達思い出す　高代
（菜の花にふる里の友想い出し）
年重ねる程に友達恋いしたう　有佳
夕焼けに会いたい友が一人居る　実男
（夕焼け小焼け故郷に逢いたい友がいて）
友達に餓鬼大将がいて平和　金吾
（餓鬼大将の友まっ先に想い出し）
アルバムの友は制服ばかり居る　白李
元駅長さんの白李さんの句、わかります。
病気の友をおもう気持は複雑ですね。
病む友に真実言えず慰められ　明吉
（真実は伏せて笑顔で見舞う友）
病む父に親友の訃報告げる役　てる
（病む父に友の訃報は告げにくく）
寒椿ポトリ友の訃報が飛んで来る　実男
寒椿の寒を取った方が句調がよいのでは。
ありがたい友の輸血で病に克つ　繁男
（ありがたや友の輸血が脈を打つ）
経過よく見舞いの友のあり嬉し　太郎
（経過良好皮肉もちょっぴり言う見舞）
友情とは互いに労わり合うものらしく、
お互いの愚痴いたわりつ六十路過ぎ　サワ子
（縁のぬくさへ互いに愚痴を労わって）
落目でも友達がいて救われて　房子
花の下傷にはふれぬ仲間です　高代
（花の下傷には触れたがらぬ友）
運命か似て友達を思いやり　吟平
こんな時手紙をくれてやはり友　保夫
泣きに来た友を鎮める熱いお茶　里子
憎めない友の愚痴聞く耳がある　円女
（友の愚痴を聞かされている縁ぬくく）
友達と雑談のうち知恵貰う　よし津
（雑談の中で友から知恵貰う）
友の目がつらさ伝えた帰り道　悦子
真実は聞くまい今を友達で　久子
（友情の一つに真実聞かず置く）
肩書がとれて変らぬ趣味の友　春枝
公園でだけの友達老い二人　兼治郎
（城跡で会う老人の連れが出来）
話する焦点合わぬ里の友　吟平
（焦点は合わぬがなつかし里の友）
ここで若い友達の絵を見てみよう。
ままごとの友日が暮れて児にもどり　稔
一年生友達出来てとび廻り　登美子
愛児園二歳の孫に好きな子が　八太郎
（愛児園孫にも好きなひとが出来）
童顔に戻る羅漢の幼な友　勝美
（幼なき日の友は羅漢に似た笑顔）
ペアルック親に内緒の友がいて　公乃
反抗期友達すべて知っている　周三
（反抗期その友達も反抗期）
友達の彼女に会って恋を知る　芳水
友達も男見る眼はくい違い　有佳
友達の濃い目の化粧が気に懸る　章久
射程距離にいる友達が眩しすぎ　寿子
友情に深入りをして火傷する　サワ子
一線を引いて打ち解く女友　勝美
さわやかな友達でいよう男女の仲　寿美子
（爽やかに別れたふたりへ夜が冷え）
恋愛とは別に

友達にも本心隠す受験生　隆　積
親友もライバルとなる試験の日　芳　水
球友の遺影に踏ます甲子園　サワ子
校旗掲揚遺影の友も歌ってる　新　造
（校旗掲揚遺影も青い空見てる）
ライバルは友達であり又敵でもあるようだ。
人生に勝ったか黙って友笑う　周　三
友達は昇進してからそっぽむき　喜代子
試す気か友は手応え待っている　寿　子
落し穴しらず友達見失なう　カ　ネ
（落し穴の不覚友達見失なう）
岐路に佇つ友へ断り状を書く　たかし
（断り状こんな友情だってある）
ここらで悪友の句をちょっと。
友達が金の匂いで寄って来る　博　子
義理を無視友達甲斐を押し通す　姿　洋
友達と傘をささずに肩を組み　方　子
（飲仲間肩組んだまま雨に濡れ）
ポン友の嘘と誠とコップ酒　太　郎
居酒屋で十年来の友のよう　八太郎
（居酒屋で駄ぼら交せる友がいて）
我が道を行けば悪友袖を引く　白　峰
言い訳に出まかせの友の名を並べ　姿　洋
悪友と妻天秤にかけてみる　克　子
悪友と互いに呼べる程の仲　稔
独り住み友の情けが身に沁みる　千代女
独身の友から貰ろた旅土産　春　枝
悪友もみなそれなりに好々爺　やすお
それが女性の句となると、

友達もそれぞれ母の顔を持ち　久　子
（友達はもうそれぞれに母の顔）
悪友ではないが、こんな明るい友もいる。
友達のボトルで唄う黒田節　白　峰
コーラスが仲間同士の輪を広げ　弧　舟
夫抜き姦し同士の旅をする　円　女
（食べて喋って女同士のバスの旅）
旅のついでに―
お遍路がみな友達になる札所　白　李
極楽は幼友達と行く遍路　て　る
（バスツアーの遍路で喋る友が出来）
老いてくるとひとしお友がなつかしくなり
六十路来て幼友達に探す面影　ツヤ子
（たしかに面影残っていました故郷の友）
懐かしい国訛り聞くクラス会　弧　舟
友達は白髪になってもちゃんで呼び　通　子
米寿まで共に生きたい友が寄る　悦　子
坂いくつ越えて睦まじ古稀の友　輝　月
（古稀近き友で惚気も言える仲）
色褪せた茶呑み友達夫婦です　八重子
女房も羨しがる友なさけ　明　吉
（男の友情妻もちょっぴりやいている）
旧友に結構すくめと羨まれ　豊　太
楽観主義の友が大ほら吹きに来る　たかし
佃煮がうまいと茶漬食べる友　里　子
年賀状だけが絆になってる友情もある。
賀状だけの友達だけど温かい　よし津
年賀状だけの友達懐かしい　喜代子
（音信は賀状だけです故郷の友）

こんな句もありました。
友達がなくて詩心冴えることも　隆　積
（友と別れて詩ごころ冴える北の旅）
趣味のない無口の友もやはり来る　保　夫
（趣味のない友も来ていた食べる会）
友達の輪が広がってあたたかい　房　子
（春うらら友達の輪へ陽が当る）
友情がすっぱく感じるレモンティー　博　子
友達と豊かな時を梅の宿　カ　ネ
ひなげしは友が何より好む花　千代女
（ひなげしにそよ風友が好む花）
親子ほど年齢の違った釣の友　て　る
你好と呼んで文化の友が来る　喜代志
友達の言葉信じて父折れる　繁　男
（友の言葉にあっさり折れた父の齢）
子の事は言えず友達長電話　慶　子
（わたしも女　友達とする長電話）
おばあちゃんと娘の友達が声くれる　克　子
花活けて母は友達来るを待ち　方　子
好対照の句に
友達のように打ち明けられる母　寿美子
母のごと甘える友を持っている　輝　月
友達たのしく選句させていただきました。

◇

題「船」　**6月10日締切**（8月号発表）
ハガキに5句以内
「封筒」7月10日締切（9月号発表）
宛先　〒598　泉佐野市中庄一〇八一―九九
阿萬萬的

吟題課

しこり

清水一保選

情熱が肩のしこりを寄せつけず　さと美
彼岸墓地亡姑にしこりを詫びにゆき　サワ子
嫁姑しこりを知らぬ風通り　輝月
気にするとしこり大きくなるばかり　美緒
しこりなどないと言うのがしこりの芽　あやめ
上の方のしこりをもろて敵にされ　可住
和解への距離にしこりの石をおく　どんたく
吐き出せば何時かはしこり柔かく　ろ亭
星を見てしこりをほぐす露天風呂　西岡豊
傷口の底に沈んでいたしこり　明水
一つだけしこり残した椅子の塵　繁男
文明の産物いじめと言うしこり　米朝
美しい乳房の下にあるしこり　鶏汀
廻り椅子座り心地にあるしこり　弘朗
看取られて涙でしこり流す姑　梅みどり
言い分にしこりの残る遺産分け　代仕男
しこり取る酒でしこりを又つくり　不二
親と子のしこりを孫の声融かす　山本義男
スポーツのしこりが二本足にある　蛍
善人のしこりは胸に独り抱く　野村京子
一抹のしこり残して孤児帰る　公一
初孫を連れてしこりを消しに来る　紀雄
厳寒のしこりを解かす南風　秋人
まだしこり残す隣の高い塀　ちかし
若者の握手しこりに用が無い　忠三
待ちぼうけしこりが爪を研いでいる　白峰
気がつけばしこり命を食べている　實
地球儀を撫でるとしこりまだ残り　劦
示談書の折り目にしこり溜めている　正敏
楽天家しこり残さぬ空の碧　多賀子
銃口が向い合っているしこり　雀踊子
元凶は欲望という名のしこり　美津枝
抜いた刃のしこりが鞘に納まらぬ　久仁於
雪女しこりはとけぬままに春　玉恵
お賽銭投げてしこりを打ち明ける　かすみ
大陸にしこりを残す神の国　三吉
楢山の峠でしこりほぐし合う　文平
しこり消す消しゴムがないしこり　佳
屑籠へしこり上手に捨てる嫁　冬子
イエスともノーとも読んでいるしこり　ゆう也
勝ってくるぞと唄えばしこり疼きだす　砥代
自問自答心のしこり風いでくる　カズエ
明日へは残さぬしこり髪洗う　美穂子
遺言のしこり喪の帯きつく締め　人地
しこりには遠く写経の墨をすり　天雄
人類のしこりは重いという地球　軸

川柳塔柳箋

一冊　二百円
送料　二百四十円

派手

横地雅風選

豊作でかかしに派手を着せてやる　成人
派手を着る女が堕ちて行くドラマ　成人
派手を着て老眼鏡は出さず置く　八太朗
正直に派手と答えてうとまれる　やすお
私を売りますポーズ派手にする　重人
派手な服まだまだ老母にある若さ　ちかし
偽りの派手なリボンに騙される　智恵子
田を植えに派手な服着て駅へ着き　明水
派手になり出した聞込みピンと来る　木魚
決断を迫る太鼓が派手に鳴る　三枝子
派手に慣れ鏡のくもって来た怖さ　さと美
派手にする明日には明日の風が吹く　木魚
派手好みどうやら玄人筋らしい　春日
遠回りしながら派手な荷が続き　与呂志
派手でない宣伝だから信じよう　さと美
平和論派手に並べて爪を研ぐ　白峰

ひとり住まい派手な女の服を干し　明　水
スキー客村に都会の派手を撒く　悟　郎
派手好きな女の肩に桜散る　玉　恵
派手な音立てて今夜は酔うたはる　与呂志
派手な人謎の部分が多すぎる　達　子
ふるまいが派手で汚職を勘ぐられ　代仕男
新しい名刺が派手に喋り出す　文　平
年下の夫に合わす派手造り　義　美
ライバルの目と目が派手に交錯し　旭　恒
逢える日の鏡が少し派手に着せ　文　平
鏡見て一寸気がさす今日の髪　八　重
はじらいが派手な着物の袖を引く　白　峰
スカーフを派手に五十の風が吹く　道　子
星落ちて派手な光を裁かれる　可　住
派手かなと昔の晴着肩にかけ　悦　子
派手かしら時には気分変えて見る　九　重
派手な服着たがライバル上を行く　白　峰
派手好きな父に似合わぬ渋い遺書　輝　月
古傷を撫でる女の派手な文字　砥　代

佳

何もかも後妻好みの派手を着け　紅　汀
せめてもの女で居たい派手を選り　テルミ
派手過ぎるやっぱり派手ね好きを着る　暁　明
喪が明けて少し派手めの江戸小紋　新　造
派手好きで悔いのなかった花手桶　多賀子
部屋中を派手に灯してひとり住み　京　子

人

ライバルの派手が小憎いコンパクト　宵　明

地

派手だとは言わぬが夫の瞳が笑う　砥　代

天

さらり着てきれいな姑の派手好み　テ　ル

軸

還る郷心も服も派手捨てる

値段

中原比呂志選

昔の値ばかりを祖母は口にする　明　水
目の色を読んでセール値を付ける　多駄子
一本の値がはじかれるプロ野球　どんたく
買いそうな客へ予算を確かめる　喜　酔
適当な値段と知った肩の線　伊津志
値段などつけようもない月の石　みのる
二円引き安さにバスで買いに行く　喜　峰
言い訳をしながら値段を狂わせる　与呂志
ファッションとなれば値がつく古オーバー　倫　子
迷いぬきやっぱり月賦で買うと決め　繁　子
葬式の値段をお棺の中で聞き　鵜　汀
中流の意識高値をつかまされ　治　平
拝観のお布施の額へ悩む客　智恵子
切りつめた値段で店の運がつき　喜与志
めでたい日鯛の値段は気にならず　京　子
お値段もころあいですとくすぐられ　可　住
半値でも帖尻の合う店じまい　枯　梢
値の順に宝石箱へ仕舞われる　しげお
おしかった売約ずみの値段表　三　和
この値段あなただけです内緒です　忠　三
善人で値段にうとい息を吐く　玉　恵
毛皮ショー値段は聞かぬことにする　サワ子
円高は響かぬままの市場篭　米　朝
はっきりと値段が言えぬ義理の枷　砥　代
問題は政府が決めている米価　弘　朗
やけくその値引き心は笑ってる　本蔭棒
ひやかしでつけた値段で買わされる　兼治郎
値段より中味と水瓜は叩かれる　森脇和子
プレゼント値段じゃないの心です　博　子
ハウマッチ夫と当てっこして平和　たず子
半額で買っていただく傷がある　里　風
コーヒーは冷めてる値段折合わず　春　日
もの言えば安値の札がつけられそう　亭
騙された愛の値段がありますか　規不風
保険屋がいのちの値段置いて行く　赤木和子
物価上昇神よ地球は病んでます　三枝子
ズバ抜けて良いなと思う非売品　虹　汀
俺達の値段をはじく給料日　木　魚
宝石の値段としばし遊びましょう　道　子

人

正札の嘘さらけ出す五割引　正　敏

地

妻の座を捨てる値段は別にある　文　平

天

儲けには遠い値段の種を蒔く　雄　々

軸

減税は見送る戦闘機の値段

柳界展望

集録・板尾岳人

★第7回北夢之助賞作品募集
雑詠二句（未発表作品に限る）
選者＝去来川巨城・大野風柳・賀波沢黙六・越郷黙朗
斉藤大雄・鈴木青柳・野村圭佑・藤島茶六・渡辺蓮夫
粟田九十九
締切り6月30日投句料500円同封のこと
発表・川柳にいがた9月号誌上
宛先〒950新潟市新和132―21
小林美枝子宛
主催・新潟川柳文芸社

★第31回全国川柳作家年鑑参加作品公募
姓雅号・年齢・職業・郵便番号・住所・電話番号・作品7句。参加料参千円
締切り7月末日
刊行・10月下旬の予定
問合せ先
加古川市平岡町二俣733―18
安川一酔。TEL〇七九四・二六・八九七三

★川柳の小径・公園　句碑建立希望者募集
建立費（石代・彫刻費・その他一切を含む）は、一基平均10万円―15万円程度ですが、石の大小、形状等によって異なります。
申込先＝岡山県久米郡久米南町下弓削、山田止水、または恒弘衛山迄

★第15回かもしか誌上全国川柳大会　題「塔」　3句
選者＝本山哲朗・玉木柳子
安藤亮介・藤川良子・北村泰章・町田伸吾・加藤彩人
三上迷太郎・岩淵黙人・高田寄生木
参加料一組千円①姓号②郵便番号③住所④生年月日⑤血液型⑥柳歴⑦趣味⑧好きな草花⑨最近読んだ本⑩作品3句
締切62年1月31日着便
投句先030青森市松森字佃240―10吉田州花方

★川柳展望85年度冬季号10秀・新子選出新子賞候補作品

くるものはくる大根を抜いている　藤川　良子
母よ終りの一息深く吸い給え　住田　三鈷
無口なり　残尿感のあるうちは　佐藤　幸子
色ざんげ哀しいことを言いなさる　寺尾百合子
切腹は明日にのばす朧夜にて　長町　一吠
自由な男ひとりになってひとりごと　浜島　中呂
心　愛　夢　夕焼けに　脳血栓　大杉ミツ子
手を重ね合って真意は聞かぬまま　萩原　華雲
家庭革命米は各自で買ってくる　神谷三八朗
真新しい五重の塔に雨降っている　小出　智子

★60年度川柳研究年度賞
正　賞
みちづれにする気の笑顔かも知れず　三浦たくじ
準　賞
夫の掌の上で弾まぬ毬を撞く　宇部　幸子
子の位置で子の哀しみが見えてくる　新　万寿郎
そもそもの始めにぬくい飯茶碗　新家　完司

□新刊紹介

■高田寄生木句集「砂時計」
B6判55頁、かもしか川柳文庫第7集　頒価500円
青森県下北郡川内町浦町
かもしか川柳社

■竜本ゆき句集「風花」
遠からず生きつく道へ花を敷く
B6判60頁　頒価千円
札幌市西区曙3―3―6
北海道川柳研究会

■中村俊子句集「花の雨」

新同人紹介

渡部（わたべ）さと美（み）
―薫風・鬼遊推薦

金山（かなやま）夕子（ゆうこ）
―薫風・花子・瑞枝・千代推薦

さえきやえ
―薫風・花子・瑞枝・千代推薦

逃げてゆく私の秋をだきしめる

A5判106頁　頒価800円

愛知県東浦町森岡字下今池5―69渡辺和尾方　川柳みどり会

■大阪府文化芸術年鑑1986年版が刊行された。A5判370頁　大阪の文化団体が詳しく掲載されている。頒価三千円

▽消息・お便り△

★日川協理事・越郷黙朗氏に去る12月ドイツ連邦共和国国際会議より「国際文化功労賞を贈られた。

■私は現在体調が悪く入院中だが、一病息災の線で行きたい。ちなみに一月に85キロの体重が現在73キロになった。どうです。

入院する妻子をそれなりに思い　（寺尾　俊平）

■少し快くなっていた母が急に亡くなりました。三七忌も過ぎた今でも悲しくて疲れてほわんとしています　（藤川　良子）

■3月末から4月にかけてまた飛鳥の旅をして参りました。なにしろ歴史の一杯詰まっている所なので、又行かねばと思っております　（山内　静水）

■このたび紋太賞受賞に際し川柳塔社のみな様がたくさんお越し下さいまして、とても心強くうれしゅうございました。

泣き虫になって情けに包まれる　（春城　年代）

★第16回紋太忌川柳大会において林はつ絵さんが神戸新聞社賞を受賞された。

かんむりを探す途中の落し物　はつ絵

★吉岡通児氏（同人）が4月2日死去された。合掌

★国弘半休門氏（同人）が4月5日死去された。謹悼

★傍島静馬氏（同人）が4月8日死去された。合掌

▽訂正△

■4月号P12上段、神平狂虎氏の句「夜ばかり歩き続けるボールペン」

■4月号P26上段、北上喜酔→井上喜酔

■同P30上段、児島与呂志×→児島与呂志

■同P71下段10行目「纏足に故宮の片蔭濃し　長し。」

■5月号P35下段、信本博子さんの句「相性がいいのも彼の我慢かも」

■同P69中段「見落しの損ソロバンがはじき出す」赤木和子×→森脇和子

第五年度『夜市川柳』題と選者

		締切
第1回	「港」　谷垣　史好	6月末
第2回	「猫」　神平　狂虎	7月末
第3回	「卵」　高杉　鬼遊	6月末
第4回	「宵」　小出　智子	9月末
第5回	「島」　墨　作二郎	10月末
第6回	「指」　岩本雀踊子	11月末
第7回	「艶」　西田柳宏子	12月末
第8回	「力」　野村太茂津	62年1月末
第9回	「水」　正本　水客	2月末
第10回	「銀」　橘高　薫風	3月末
第11回	「ドレス」　中尾　藻介	4月末
最終回	「盃」　西尾　栞	5月末

『夜市川柳』規約

一、『川柳堺』誌上で毎月一題『夜市川柳』の題を出し、ハガキまたは便箋にて三句を記名投句する（毎回月末締切）。

一、投句された句は番号で整理した上一句ずつ句箋に清記し毎回選者が交代してこの選句に当たる（尚、選者は係が予め決定する。）

一、入選句は毎回四〇句に限定し『川柳堺』の翌月号で発表する。また得点は左記に基づいて毎回加算し年間のベストテンを競う。

一、得点　前抜　三十二句　一点
　　佳作　五句　一・五点
　　人の句　二句　三点
　　地の句　三句　四点
　　天の句　四句　一・五点
　　選者軸吟

一、『川柳堺』の例会を七月に限り七月三十一日（堺大魚夜市の日）とし、その年のベストテン上位七人を選者に迎え『夜市句会』を開催する。

一、投句料　一年分　一、〇〇〇円
　　（但し誌友及び例会出席者は無料）

一、投句先　〒593　堺市堀上緑町二丁九―二
　　河内天笑方　堺川柳会
　　電　0722(78)4706

本社 五月句会

五月七日（水）午後六時
メンズファッションセンター

黒川紫香氏のおはなしは『五月一日、この日は亡くなった妻の命日で、天王寺、一心寺へお詣りし、茶臼山へ出たところ〝おじいちゃん〟と同じ年頃の身すぼらしい男に声をかけられた。〝タバコ一本くれんか〟浮浪者にしては、ちょっと違った感じである。「みやび」を与え火をつけてやると〝ここへ来て坐りィな〟と言う。坐るとなれなれしく〝五月は暑うも寒うもなし、ええ時候やが、わしには辛い五月や〟〝なんでや〟〝五月に大阪の大空襲があって、おかあちゃん亡くなってしもた。それからええことあらへん。今は犬と暮らしてる〟。実は私も同じような身の上なので同情しかけたら、その辺のルンペンたちが寄ってきたので、慌てて立ち去った。しかし五月の大空襲というのが脳に落ちず、家に帰って調べたら、大阪大空襲は第一回が三月十四日、第二回目は六月十日である。多分おっさんの感ちがいだろう』というのがマクラで、そのとき調べた本から拾い出した大阪の交通のはなしが本題。国鉄、私鉄、地下鉄の創草期を紹介された。

初出席は前川千賀子（近江八幡市）川島諷云児（高槻市）。呼名賞は高須賀金太、奥田みつ子、川島諷云児の三氏。

月間賞は高田美代子さんが獲得。（S）

（進行―天笑）（受付―冬葉・月子）
（記録―射月芳・健司・山久）

出席者―武庫坊・年代・笛生・春蘭・郁栄美智子・冬葉・一郎・杜的・諷云児・白渓子寿馬・水客・勝美・千代三・重人・太茂津・紫香・鬼遊・紀雄・薫風・みつ子・照子・〆女・あいき・作二郎・勝晴・英子・藤子・柳宏子・三十四・悦郎・章久・正坊・隆二・眉水・はつ絵・白兎・与呂志・池田寿美子・柳影・萬的・金太・天平・愛論・小路・史好・頂留子・栞・形水・文秋・洋敏・月子・天笑蕉露・射月芳・岳人・東雲・三男・柳伸・智子・節子・狸村・規不風・山久・楓楽・度・喜風・健司・吸江・美代子・安藤寿美子・英壬子・庸佑・雀踊子・千賀子・寿美・寿子

席題「マンション」　墨　作二郎選

マンションの窓からチャルメラ呼んでいる　愛　論
エレベーターの無いマンションが売れ残り　美代子
マンションの死角で我慢の葱坊主　杜　的
マンションを見上げて虹を追っている　柳　伸
マンションの孤独が好きな老歌人　千代三
マンションの隣も同じ頃帰り　萬　的
マンションの窓からローンの灯がもれる　月　子
マンションをとっても嫌う父の下駄　美智子
マンションの影になってる僕の家　藤　子
マンションは雨長い電話をかけている　冬　葉
マンションのペットスリッパ履いていた　智　子
マンションでポケットベルが音をたて　寿　馬
マンションに住んで電話に首ったけ　吸　江
マンションに住む幸せを誇張する　天　笑
マンションで窮屈そうな鯉のぼり　〆　女
鍵二つ掛けてマンション武装する　金　太
マンションの雀朝から立話　重　人
マンションに得体の知れぬ女住む　諷云児
マンションに僕をさえぎる線がある　笛　生
マンションの窓飽食の顔並ぶ　白　兎
見晴しのよいマンションで惚けはじめ　みつ子
マンションの壁の白さに襲われる　天　笑
マンションのひとり住まいは泣き虫で　柳宏子
マンションがあたたかくなる夜の音　みつ子
マンションのベランダ短かい鯉が揺れ　はつ絵
マンションが後から建って威張ってる　白渓子
マンションの下に綺麗な喫茶店　隆　二
身辺整理してマンションにあこがれる　東　雲
マンションのドラマはドアを閉めてから　年　代
マンションの壁は冷たい音がする　重　人
マンションへ移って少し人恋し　照　子
マンションを出てからほっとする帽子　月　子
マンションに移ってからの独り言　藤　子
天　笑

マンションであなたパズルが解けますか　白兎
恐いのがマンションに居てあきらめる　小路
マンションの日暮れからすに覗かれる　度
めんどう臭いのでマンションに住んでいる　雀踊子
マンションの出刃包丁は錆びている　岳人
マンションの高さきれいな死をみつめ　雀踊子
マンションで天気予報を聞いている　作二郎

席題「缶」　**前川 千賀子 選**

缶蹴りで鬼が出て来ぬ俄雨　岳人
山小屋に缶残されて遭難のあと　池田寿美子
空き缶へメダカを入れて子は帰り　紫香
缶詰になって金魚が空を飛び　寿美
ドラム缶の風呂が天国だった頃　三男
発明展空缶見事なリサイクル　柳宏子
空缶の二つ三つは他人事　雀踊子
引出しを缶切り一つで掻きまわし　勝晴
愚痴を聞く筈でなかった缶ビール　諷云児
空缶を拾って降りる登山靴　千代三
卻するとこで二人は缶を抜き　小路
空缶に一輪さした無人駅　三男
一寸だけ残った灯油の缶が邪魔　眉水
頂上の風に捧げる缶を開け　重人
もう路地裏に缶蹴りの音は聞えない　節子
缶ビール単身赴任の誕生日　一郎
缶けりを知らぬ子供の白い靴　健司
かに缶を食べると多喜二を思い出し　隆二
空気の缶詰いつか買う日が来るだろう　楓楽
缶ジュース夫婦に話題湧いてこぬ　郁栄
空缶は蹴られ飛ぶ距離知っている　武庫坊
ドラム缶原油価格がまたゆれる　寿美
空かんに花の心を活けて見る　冬葉
円高の話は知らぬ灯油缶　金太
春の宵恋の缶詰などいかが　みつ子
缶ジュース一人の部屋を寒くする　藤子
横にしたとたん怠けるドラム缶　史好
缶を蹴る波打際はもう温い　作二郎
缶蹴って拗ねているのは男だな　年代
詰めておくささやき蒼い空缶に　寿子
缶切の刃先はいつも前を向く　狸村
あだし野の雨空缶に溜りだす　作二郎
心の廃墟へ空缶が転がる　白兎
空缶でよし野仏に花がある　杜的
空缶を並べて人嫌いになっている　水客
浮ついた話は聞かぬドラム缶　金太
吊り橋で落した缶は転ばない　狸村
無為無策カラ缶だけはよう貯る　杜的
人里が近い空缶流れてる　三男
ロボットもやがて空缶捨てるだろう　英子
やしの実を真似てみたけどビール缶　千賀子

兼題「魅力」　**津守 柳伸 選**

低音の魅力も遠い波の音　白峰
中年の魅力で鬼をたぶらかす　芳子
スピードの魅力について来る地獄　白峰
陶工の燃える瞳にある魅力　博子
あくび噛みしめ魅力ない話　小路
魅力ある教師で授業弾んでる　隆二
喉仏汗のしずくにある魅力　はつ絵
イメルダの魅力に政治ひんまがり　洋敏
年輪の魅力も捨てたものじゃない　年代
そっけない男に何故かひかれます　一郎
容貌はどうあれ若さという魅力　金太
素晴らしい魅力若さに気付いてず　柳宏子
どんくさいとこが魅力ですねん姉女房　栞
チャームポイント妻にそんなあったかな　雀踊子
高倉健の魅力くらいは持っている　雀踊子
陽が匂う魅力が匂う若い恋　萬的
極道な男で溺れさす魅力　笛生
朱を放つ花弁に棲んでいる魅力　寿子
紫の魅力に酔うて画家となる　千代三
中年の魅力は黙って耐えて居る　紀雄
毒舌が消えて魅力のない男　蕉露
レーガンの魅力に水を差す夫　冬葉
札束の魅力にきっと躓くぞ　重人
札束の魅力へ石になれますか　楓楽

近畿文字放送作品募集

題「返事」　3句
締切　**6月10日**

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
〒540　大阪市東区谷町2丁目36
大手前ウサミビル3階
近畿文字放送　川柳係

恐れ多いが菩薩の指にある魅力　寿馬
等身大の鏡に問うている魅力　智子
魅力ある顔が羅漢の中にある　隆二
モナリザの魅力は脱がぬとこにある　千代三
チャーミングに見えますよその奥様は　みつ子
みちのくの魅力いっぱい旅だより　一郎
目鼻立揃っていないのが魅力　蕉露
聖母像の影の魅力は風になる　作二郎
未知という魅力が旅の型録に　射月芳
土の香が魅力民話の里へ来る　萬的
円高の魅力に負けたパスポート　健司
初夏の風吹いてビールが魅力的　月子
さわやかな笑顔が何よりの魅力　天平
仕事着の似合う男で頼母しい　〆女
七十の魅力は煙銀になる　智子
慎しく振舞う慎しい魅力　白兎
強烈な魅力女のボディビル　柳伸

兼題「勉強」　藤村〆女選

六年間習った英語がしゃべれない　金太
学校で塾で勉強して二浪　千代三
ファミコンの勉強してるたこ焼屋　狸村
民謡の勉強余生に連れが居る　白渓子
勉強は男の勲章かも知れず　与呂志
坊さんも英語の勉強してはった　紫香
塾へ行く子に足枷の音がする　白兎
勉強が出来ても出来ぬ金儲け　岳人
勉強と躾の糸はかみあわず　三十四
なまじ勉強できて世間を甘く見る　楓楽
勉強は駄目だったよと現社長　あいき
勉強のよく出来た子で横にそれ　小路
ドイツ語は達者で漢字誤字だらけ　東雲
勉強の他はなんにも出来ない子　美代子
勉強をしてよかったと今思う　隆二
自殺記事その晩勉強口にせず　吸江
学校で習わぬことを肌で知り　柳宏子
大学で勉強漫画も読んでます　萬的
漫画読む勉強室は静かです　栞
勉強で叱り躯に気付けや　与呂志
勉強中札かけ親も入れない　新造
勉強はまあまあ気だてのやさしい子　一郎
熱心にメモ途上国視察団　笛生
勉強は嫌いでずっと皆勤賞　小路
カラオケの勉強ばかりしてる嫁　千代三
みかん箱の勉強をきく立志伝　栞
勉強は専ら落語研究会　武庫坊
東大が出世の保証まではせず　美智子
子の勉強さっぱり分らぬ親が褒め　紀雄
勉強の違いが米の穂に見られ　笛生
大学で他の勉強ばかりやり　月子
左遷とは勉強しろと言う辞令　諷云児
勉強をしている筈が部屋に居ず　白渓子
勉強して来ますと単身赴任する　水客
口開けたら勉強しろと言うパターン　天平
短大へ何をしに行く紅い爪　史好
勉強はしないが牛の世話をする　はつ絵
死ぬまでが勉強と言う父でよし　柳影
独学で博士になった人がいる　美智子

第58回　奈良県川柳大会

日　時　昭和61年6月22日（日）　11時
会　場　吉野郡下市町下市温泉あきつ荘
電話〇七四七五二―二三四〇四・二三四〇五
近鉄吉野線下市口駅下車、温泉行バス30分
奈交バス奈良―下市線終点（1時間40分）

課題と選者
白　鶴本むねお
夜明け　川端真一郎
母　村上　満子
こらえる　鳴沢　高
リズム　高橋あさ子
雲　落合惣太郎
くすり　松本　多加
釘　岩本雀踊子

席　題　一題　各題2句　締切12時半
◇欠席投句三百円（20日必着）
◇準備の都合上6月15日までに左記へ確報下さい。
連絡所　吉野郡下市町今在家
藤田起佐子まで
電話〇七四七五二―二八三二

会　費　二千五百円（入浴・昼食呈）
主　催　奈良県川柳連盟

勉強が全てじゃないという味方　博子
大学へやるとどの子も農つがず　〆女

兼題「誇り」　玉置重人選

野良犬に自由を誇る貌がある　白峰
太陽を味方に父の米作り　妻子
風雲に耐えた誇りにある孤独　白峰
道頓堀へ誇りも意地も捨てて生き　一二三
熟年の誇りを捜しあぐねてる　洋敏
プライドを捨て職安の列に居る　諷云児
誇らしげに母に手をふる一年生　藤子
健康を誇りに陽やけした夫婦　笛生
誇りだけ宙に浮いてる孤独感　蕉露
雑草の誇りを石は知っている　はつ絵
過去ばかり誇って小さく生きている　楓楽
脇役に徹して生きて来た誇り　一郎
手の平にのる誇りぐらいで生きている　冬葉
履歴書に賞罰無しと書く誇り　英子
父の遺影の胸の勲章にある誇り　柳影
無位無冠小さなプライド持っている　郁栄
花有情花の誇りを捨てかねる　水客
夫の地位が生きつづけてる未亡人　年代
玄関とトイレを妻の誇りとす　智子
誇る子もないが邪魔する子もいない　美代子
ワンマンの誇り一本の旗を振る　太茂津
まっすぐに歩んだ亡父が誇りです　金太
日本人の誇り日の丸美しい　笛生
子の親になって誇りを持ち直す　冬葉
四十年無事に勤めた誇り持つ　笛生
清貧な父に誇りのノミがある　千代三
仇討ちが出来た男にある誇り　岳人
朝夕の誇り城を拝める街に生き　太茂津
それからは誇りを持たぬねぎ坊主　月子
金で買う誇りは裏切りかも知れず　与呂志
位置も違わず僕にもあった尾骶骨　白兎
傘張っていても竹光など差さぬ　千代三
島に生まれて島の誇りをもっている　作二郎
象つかい父を誇りと思うだろ　作二郎
制服の誇りを何時か忘れかけ　水客
だればかりず古い時計が秒刻む　白兎
サヨナラはせめて誇りのあるうちに　美代子
海鳴りや海は誇りを失わず　白兎
弁当箱四つを詰めている誇り　勝美
引金をわたしがもっている誇り　栞
プライドが許さぬ辞表書いている　重人

兼題「豆」　西田 柳宏子 選

豌豆の出る頃出稼ぎ帰りだす　綾珠
二次会か蜜豆だけでよく喋り　新造
気短かなわたしに豆が拗ねている　博子
こぼれ豆野鳩の拾ういいリズム　市雄
スイートピー女の窓へ這い上り　勝美
豆好きな女と一本飲んでいる　月子
豆を煮る根気を出不精持っている　白渓子
そら豆のかたさに故郷想い出す　三十四
酎ハイと枝豆でよし誕生日　みつ子
グリンピース聞き流すこと多くなる　水客
枝豆とビールで私の夏がある　洋敏
煮豆の秘訣長距離電話で母に聞く　あいき
五色豆色あせている京土産　規不風
料亭の味より母の豆ご飯　諷云児
志納袋だけともいかず五色豆　一郎
豆撒いて春の息吹きを近く聞く　吸江
豆を煮る顔がだんだん母に似る　隆二
会者定離豆には豆の花が咲く　美智子
先祖の土守る貧しい豆の種　雀踊子
真赤な爪がえんどうを剝いている　白兎
鬼は外本気で豆を投げてはる　天平
小豆煮る匂いの中へ帰って来　水客
一人住まいに慣れて独りの豆を煮る　美智子
豆ごはん五月は母の生まれ月　作二郎
鬼の児にそっとやりたい五色豆　安藤寿美子
夢を持つお多福豆が泣いている　健司
炒り豆の小言をほうらく聞かされる　杜的
甘納豆好きな男で罪がない　眉水
わらべ歌過去を追ってるはじき豆　勝美
豆の花春はこれから暑くなる　作二郎
豆飯を始めましたと虹の街　蕉露
豆売りの老婆に鳩は近寄らぬ　千賀子
こぼれた豆が思いあまってうずくまる　白兎
結納も済んで母さん小豆選る　栞
其も焚けば七歩の詩が出来　度
野仏の前もうしろも豆が咲く　栞
不揃いが自慢わが家のえんど豆　作二郎
つっぱりかも知れぬそら豆天を向く　泰子
豆の数だけが取柄で束ね役　美代子
（清記・楓楽）　柳宏子

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・清水健司

城北川柳会　野呂　右近報

国鉄も日の丸消えて企業なみ　亀　男
散歩道すみれに春を知らされる　綾　珠
大鳴門見下ろす海は渦もなく　仙吉郎
桜咲く便り貰って窓をふく　有　佳
ボンボリも消えて桜の便り聞く　晃　世
酢の物のおいしさ楽しむ歳となり　寿美礼
日替りの気温に炬燵しまいかね　温　子
派手に使うつもりが使えぬ退職金　麻　黄
春うらら花見の席に一人欠け　芙久枝
派手な服いやみなくこなす美しさ　悦　子
五体にも春の鼓動が打ち始め　文　子
何もかも忘れて走れそれ春だ　新一郎
メルヘンの画集にうっとり歳忘れ　清　治
中国を思う黄砂の朧月　達　子
陽炎やはずむ話題に食美味し　千世子
背を向けて桜満開糸を垂れ　星　斗
紙おむつスキンシップの邪魔をする　佐津乃
日々好日子が居て孫も居て呉れる　静　子
ささやかであるが金婚祝われる　ふ　み
決断の朝妻の知恵借りて置く　山　久
孫は孫子は子一人の米を研ぐ　長
頂上は四面楚歌の風が吹く　悟　郎
何も出来ず慢然と見る万華鏡　はる子
一年生ですと周囲に気を使い　テルミ
此方にも非のあるしこり解け難し　義　男
渦潮の流れの絶えぬ世にもまれ　ただし
頂上でやっと夫婦の歩が揃い　白　峰
大喧嘩したらしこりは何処へやら　満津子
待つ人に逢うが如くに花を賞で　カ　ネ
趣味持てる幸せ思う昨日今日　八　重
時の流れの速さにつけぬマイペース　陽　子
おねだりの香を持ち帰る沈丁花　市　郎
春休み孫の帰阪を待ちかねる　トキワ
枝振りの良い梅入れて写し合う　節　子
やつ当り猫けとばして眼鏡飛ぶ　繁　子
捨てるのが勿体なくて又太り　米　子
凡人の宿命手の鳴る方へ行く　静　歩
春の日に単身赴任の人送る　倫　子
ポックリと逝って惜しまれ羨まれ　右　近

川柳はびきの　田中　隆二報

愛抱いて眩しさ増してくる女　美　子
二人きりの楽しみ食卓あたたかし　徳　子
立春をむかえて愚痴ない年にする　三千代
議論した後のコーヒー飲み残す　眉　水
コーヒーとお茶とミルクで三世代　トミ子
もの好きがいるから世の中面白い　久　治
もの好きな妻でバーゲン見逃がさず　みつる
もの好きが広くて浅い趣味を持ち　泰　子
もの好きがまた無駄なもの買ってくる　隆　二
枕木を積んで動かぬ貨車がある　美代子
底冷えに地酒も廻らぬ梅の下　司
感性が豊かでクッシャミ気にかかる　優
咳一つ嫁のいさかい食い止める　繁　男
用心をせぬとシャワーで火傷する　憲太郎
窓の梅春遠からず老いて待つ　隅谷義一
山門を閉じて読経の鐘の音　末　一
娘が嫁ぎ我が家の灯り一つ消え　清　子
風雪を刻んだ皺へ逆らえず　昇
堰越さぬ約束で逢う雪催い　寿　美
温めて結局喉を出ぬ言葉　吐　来
風邪の方で退散しそうな御体格　重　樹
針供養されたコンニャクにも読経　白　水
器量よし面影のこした老けた母　忠　宏
カプセルが五臓六腑を舐め回す　シメ子
黒門で福沢諭吉はふぐに化け　一　屯
鋸を引いているよな文字並ぶ　満洲子
先に咲く気概ぞ嬉し梅小枝　淑　子
レンタルのお雛さんまで出る時代　志　津
ひと振りの塩で酢のもの味が生き　葉　子
言いよれば素顔の時に言うことよ　順　平
税金と受験二月は嫌われる　伴　子
妻の予感主人はきっと飲んでいる　ケイ子
海荒れる予感漁師の五十年　胡　村
或る予感女の足が早くなる　比沙胡
窯は土にも味があると言う　昭　子
土を練る手の冷たさに酒を飲む　石橋義一
開発の土の匂いが漏れている　弘　子
減反に祖先の土が泣いている　隆
土は奇術師三原色の花を生む　敏

川柳サークル卯の花　辻　白渓子報

草に寝て見る空愚痴を忘れさす　勝　一
草生えて無いとを撰る試歩の杖　白渓子

草むらの外野に犬をつれて立ち　勢　鬼
草餅を持って母来る土曜の午後　多賀子
野の草も鉢植にして市民権　越　子
遊ぶことがとっても好きな春の草　正　一
草萌えて胸のキャンバス開きます　高　子
草原を馳ける時だけ妻を見る　房　子
言葉尻故郷の手形のアクセント　さと美
言葉尻空しとってもとられても　盛　雄
はた目にも破局と知れる言葉尻　良　太
一言の情がほしい言葉尻　逸
言葉尻ぷっきらぼうである温み　一　郎
頼まれて来たなとわかる言葉尻　諷云児
言葉尻あれから疎遠未だ続く　杜　的
深々と頭をさげた言葉尻　伊三郎
負け犬の胃に刺さってる言葉尻　百合子
丁寧な言葉尻からのぞく棘　志　津
言葉尻あれが本心だと思う　年　代
雑用のメモまで刑事持って行き　梅　風
普段着で来るから雑用仰付け　曲ん手
雑用は社長がしている町工場　里　子
雑用は幹事委せで始められ　白　李
忙しいのが好き雑用こしらえる　求　芽
雑用を弟子に頼んで恋と逢う　花代子
人事異動又雑用がふえて来る　〆　女
不意に来て雑用だけを置いて行く　散　歩
市場篭ついでの用が多すぎる　紫　香
雑用も気軽に受けて警備室　千枝子
これだけは言っておきたい床柱　よ志子
結局は他人が教えてくれた僕　凡九郎
人間不信こころを風が吹き抜ける　静　江
人生は五十歩百歩の繰り返し　陽露子

二枚目が美女を助ける時代劇　享　子
甘酒と酔うてる男といる因果　芳　子
手の届くところに電話があって老い　井寒作二郎
サーカスの火の輪くぐりも春になる　水　客
うつくしい旅の終りにして置こう　鬼　遊
いのち一つひらき直って生きてます

川柳泉尾　吉川　寿美報

手土産を持たず気軽に来る悪友　白　水
お気軽にお持ち下さい宗教誌　満州子
手作りのひなに添えてる桃の花　成　子
桃節句ここにも一人ひなが居り　三　世
初孫の桃の節句が高くつく　義　一
グループの標的にされた子がひとり　葉　子
グループに役者揃って輪をしめる　弘　子
グループで飛び立つ鶴の北帰行　トミ子
つっぱりのグループだった立志伝　敏
夕焼にグループ外れた鳥一羽　伴　子
立ち喰いの湯気が呼び込む駅のそば　シメ子
啓蟄をこたつで過す寒い春　シマ子
隣より小さい地図で気に入らず　昭　子
歩くってこんなに素敵病んで知る　文　子
宮殿にカレーライスの皿一つ　淑　子
あつらえたミンク気軽に着れる齢　美　子
落ちつかず茶ばかり飲んでる発表日　多和子
とっときの栓を開けさすいい話　美代子
夫より少しは上手に縄を綯う　寿　美

Y・F・C川柳会　人見　翠記報

干し物に顔を埋めた陽の匂い　モトエ
若くして名人袴よく似合う　よし津
甘酒が美味い茶店の三分咲き　たず子
菜種梅雨人恋しくて受話器取る　房　子

生きものは飼うまじ別れのあるものを　節　子
ふるさとで人の情にそっとふれ　紅　葉
瀬戸の海見おろす茶屋の梅の里　翠　記
名人が名人を知る芸のはば　泰　州
名人の苦労ばなしの京ことば　豊平次

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

新入社員迎えて会社活気付く　綾　珠
好敵手迎えて駒の音も冴え　右　近
来賓を迎える椅子は別に置く　覚然坊
にわか雨迎える傘が駅に待つ　三十四
ライバルを迎え火花の散る土俵　喜　風
雨足に迎えの母がまだ来ない　頂留子
国賓を迎える琴の音のどか　弧　舟
お言葉を返すようだと迎え撃ち　春　蘭
倦怠期迎えて末が案じられ　愛　論
桜前線迎えるニュースに顔ゆるむ　勝　美
空港の迎えの顔にほっとする　千代子
歓迎の拍手うれしい初完走　美　子
無人駅母が濡れてた迎え傘　雀踊子
目録の墨の香流れる春の闇　章　久
カセットの経が流れている彼岸　晋　吾
故郷の川も汚れてよどみ勝ち　良　京
流れ星みやげにしたい老いの視野　滋　啓
トゲのある姑の言葉は聞き流す　公　一
川底で流れる石は丸くなる　曲ん手
駒下駄でおくる女の眼が潤む　慶　三

堺川柳会（2月句会）　河内　月子報

階段の上り下りにある気兼ね　真　柳
雪が降る小便小僧春を待つ　金三郎
シベリアも堺も同じ雪がふり　邦　晴
地鎮祭御幣へ社長かしこまり　甘　平

記録だけの兎に同情してやろう　幹斉
生きてきた記録の中にある余白　素灯
また一つ罪を跨いで雪の中　笑痴
おおらかな気分持株値を上げる　一二三
気兼ねした嫁がかけてる赤電話　草春
毎日が日曜すこし気兼ねする　新造
いつまでも若い気分で赤を着る　博子
気兼ねとは反対妻はよく太り　山久
お清めの盃までは覚えてる　妻子
ジョギングの靴よ記録は忘れよう　曲ん手
雪が舞う死者に許しを乞う人に　作二郎
野仏と一緒に食べるにぎりめし　柳伸
まだ水を冷たく感じ手を清め　紫香
わんこそば記録破れぬままダウン　潔
粉雪へ椿ひとつが炎えており　いわゑ
働いて老いた手なのに気兼ねする　はつ絵
失敗の記録も薄れ日向ぼこ　紀美女
精神がギネスブックに仲間入り　東雲
神棚を清めて無理な願いごと　てるよ
病人へ気がねしながら箸すすめ　青舟
脳みそへ記録出来ない齢になり　天鳳
家計簿へ気がねしている紬織　かりん
実年の虚飾気がねは口にせず　半銭
朝がえり妻はこまめに記録する　五月
もう一つ気分がのらぬ絵具皿　あか里
はりつめた気分崩れてから涙　千万子
黙々とただもくもくと除雪する　小雪
たたかいの記録は海に沈めとく　敦子
水仙を活けて不浄を寄せつけず　月子
どか雪を潜って蟹にたどりつく　天笑

堺川柳会（3月句会）　**河内月子報**

腹の子が式を挙げてと急きたてる　秋風
飛行機にのりたくないと遺族の子　千万子
ビル崩れガレキの下の明と暗　小雪
結婚も離婚も記者がくるふたり　柳伸
あんな事なけりゃ僕が逢っていた事故さ　凡九郎
事故のあと言うことみんなくい違い　東雲
空を翔ぶ夢少年が竹削る　一二三
何削る悪魔ナイフを研いでいる　曲ん手
古墳削ると木管春を唄いだす　金三郎
子育てに骨身削った古時計　素灯
編集会議で削られた赤い死語　浩一郎
白と黒法で引き割く怖い国　田斉
結婚の二文字にあった落し穴　てる代
青春長し結婚ばなし風化する　博子
神様に忘れられたかまだひとり　五月
ケラケラと結婚ばなし蹴る女　克子
結婚がきまり街にも光る風　紀美女
花嫁も会員券を買わされる　邦晴
結婚式あげず仲良い夫婦駒　柳右子
怪我しなや母はいつでも祈ってる　半銭
まだつきは落ちていないぞ軽い怪我　新造
時効にはなったが時々痛む怪我　あか里
指先の怪我で自由を奪われる　かりん
妻に逆らってつまらぬ怪我をする　幸子
家の中で転んで怪我したとも言えず　柳宏子
春の怪我空の青さに救われる　夢成
放っといてくれれば治る怪我なのに　天笑
玄関に入ればどっと出る疲れ　山久
セールスの舌玄関をこじ開ける　甘平
ドアチェーン夫も一度疑われ　鬼遊
玄関とトイレに妻の顔がある　元紀

玄関の靴はいじめに耐えている　作二郎
玄関で帰す客には茶も出さず　月子
玄関を出てから強い男たち　妻子

翠洋会　**中西兼治郎報**

おおきにと笑顔さわやか京美人　萬里
橋三つ過ぎて結論出た日暮れ　さと美
降りかかる花の吹雪は憎うなし　美津枝
大根のふた葉がわれて絹の雨　文子
心斎橋こんな齢になりました　君子
下見れば橋と流れて行きそうな　春子
虹の橋甘い生活がつづかない　宏子
再会の橋にネオンの水がゆれ　照子
八百八橋陸橋いくつ出来たやら　綾子
渡らねばならない橋が近くなる　みつ子
目立たない子にも意地ある亀の足　光子
太鼓橋老人の足思案する　兼治郎
おおきには心の中で妻に言う　東雲
おおきにとあまい言葉の京の宿　登志実
力にはなれず橋まで送るだけ　いつを
川のない橋で利口なことを言う　鬼遊

駒つなぎ川柳会　**小路報**

飛行機へ爆弾抱いて乗る思い　凡子
燃える血を押え切れずに旗を振り　勝美
シャボン玉割れて女の吐息きく　寿美
殺される夢からさめて息をつぎ　幸治
松風の響き故里あたたかし　真砂
トレードへ初心に帰っている気概　山久
大陸に雑兵熱血置いてきた　潔
上り階段一息ついている齢　弘生
交換の使節来ました動物園　美津枝
熱血漢眉目に今も残る意気　柳影

人工の呼吸で息を吹き返し　新造
条件が良すぎてしぶる交換日　柳右子
熱血漢やそうなと聞いてますけれど　凡九郎
人生の坂の途中で息を入れ　博子
反響が確かにあった変化球　重人
残り火をやさしい人と交換す　美代
心配のタネを抱いてる冬の風　恒明
熱血をディスコのジャズで物足らず　重夫
一と息のリハビリに汗ふいてやり　頂留子
杭打ちの響きに明日の詩がある　甘平
交換のきかない妻の肩をもむ　金太
息をのむ一瞬シャトルは宙に散り　克己
やりくりの妻がラッパを響かせる　射月芳
物物交換そんな時代を生きた知恵　文秋
埋火を抱いて女は風になる　雀踊子
郷土民芸へ熱血漢の墓がある　萬的
レントゲン不安の混る息をつめ　柳宏子
美しく響く言葉の裏を読む　国公
交換のドル懐にパスポート　善信
夢に見た母と抱き合う孤児の春　壮之助
父さんが息をついてる油切れ　東雲
子の胸に響かぬ太鼓打ちつづけ　隆二
ドル交換まだ見ぬ国が見えてくる　笛生
死角から見れば熱血覚めてくる　冬葉
内弟子の叩けば響くものをもち　曲ん手
条件の悪い交換のまされる　庸佑
熱い血を裏にひそめて花時計　素灯
保育器で必死に生きる小さい息　浩一郎
ちり紙交換路地の奥までマイク行く　春蘭
北風を歩く木馬が冬を抱く　信治
妥協して噴く熱血をもて余す　美幸

ずばり言わないと響かぬ人らしい　天笑
新札にかえて祝いのつづく春　花仔
春寒をしかと花芽を抱くさくら　邦晴
水中花少女の恋が響かない　悦郎
へそくりを見つけて抱く不信感　好子
昼下り夫婦ひとり息入れている　月子
海鳴りが響き長寿日本一眠る　史好
チョコレート貰い昏さし上げる　千代三
証人はない熱血の灯を信じ　柳伸
溜息がとなりにも居る発表日　小路

川柳ねやがわ　高田博泉報

マラソンの孤独にたえた師弟愛　千代子
期待するレール子供に重たすぎ　山久
書きなおしの値札に胸を躍らせる　春子
年金の仕組み分らず貰ってる　こう礼
満員の言葉を死語に廃止線　創吾
川柳か俳句か出来た後のこと　一菁
日章旗胸躍らせた日が懐しい　杜的
栄転の辞令が期待をつれて来る　白渓子
大津絵に心も和む蕎麦の店　勝美
満員にさせた一人の負け知らず　曲ん手
満員のむこうにいつも君はいる　博紀
満員へ好取組が誘い出す　まさ乃
娘の家私の箸箱おいてある　とし
驚いた妻が朝からおじぎする　波留吉
雪国の春に躍った紅の色　静江
高齢化ハレーすい星二度も見る　天山
おごりたい寿司屋あいにく席がない　敏夫
ランドセル期待が詰めてある四月　章
期待はずれの映画の看板ふり返る　君子
満員車スリも刑事も乗ってます　あやめ
満員の寿司屋で安心して食べる　かすみ
ご期待に添えぬと辛い返事書く　藍子
驚いた鴨に去年の池がない　淳朗
躍るだけ躍って安楽死とは愉快　明代
満員の昔知ってる無人駅　光子
静かな夜驚くほどの雪積る　新泉
驚いてくれぬ男が憎らしい　まさお
満員のベッド悲しく一つ空き　速水
驚いてばかりはおれぬ責任者　一笑
満員は駄目と頑固なエレベーター　頂留子
躍進する街に逆らう葱坊主　シマ子
驚いた顔が雲行きじっと見る　一途
期待した味方が振っている反旗　晴風
合格へ小躍り出来ぬ金の嵩　博泉

佳句地10選（前月号から）

川上渓水選

子はすでに自分の城をもつ机　蘭幸
音痴にも思い出があり好きな歌　一郎
両眼で見るから欲が深くなる　功
疑いを晴らす長い長い坂　道子
ひとりになると金を数えている女　三男
倖せを盛るのは小さい皿でよい　米朝
肩の荷を下ろして帰る救急車　歌子
痛いとこつかれて苦手な人になる　ふみ
取り越しの苦労を笑う心電図　三千子
美人薄命お前丈夫でよかったなあ　章久

鯉のぼりそんなに期待されたって　英千子
天神さんせっしょうでっせ三浪の春　冬葉
驚きがあるうち君にも進歩ある　凡九郎
あの人の視野にいるとは知らなんだ　吉之助
一区間体よじれたまま通過　右近礫
驚いても軽い答えはせぬように　敬山
満員に詰め込み値上げする私鉄　眉水
春日遅々私の恋もまた遅々と　鼓城
舞妓はんきれいに驚きを見せる　小路
電卓をたたいて愛のない男　柳宏子
解禁へ心躍らせてる天狗　紫香
期待した蟹が出て来ぬ雪の宿　薫風
八十になったら恋をしてみよう

菜の花句会　高杉　鬼遊報

大切な五臓さからう深い酒　喜風
失策を詫びても損失戻らない　綾珠
内祝い心が揃う手が揃う　曲ん手
大切にしなはれ春がやってくる　枯楢
燃えている私ひとりが道化師で　雀踊子
負けたナと思う先に謝られ　武雄
大切なお金うちには少なすぎ　シマ子
入学へ近道はないサクラ散る　健司
大切にされて淋しいへそ曲り　勝美
花揃う遠い魂よみがえる　美幸
大切な話になるとどもる癖　三男
燃えあがる噂の中にたつ孤独　春蘭
大切な人ですどうぞとらないで　蕉露
顔ぶれが揃うと酒が出るらしい　冬葉
米粒を大切にして世に媚びず　射月芳
一と荒れは承知の上で詫びにゆく　悦郎
大切にしますと貰うまでは言う　柳宏子

あの人の外は全員揃てます　凡九郎
入学へ風と光が満ちてくる　鬼遊
折れてくる頃を一升買って待つ　柳伸
一滴の水大切に島を出す　栞
大切にされると自由ほしくなり　頂留子
阿呆ばかり揃うているとアホが言う　幸生
大学を出て他人の後からついてゆく　弥生

西宮北口川柳会　奥田みつ子報

鴨居の槍が家に正座をさせている　武庫坊
中心に置くまごころを磨いている　年代
遺言がきれいに書ける事務机　園歩
中心を退いて老化へ急テンポ　(伊)春子
どん底で疲れを見せぬ妻がいた　いわゑ
仏間の灯わが家ここから朝が明け　光代
総領が好きな文士の名で生まれ　陽露子
トロ箱に花を咲かせて裏通り　芳子
これからも夫唱婦随で喜寿の坂　諷云児
春の窓机の位置を変えてみる　かすみ
ねぎらいの言葉で疲れへ酒を注ぐ　白渓子
花吹雪春の未練をふり払い　勝紀
古都税も中途半端で花疲れ　和友
傷を負うたんびに骨が太くなる　廉
裸婦像の前で溜め息せぬように　郁栄
紙風船寂しさだけをふくらます　美智子
かごめかごめその中心に孫がいる　杜的
中心は矢張り射程距離だった　柳影
ビタミン剤疲れた主人の膳に添え　好江
子の机片づけさせるためにある　貴代子
中心が狂うておった竹トンボ　しげお
桜咲くとても恋人ほしくなる　静子
春を摘む手のあかぎれは消えている　保蔵

花冷えに心通わぬ人と居る　隆子
君中心に地球は回ってないんだよ　正坊
中心を釘づけにする陽があたる　嘉矩
ばあちゃんの疲れ残して孫は去に　みち子
一生に一度出る星二度も見る　紀雄
訃報読む机に月が明るすぎ　礼子
子には子の未来が貼ってある机　幽香
呼んでいるママへブランコ振って見せ　〆女
少しずつ中心ずれた失意の日　照子
先生の机を開けて見たくなる　寿馬
草に寝て土の温みに触れている　はつ絵
文豪の机もあって明治村　一郎
あっさりと昭和のノラが家を出る　水声
机たたく男は哀しい痩せ蛙　眉水
この家の時計はいつも遅れてる　鬼遊
花の彩移ろう胸の灯を点す　太茂津
女ひとり忍び返しの家に住む　幸
女神にも見放されている女　明代
白髪がお似合いですとはこそばゆし　鼓城
修羅の家わたしの箸が置いてある　美幸
停年へ机よ喋らなくて良い　凡九郎
我が机上みだるるままに春の風邪　春蘭
少年の机宇宙と向かい合う　みつ子
真ん中の花が机をかなしませ　弘生
叩かれた机が話こじらせる　千秀
中心のポストで本音がしゃべれない　俊子
春うらら子を中心に踊らされ　博子
中心が七八人も居て困り　百合子
春霞軽いめまいで花の下　よ志子
中心を少しずらして丸く生き　善太郎
飽食の女は与作に恋をする　枯楢

趣味一つふえて机が狭くなり　(結)君子
迷宮から中心人物出てこない　(栗)春子
喪が明けて少し派手めの紅をひく　新造
中心に梶取る父が居る安堵　右近
背のびしてどれだけ視野が広くなる　志津
核心にふれると傷が痛み出し　米朝
空席の机へひそかな闘志もえ　山久
刑務所の窓から見える花吹雪　良征
亡母の部屋文机の位置もそのままに　春江
生真面目の机で縁談遠くいる　冬子
何時の間にか幸せ芝居身について　てる
矢印も酔うているなと花見客　美津枝
壇上の机夜中に背伸びする　伊三郎
ストレスで引出し開かぬ事務机　千世子
春一番乙女椿を散らし過ぐ　幸子
もの言わぬ父の机に叱られる　文平
クラス会中心になる口達者　一進
感性を機械が磨滅する怖さ　よし津
ふりむくと峠は村を小さくする　紫香

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

山みどり誘われてつい今日も出る　洋子
悲しみの時はデッサンみどり色　美祢子
はっきりと見えぬすい星追うロマン　富子
ほうき星見たは故郷の遠い空　登志実
四つ橋で見たすい星と十字星　明吉
すい星の謎少しずつ解けていく　英子
メーデーがすんで紙屑舞うばかり　寿美子
お遍路の前に後ろに蝶の舞う　隆
舞い終りホッと一息喜寿の顔　房子
舞扇覚えのわるい娘が一人　福一
蛾が一つ裸電球に舞う夕　花村
パソコンのブームになって子は無口　慶子
ワンテンポ遅れてブーム追いかける　よし子
駄菓子買うようにカードが満ち溢れ　明つえ子
花見酒なくても楽しい梅見かな　典子
太い足しっかりしてよいとほめ　満女
また春が遍路姿に亡母のこと　正坊
忍の字を胸に刻んで二度の職　春子
庭の花剪れず花屋へ買いに行く　作二郎
春の虹母はいつもの岸に佇つ　〆女
夫を待ち子を待ち母の日が暮れる　勝
落花舞う訣れは早い方がよい　静

三幸川柳教室　桜井千秀報

入学金アップで細る親の脛　定子
弟は合格兄はまだ予備校　可笑
入学式先生あだ名でもう呼ばれ　由梨
村あげて祝う入学生ひとり　保
疑問符を黒いしじまに投げてみる　あかね
脚光を浴びては黒衣で生きられぬ　百合子
うれしい日黒枠の子も笑いかけ　千秀
泣き言に兎に角弱い母の耳　靖子
耳よりな話が待てよ四月馬鹿　静
パンの耳捨てて小さな罪ひとつ　文子
艶ばなし耳傾けることもなく　周三
水割りに三半器も負けてゆく　桂香
手弁当妻の心もつめてある　幸子
濡れ衣を心外ながら目をつぶる　つゆ子
水心あっても魚は澄まし顔　忠昭
真っ白な蓮に邪心を諭される　愛子
おじいちゃん好きよと小さな下ごころ　智水庵

川柳後楽　井上柳五郎報

日本列島くまなく泳ぐ鯉のぼり　哲郎
幸せは手塩にかけた子が呉れる　桃風
温度計大きく背伸びしていいぞ　拓治
酒飲みの来客へ妻の渋い顔　番茶
氷山の一角ですよ撚糸連　進

第10回 全日本川柳大会

日時 **昭和61年6月8日**(日)午前10時開場
場所 大分県別府市南立石二一四一―七 鶴見園グランドホテル
宿題 第一部（事前投句5月10日締切）
島　藤原時化緒　選
勝つ　仲川たけし　選
開く　内藤　凡柳　選
第二部（当日出句・締切12時）
茂る　野村太茂津　選
生きる　黒田　高司　選
箸　斉藤　大雄　選
道　池田　可宵　選
各部各題共二句、未発表作品に限る
当日出席者の会費二、五〇〇円（昼食、記念品代共）
表彰 文部大臣奨励賞、川柳大賞は大会賞
受賞作品の中より後日、日川協理事全員の選考により決定される。

今度来るハレーに地球は青いかな　草風
立読みの粘りへハタキが邪魔に来る　鮫虎狼
男を負かす四十女の粘り腰　恒洋
かたくなに粘り太鼓の数え唄　照路
憂鬱に座れば窓の風粘る　たけ志
トラキチの夢載せ予告ホームラン　敬三
寿命予告家族に冷たい医師の声　佐加恵
近寄るなパンチパーマが予告する　護
停電の予告をまわす洗濯機　中建
予告とは反対三人目も女　博友
意気悪な姑予告なしに来る　美智子
焼け石に水とわかってつき放す　吟平
つき放した子が帰らないのであわて　葵丘
泥舟に邪心を乗せて突き放す　進平
巧言令水骨抜きされてつき放し　柳五郎
野仏につき放されそうで掌を合わせ　健一

川柳たけはら　森井　菁居報

ランドセルせおってはやくいきたいよ　六歳昌之
おひなさん三日すぎてもかざってる　小二晶美
じぶんにもおやすみ言ってねようかな　小二晴美
学校が近くで物をよく忘れ　小五純平
夕焼けの空には夢がつまってる　小六美保
春間近ひばりの鳴き声聞こえそう　小四方昭
学期末心休める暇もなし　中二仁昭
一人だけ留守番淋しい冬の夜　中二恵子
げんかんの生花はもう春の色　小六亜貴子
なつやすみになったらプールにいこう　小一裕次郎
階だんを上り下りする三、四年　小三由博
ガンバルぞ何でもやれば出来るんだ　中一早代
自殺してもいじめっ子には通じない　高二真弓
石丸く削って積んでいる年功　蓬春

染め替えが出来ない旗を一つ持つ　菁居
川柳道捲まず弛まず卒寿の歩　シゲヨ
無事らしいあかしに賀状が戻らない　有情
火葬場の灰に名誉も地位もなし　不動
隙間風心のぞいて通り過ぎ　博子
艶やかにお酌して欲し妻の酌　康子
孵化をしたひよこが大地踏む四月　臣子
政治家の虚飾をそっとめくる風　のばら
スケジュール詰って嬉しい春ごよみ　貞子
他人ごとと言えぬいじめの記事やたら　浄美
同情はしてもなんにもしてやれず　酉合
退職をした物指しは小さくなる　笑俳
一国の城主も遂にぼけ給う　春恵
走馬灯子の旅立ちを泣くまいぞ　淑子
天涯孤独片目ダルマはもう泣かぬ　笑子
忙中閑おんな女を自覚する　令子
申告をすませてほんとの春がくる　比呂子
遠まわりして春の鼓動を聞いてくる　太虚
足元に春が来ていた小さな芽　一路
忙しくしている古希のしあわせな　蘭幸
ときめきの指先新刊書をめくる　操子
妻は無口で鏡の中へ春を描く　鬼焼
フィリッピンの政変劇はおとぎめき　白狐
ふくらんだつぼみが嬉しい散歩道　年子
チャンチャンコ着せてもらった古希や古希　静水
孫の絵を壁に話題の夫婦きり　澄江
本音はパッと咲きたい蕗の薹　勲
任せたら何も言うまい家の事　トミコ
バレンタイン女心をそそのかす　寿満子

富柳会　藤田　泰子報

ものたらぬ味が血圧守る齢　荘次

かば焼きの匂いで狂う腹時計　文次
昨日の時計に寒い涙を埋めてある　森子
時計見て悪魔に逢える街を行く　文子
味のある人と言われてからの嘘　冨美子
共稼ぎインスタントの味になれ　今日子
亡き父のぬくもりを知る古時計　千代女
空白のページは祈る事ばかり　美代
時刻む針に傷みが癒えてくる　花梢
老いの日は散る花びらを数えてる　伊庭勇
味見して買わないでおく年となり　美緒
夫唱婦随あなた好みの味になり　柳太
花びらを集め小犬の墓に着せ　岳人
花時計生年月日をもう忘れ　トシエ
眠られぬ夜は時計を友とする　泰子
惜しまれて散る花びらの紅きこと　きぬ
日々にうす味にして姑達者　弘生
別居して新婦の味に馴らされる　優
十字切る胸の痛みが詩になる　章久
飯茶碗時計の針を待っている　富久一
人間味ある師の厳しさだから耐え　静枝
山登り昼も近づく腹時計　義雄
大時計二人の絆知っている　

川柳塔まつえ四月例会　恒松　叮紅報

いつまでもまめな絶頂保ちたし　静翁
しあわせの絶頂に咲くさくら花　満江
絶頂の幸せ飽食使い捨て　ノブ
絶頂の足もと掬う山の風　寿美子
絶頂を弁えている年の功　妻子
絶頂の企業に円高平手打ち　翠星
足元の小石気づかぬ絶頂感　由郎
絶頂へ登ると欲がまた生まれ　正朗

絶頂の男を狙う紙つぶて　昭二
只今絶頂バラ色の地図開く　鶴丸
絶頂へ着いた途端に苦を忘れ　静江
脱サラで土の匂いを受け止める　与根一
草萌ゆる匂いふりまく春の精　秀子
悲しみの懺悔が匂う曼珠沙華　瑞枝
山椒の匂いを摘んで春を盛り　三男
沈丁花匂う家です電話口　雪美
垣根越し匂いに沿うて歩を運ぶ　友子
匂いひとついまだ消せない罪もある　きみえ
久方の花との対話春匂う　孝華
酒匂う頃が一番いい良人　育子
樟脳の移り香匂う衣替え　多賀子
信ずれば極楽からも匂う風　雄々
幸せがカメラに匂う初節句　吾作
安堵した証拠に欠伸続けざま　緑之助
妻がいる安堵少々過ぎた酒　ちかし
夕食に顔が揃ってホッとする　愚童
定年の朝庭へ出て深呼吸　みえ
会話ふと途切れて匂う沈丁花　代仕男
一通話母の安堵が返ってくる　鳳人
安堵した途端小石にけつまずき　芳子
ひと安堵手枕にする花疲れ　長三
キリストを通してささやかなる安堵　孤呂二
坐すべき者が坐して安堵の床柱　貢範
片々の靴が帰った花見酒　壮樹
花見酒幹事の予算ほど減らず　舞吉
花見酒おんなを一人騙し討つ　紫吻
街角で思いもよらぬ妻に会い　巡歩
下町の角は昔のたたずまい　町紅

京都塔の会　松川　杜的報

嘘ばかり言って都会の隅に生き　紫香
手術した片目へ看護婦やさしくて　白季
背を丸めてる特旅に誘われる　和友
香典を呉れそな人から先に死に　花村
北山の雪だんだらに光り失せ　求芽
バラ園のバラみんな美人の名がついて　杜的
雪しきり今橋立を神歩む　武庫坊
駅前の花屋で春の支度など　年代
ふらんすパンを一本買いにゆく孤独　幸
小さい義理積もり春の陽待ちわびる　花代子
鼻息がのびた鼻毛を遊ばせる　冬子
鼻息を伺って居る児の無心　敏正
亡き妻の傘開かせる春の雨　諷云児
春雨に濡れて無粋な風邪をひき　白渓子
春雨に誘われ木々の芽唄い出す　栄
野仏を洗い清めて春の雨　明代
春雨へ絵になる遍路笠が行く　飛鳥
あだし野に仏を濡らす春の雨　達子
春の雨花の鼓動が遠くなる　〆女
キャリアが違うとカップはいっている　陽露子
艶っぽいキャリアの匂う白い衿　英子
ロボットに先を越されているキャリア　芳子
キャリアかな作り笑いも板に付く　水客
ボーとしている様で隙のないキャリア　鼓城

川柳大阪　塩満　敏報

水槽の金魚の泡は意見かも　比呂志
松明をかざし春よぶお水取り　しげお
雑草が一番先に春を告げ　与呂志
げんごろう浮いて川面に春の風　司
春風も知らず地下鉄レール延び　喜酔
もう鳩は出ない帽子で子を頼り　希久志

窓開けて人間くさい風と逢う　笑風
改札を出てさて今日はどこへ行こ　洛酔
地下鉄の春はコートを捨てている　重人
寝たきりの窓を開けさす春の風　本蔭棒
ふる里の話が好きなれんげ草　金太
反対の意見が言いたい喉ぼとけ　虎酔吟
居酒屋で道草喰って父帰る　鉄心
良い意見なぜか通らぬ多数決　柳弘
草の根も分けてと願い孤児帰国　酔舟
不器用な男で努力惜しまない　一介
奈良の旅若草辺りで昼にする　雅巣
御立派な意見トニカク承る　凡九郎
たくましく生きる力が草にある　天平
意見する妻を横目に酒を呑む　みつる
天才も見えぬところで努力する　辰男
生きている証拠に悩み持っている　河南子
古文書で宝探しも乙なもの　喜楽
お別れの文書が書ける定年期　凡智
昔より文書でのこすかたり草　三千雄
取り交わす文書一枚一大事　小藪
古文書の値打ちを知らず売り渡し　英泉
筆不精文書ひとつで紙の山　小柳
作文を書いて満点母笑顔　哲流
草の根の力をやはり信じたい　敏

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

合格の祝い学用品そろえ　小生
合格を息せき告げる子が戻り　寿満湖
老人が跳んでヤングが肝冷やす　英治
記念碑は師の面影をはなさない　とめ子
退職の記念に目ざまし時計とは　律子
結婚の記念の桜満開だ　碧水

合格を夜間通話で掛けてくる　満春
跳んでみる心の中の水たまり　秋草
塩壺を満たし跳べない女です　松女
さくら満開わたしは生きた桜です　寿朗
敵がいないから跳んでみるはねてみる　柳風
焚火跳ばして喜ぶ風のジェラシーよ　あや子
合格へもつれ糸まで解けてくる　雄々
ハワイからマルコス次は何処へ跳ぶ　かつみ
毛糸玉ころころ記念日が近い　瑞枝
跳び上がってる瞬間だけは鳥になる　完司
記念碑の筆の温みに逢いにゆく　ゆり子
跳ぶことを忘れひたすら万歩計　秋人
父さんの夜桜パチンコ屋でひらく　とみお
白鳥と同じ助走をするアヒル　観洋
合格にいつも一点足りません　あきら
二科展とさくらの花に酔いしれる　文子
子ばなれの記念ふたりで木を植える　やえ
さくら散る下で出刃包丁を研ぐ　石花菜
合格にポチの小屋にも鯛の骨　御前
記念樹も塔の高さを越して朝　荒介
君が代が顔出したがる記念式　独歩
跳び上ってさくらひとはな失敬する　菩句

サークル樺樅　田形　美緒報

赤い糸絡むと謎が解けにくい　泰子
偽りの華美なリボンに騙される　智恵子
リボン解くやさしい手から過去が消え　三四子
七五三頭上でリボン踊ってる　千代女
予算から出たがきれいなリボン買う　今日子
絹リボン春に結べば初蝶に　美緒
華やかなリボンほどには中身なく　雅子
思い出のリボンで日記帖飾る　美房
水色のリボンが呼んでる夏帽子　美代
熟年で飾るリボンの色を選る　花楢
リボン結んで一計をひそませる　薫風

川柳わかやま　堀端　三男報

低く飛ぶ雀貧しい街が好き　狂虎
群雀来ると案山子の眼が動く　幸
何時も来る雀で僕に会釈する　三男
愛に飢え庭の雀を妬いている　英子
舌切りのはなし雀も忘れ　凡九郎
玉手箱ふれば童話の音がする　信秋
玉手箱でないから安心して開ける　富代
思い出をつめた小箱が胸にある　裕美
睦言が残ってそうな箱枕　紫香
錆び出した律義な亡父の道具箱　紀美女
マッチ箱だからでっかい夢を持つ　紀久子
青春の日を閉じ込めて箱眠る　光代
この箱に入れば何もかも終る　芳朗
蓋とればきっとあなたが消える箱　康勝
玉手箱開けるとポケるかも知れず　守夫
花束のやさしい嘘が見抜けない　桂香
花束の赤に妬心がひそといる　柳宏子
花束を何処に飾ればいいですか　隆積
うつくしい別れにしたい花束よ　雀踊子
花束を受ける仮面が重くなる　忠雄
花束の主役になれぬカスミ草　雅子
姑となる花束受ける日の決意　登志代
束の間の匂い花束から貰う　正博
赤いほっぺが花束くれるれんげ畠　太茂津
生きる事に疲れ花束買いました　輝子
裏方への花束ならば惜しむまい　きみ
哀しみを磨くと夕陽の海になる　萬的
磨かれた味そこはかと匂う女　忠
先生が転ぶ廊下を磨き抜く　豊太
バイブルに磨き抜かれている微笑　白光子
格子戸を器用に磨く京訛り　武雄
光ってはいるがちびてる父の靴　照子
靴みがきすぎて夫が駄目になる　郁栄
磨かれた廊下で本音は吐けないぞ　克子
むきになって磨くと底がひび割れる　正子
ピカピカの鍋に夫への愛がある　公子

川柳塔きゃら木　石垣　花子報

九までのテンポ崩さず鬼ごっこ　夕子
九ちゃんの星かもしれぬ上をむく　富美子
第九に注いだ熱が輪をひろげ　とも子
雪の森よ九十一の亡父いずこ　千春
九十の年の数には勝てませぬ　朗子
九十でもう菊の花そむかない　晶子
血縁の絆へ九死のり越える　みど里
白寿まだ種を播く日の暦くり　花子
九分九厘保障されたが落着かぬ　玲子
九人目の敵が夜空を制覇する　伊都
低血の耳に非情な九時のベル　文世
未知数の最後の九に夢がある　瑞枝
九分九厘友でなかった石を蹴る　高代
九回の裏で歴史は作られる　あい子
移り気な種を九つ植えました　てい子
九十九里智恵子の千鳥まだ遊ぶ　朗子
九人目はしぼんだマリで気が通う　晶子
九歳の歌う演歌が花散らす　みど里
五十から九回裏に立ちつづけ　花子
親指の疵を九本してかばう　玲子
不器用な指先釘がよく拗ねる　伊都

川柳ひらい　行吉　照路報

北の海流人の塚は陽に染まる　敏和
逝った子が帰って来そうで灯をともす　方巳
耳よりの話は無いかと友たずね　美代志
耳よりな話明日より今日がよい　かずを
病室に春めぐり来て姦しい　栄翁
遍路宿互いに肩をたたき合い　柏峯
天守閣ネオンに映えて浮きあがり　アヒル
反逆の雲はたしかに北へ飛ぶ　博
闘病の心に電気灯す医師　せつ子
耳よりな話に不況の矢があたり　孝子
しらがみがこんなに絡むうすい肩　愛子
湯の宿で余寒そこのけおらが春　ともゑ
目的を下げても一度挑戦す　裕子
それぞれの暮しに今日の灯が消える　年子
北の春出かせぎ父さん帰る頃　トモ子
北方領土温い母国へ還り待つ　良一
電気よしストーブよしと鍵をかけ　志津子
耳よりな話に動く浮気虫　千恵子
前もってお耳に入れておきましょう　寿子
耳栓をしっかり生きてく老いの知恵　美佐保
カロリーはどうあれ鍋が煮えたぎり　典子
小賢しい女がぬいたコンセント　愛
蛍光灯と言われるパパは頑張り屋　やすえ
わが敵はおれだぞ正座崩さない　胤親
赤電話消した電気を確かめに　幸江
福耳をもって流転の赤い髪　柳五郎
北国の話を添えて置き薬　博友
静電気蓄めて次第に唖になる　草風
停電へやれろうそくの有難や　真備雄
おとぼけの耳は確かに批判聞く　照路

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

ピクニック日の丸弁当母の味　翠星
図太さで玉虫見せるソの手際　秀穂
つぼみから開花するまで写すバラ　三和
梅一本植え新築の庭になり　聖子
交差点園児の方がよく守り　世似
梅一輪雪の谷間に日が昇る　ヒデ子
窓越しの梅にここといい日和　かつ子
ろう梅が故人の愛でしままに生き　英子
人情の匂う風です露地の梅　民子
叱られていながら尾を振る図太さも　智重子
交差点左に曲った不幸せ　笑子
図太さが哀れに見えるブルドッグ　鈴江
梅干しの味三世へつづく味　清泉
交叉点髭を剃ってる奴がいる　はるみ
梅一本咲かせ豊かなうさぎ小屋　歳栄
青梅を月の世界へ干しにいく　恵美子
図太さで地獄のめしも喰ってきた　も白汀

岸和田川柳会　植山　武助報

暇の無い事を自慢にする男　狸村
沈丁花隣と垣根和やかに　寿美子
沈丁花かくれ咲いてもすぐわかり　楽天
軽装の悔いはザイルへ猛吹雪　ゆづる
お隣の方言を聞く日曜日　けい子
隣から届く土産を小さい使者　浪速子
事あれば心が通う隣組　ひで
先生の隣は小さい僕の席　こう
教育ママすぐに比べる隣の子　甘平
お隣を親類よりも頼る母　希久志
孫が来て借りた隣の乳母車　一弥
先生の隣の席は空いている　武助

お隣の意地へ張り合う馬鹿な意地　春栄
隣から聞いたとうれしいきき合せ　幸代
お隣も鍋物らしい換気扇　さよ子
身の上へ隣同士の気を許し　白光子
足音もなく秋が来る孫が嫁く　操子

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

反目に消されしこりの叛旗揚げ　朴竜
重箱がアングラ劇を評価する　多駄子
連休も亦煩わし一人居る　虹汀
生と死の背中合せのオペに賭け　旭恒
朝風呂のあとで刺身で夢が切れ　四郎
手加減をしない男と酒を酌み　高明
散り際を忘れて艶を競い合い　あき
花見客カラオケ自慢の喉競う　今子
それからは二人で渡る恐い橋　邦子
大還暦辞書に残して翁逝く　久仁於
フェンスの向うも躾に悩む声　正敏

熊本川柳会　有働　芳仙報

人間の抜け殻となる日向ぼこ　伊佐美
肉親のかけらを探す愛の飢え　方円
万一の保険へ打算先走り　昭代
反対する母の小さな背に負ける　俊子
てっぺんに着いて尺取虫迷い　宵草
フルサイズもう体形も気にならず　幸子
三浪で打止めにする神頼み　一進
一掬の名水遠い旅の果て　緑
やどかりのまだ決まらない貝探し　芳仙

川柳藤井寺　赤木　和子報

悩みごと捨てに行きたい地平線　須美
地平線の向うに核のある怖さ　つや
勝ち負けがゼニにつながるから悲し　与呂志

積もる気で降ってはおらず春の雪　治子
耳の痛い話になって酔いが醒め　吸江
ゲラゲラと嗤う女の手も笑う　美代子
酔い醒めて隣の人に謝りに　三郎
サッチャー　アキノ　女益々強くなり　志洋
地平線越えたら地球から落ちる　美房
ナツメロの歌手にもあったデビュー時　重樹
居眠っていても油断のならぬ耳　本蔭棒
卒業入学祖父の財布は開いたまま　伴子
花を呼ぶ雲わき上る地平線　義一
地平線地面と空のランデブー　哲正
国会もいじめられたりいじめたり　なかし
咳一つにも気がかりな受験前　正人
思い出の違いを語り合える仲　秋園
二人では七段飾りも広すぎる　ふみ
春一番こたつもテレビも飽きてます　美佐
税務署も今日から笑顔で受付ける　祐二
千年の眠り目覚めて馬具光る　うめ
野道から春の香りをおすそ分け　昭子
こっそりと孫のパソコン触れてみる　繁男
梅一輪咲いて茶の間に春の風　末一
うなずいてくれたが貸そうとは言わず　みのる
弁当のちくわがでんと場所を取り　麻雄
空の青一線画す地平線　和美
地平線とどかぬまでも望郷歌　雅美
帝陵はいまときめきのコンサート　彩
地平線陽炎ゆらぎ春うらら　作秀
花よりも開門急ぐ京の寺　清心
石積んで崩して今日の飯を食う　和子

尼崎いくしま川柳会　角野かず子報

木の芽立ち胸に思いが溜り出す　年代
おしゃべりな鳥だが嘘はついてない　紫香
幸せの尺度を確かめ合うて酒　定人
疲労感ばかりの席に居る　歌子
留守番を頼んだ人に街で逢う　幸子
青い地球のどこか火を噴く国がある　静夢
双方の嘘で会議がうまく済む　かず子
世話やきの爪がむいてる夏みかん　礼子
男の旅がはじまる爪切りましたか　牧郎
譲られて素直に席の礼を言う　保蔵
疑えば妻も他人の顔に見え　水声
余寒なお春の序曲を聞く花芽　春子
腹黒い男で爪を切っている　山久
母を看て老いのプロセス右隣　美代子
九十の老父が聴いてるモーツアルト　佳秋
修羅の灯に作り笑いの嘘を言う　かすみ
春招く炎に運がつきはじめ　郁栄
枯れてきて風格よりも呆けが出る　良征
ひと言が駄目な男にされている　幸次郎
父の背に疲れましたと書いてある　一郎
思春期の少女に芽吹く小さい恋　かね子
芽の出ない男にコーヒーいれている　君子
支度したみやげが重い里帰り　サトエ
余生にも火種少しは持っている　みち子
爪を噛む癖が孤独な夜にする　玉子
やがて咲く花を信じて芽をかばい　貞子
残雪の山の景色に見入る春　すえ
バス旅行帰りはイビキ大合唱　ときお
疲れたら父の林へ来て眠る　はつ絵
陽はさんさん青い乳房に芽吹くもの　正一
猫柳活けて私の城に春　伊三郎
赤ちゃんと医者にはぐちが零せない　文夫

川柳ささやま　脇田米朝報

品なんかいらない柩にすがる数珠　文平
薄給で生きる手品は妻が練る　法斉
品定め西瓜あたまの音で決め　百合子
装いの品に人柄溢れてる　ゆう也
迷わずに残した父の草鞋はく　エキオ
犬釘に草木が語る過疎の駅　越山
父が吹く草笛童話のせて来る　和子
雑草は踏まれる程に強く伸び　久乃
脇役が好きで馬脚に甘んじる　米朝
役付きの椅子に公私を崩すまい　テル
脇役の業が主役を作り上げ　つや子
ぜいたくを叱りもならず笑っとき　ひか平
ぜいたくを知らずに生きた母の腕　静子
ぜいたくな嫁へ始末な婿が添い　美智子
贅沢な白何色に染めんかな　冨美
ハレー彗星ちらりと見せて走り過ぎ　可住

川柳高知　川竹松風報

軍資金弱いか票の延びなやみ　和興
母の目に出逢うと弱い父の酔い　節子
納骨堂淋しがり屋のボクが建て　草風
心配が憎さに変る午前様　幸
夫婦箸そっぽを向いて倦怠期　春枝
せせらぎに春はそこまでねこ柳　禎子
パチンコにきっといるなと思う留守　佳風
嘘のない鏡で化ける厚化粧　功
真実の貌が鏡の外にある　朱坊
パックする年齢を鏡に笑われる　菊野
思い出がひとつ鏡の中に居る　千馬
エプロンが似合う男の平和主義　三吉
追憶の鏡かすかに母の顔　竹萌

会う人に会えず家路に重い足　幸泉
ライバルに酒の量まで負けている　松風

井上柳五郎報

土砂降りへ男男の顔になり　哲郎
花だより狂わす憎いこぬか雨　健一
葬式ごっこの先生香料高くつき　佐加恵
象徴の庭にまさかのロケット弾　進平
地中海米ソがジャブで隙ねらう　照路
講演の終りを待っているあくび　行則
母と娘の話にあくびを笑い合い　博友
あくびする振りして爪を研いでいる　玉水
窓際であくびしている生字引　恒洋
あくびする番犬あまく見た不覚　美智子
眠そうな可愛いあくび抱いている　中建
生きる知恵一歩退き丸うする　吟平
つまずいて退く術を模索する　柳五郎
退いて見てから穴の深さ知り　たけ志
銃口が退く男の背を狙う　進
春風といっしょに飛んだよ焦点は　拓治
ギャルたちのスカート春を知らせてる　信善
枢まで焦点あわぬ夫婦の絵　桃風
地平線に焦点合わせて馬鹿になる　草風

聴障川柳　稲田　豊作報

後悔の心の傷は夜痛む　和江
愛娘いたしかわいの嫁衣裳　みつる
難聴の痛み四十年耐えに耐え　八恵子
足踏んだ美人にピッコ引いてみせ　峯生
庶民には痛い値上げが目白押し　文古
夫の痛みを癒やす言葉が見あたらぬ　三香
耳の痛い話も聞いて嫁いだ娘　たみ
真理をば悟れ痛みは消えてゆく　鉄火

年齢と諦め撫でる痛い腰　承平
痛いこと言えば話題をかえて逃げ　珍顔
補聴器をかければ痛い浮世風　進一
膝かじり親の痛さも知らないで　豊作

川柳化粧櫓　植村客遊子報

移り香の怖れ自分で服を掛け　大鷹
目礼を交わしライバル意識する　岳詩
妻といて戸惑う過去の女と会い　実男
苦労した過去は語らぬ尉と姥　紅月
頼りない男だなあと金の事　越山
春近し雀も春の声で鳴く　秋月
横向けば妻の顔あり四十年　葉香
妻と二人終着のない旅綴る　悲子
石段を一つ登って男坂　礎石
今月こそは妻を胴上げしてやろう　白李
病院へ来る夜泣きそば売れている　みつこ
コツコツと貯めて目減りの金に泣く　サワ子
停年へ妻がほしがるフルムーン　輝月
若造り後姿に年齢の影　とし
似顔絵を孫が上手に描いてくれ　永楽
献立も嫁独特の味になり　みね子
懸涯の松にせせらぎ聞えそう　まさ子
茶柱へ今日の一日賭けて見る　はつ子
校庭に歓声聞こえる雪の朝　和子
タレントになれると隠し芸をほめ　客遊子

城北川柳会　神夏磯道子報

桜前線なつかしい友へ電話する　千世子
着倒れと食い倒れの差一次元　悦子
からくじにもう買うまいと毎度きめ　喜代子
頑張りもようやく実る春日ざし　正之
法廷の三浦のセンス娘等はほめ　としゑ

損かけた分だけ背負う重い恩　道子
チラシには損を覚悟と赤書する　秀夫
捨てるゴミにも住宅の見栄がある　頼一
大雪であちこち痛み損をする　午郎
雪おろし実年者が見直され　敏子
孫八人生まれる毎に嬉しい損　貴代美
建国の日護国の鬼が泣いてます　悟郎
老い過ぎて耳学問と目勉強　繁子
頑張った坂の向うに虹がある　笑風
電話ベル三回で切れ無事を知る　温子
損した気生命保険満期の日　弘生
店じまいそれでも損をせぬチラシ　テルミ
旅五日さあ今晩から主婦に　節子
ぼけたかなやはり気になる物忘れ　八重
寒くても春の陽ざしに心和み　寿美礼
梅はまだほんの少しと風の私語　達子
絶対に無い世の中に無理願う　ただし
出稼ぎの夫に代る子の馬力　清治
盆栽に冬の名残りが化粧する　佐津乃
老人もかなりないじめに会ってます　芙久枝
三通話笑ってばかり子の電話　静子
ぼんぼりも消えて酔ってる官女達　カネ
庭の木々亡き娘を紛う月の夜　晴子
単身赴任上手になったおみそ汁　山久
同門の仲間にも居る右左　圭介
春告げる寒さの峠お水取り　晃世
梅便り出足がにぶる春の雪　寿美礼
ばあさんとかぶとの下見初節句　星斗
若い芽へ雨も降ります風も吹く　市郎
家計簿の合わぬ時には嘘もつけ　登志代
風花す天女が千切る文のごと　末子
新一郎

出来不出来同じ親の血分けながら　右近
意欲出しすぎて歯車食い違い　文子
風花の中梅の蕾は咲く支度　綾珠
スキー場派手な服程よく転び　亀男
嫁の座を温めて行く日の流れ　公一
春を待つ草の根幸福きっと来る　泰世
人情も義理もお金で片をつけ　倫子
注射より痛い注意を医者がする　白峰
人は皆淋しいものと気休まる　有佳
遺言を書かねばならぬ事もなし　満津子
春来ると思えば雪も暖かい　ふみ
損得の風は知らないプラモデル　静歩

川柳しんぐう　川上　渓水報

発表会親戚中をかき集め　大輪
研究発表医学の道に灯がともり　えつこ
合格の発表うれしい花便り　金太
発表の瞬間胸に水を打つ　まさ子
隠しても他人が発表して呉れる　正博
デザイン科出てうどん屋のタモを振る　司
デザインをどう変えようと寝巻です　英子
先生の名でデザインが生かされる　柳宏子
少し狂った頭で見ようデザイン展　英子
あてもない我が家のデザイン書いてます　利次
ライバルの足音先へ先へ行く　登志代
初彼岸亡母の足音聞こえそう　冬花
足音を取り戻したい車椅子　武雄
駈け込み寺はつらい足音ばかり聞く　幸
禁酒した父の足音淋しそう　昌子
老母が来て妻の本音が見え隠れ　正
つくしの芽春が来たぞと言っている　小六佳菜子
ジャンボくじ買わぬ顔して買うてくる　十郎

いつ来ても変わらぬ愛がある故郷　富子
ついでだと言ってわざわざ来るも親　渓水

石見川柳会　中川　幸一報

父の樹の根には苦労が埋めてある　肇
子供でも意志の強さが顔に出る　弁治郎
自信過剰鉄骨にもある落し穴　久道
剽軽な奴が仲間の和を作る　裕
人形になって耐えきた母の過去　久代
留守番は茶漬けで食ったことにする　満江
幼な子にちょっと大きな注射針　昭二
胎内で父と別れた娘が華燭　仙次郎
華やかなトップの座にもある苦労　芳子
たった一本意志のもろさに又も吸い　義弘
鉄骨のビルに馴染めぬわらべ唄　美磯
日本語に悩み励ます孤児仲間　勝子
人形と見せて女のしたたかさ　よし子
一番茶には茶柱は立たぬ　孝太郎
ロボットの疲れへ注射用意する　寿子
許さなかった父真っ先に孫を抱く　秋峰
こんな時父の意見が欲しい墓地　(迫)秀子
生と死をじっと見ていた注射針　文子
お茶の席日本の顔になって座し　ちかし
人形師顔は世代の彩をだす　為一郎
仲間かと見えてある日の二枚舌　久美子
鉄骨も錆びて斜陽の町工場　幸一
再婚の意志妥協せぬ子が一人　多賀子
児の笑顔苦労に負けてなるものか　由郎
どん底の苦労がやっと実を結ぶ　清子
聞く意志がないから欠伸ばかり出る　夢酔
鉄骨にやさしさ添える色を選る　純子
七人の敵も仲間に入れる腕　妙子

春一番ひな人形と出くわした　美称子
注射する白衣に牛の目が動く　房子
北風にぴくともしない父の樹よ　佐吉

川柳大阪（前月分）　塩満

この年でやっと男女が解りかけ　敏報
改札機前で服装検査する　希久志
枯れ草の下からみどりの芽が息吹き　比呂志
義理チョコがひとつ届いた管理室　与呂志
雪解けの散歩道から春匂う　重人
男みな敷かれてつづく平和な世　我勝
フルムーン二十歳の頃の夢が覚め　本蔭棒
年金で足らぬを妻と手内職　洛酔
発表会ママの化粧が厚くなる　雅巣
娘から数のうちよとチョコ一つ　司
若者の会話あきれる戦中派　しげお
道真もあきれる絵馬の願いごと　伸子
卒業がない人生を妻とゆく　酔舟
盃を涙で交わす送別会　金太
すえ膳を食わずに逃げた時もあり　河南子
逃げ口上聞いてる妻の目が怖い　一歩
豆まきに引張りだこの年男　虎酔吟
豆まきがすんで春くる匂いする　辰男
節分の豆の数だけ過去がある　好栽
宝くじ当り寅年初笑い　柳弘
寅年に生まれ巨人の大ファン　三千雄
子の学費ポンと虎の子いい気っぷ　喜楽
そう遠くないかも地球逃げ出す日　小柳
歌になりロマンを包む川の秘話　一介
大阪の流れる川にある名所　喜酔
卒業を祝う校門春の風　天平
次女も嫁く非売の札をもぎとられ　鉄心
敏

6月各地句会案内

	日／時及び題	会場と投句先
川柳塔 まつえ	**吉岡通児追悼句会** 8日(日) 12時開場 団地・たばこ・骨董品 盃・電報	労働会館 〒690 松江市御手船場町(松江駅より徒歩5分) 句会費 2,000円　投句料 300円(60円切手可)
西宮北口	9日(月) 午後1時より 歯・説明・自由吟	西宮中央公民館　阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5—25—17　春城年代 句会費 300円　投句料 60円切手4枚
菜の花	10日(火) 夕6時より 時雨・台所・繁栄・配る	八尾西郷会館　近鉄大阪線八尾駅南西歩5分八尾神社境内 〒581 八尾市山本町5—4—6　内海幸生
川柳 わかやま	15日(日) 午後1時より 蛍・傘・覗く・帳尻	紀の国会館（県民文化会館西隣） 〒640 和歌山市駕町15　野村太茂津 句会費 300円　投句料 60円切手3枚
川柳 ねやがわ	15日(日) 午後1時より 名物・活躍・退屈	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9—9　高田博泉 句会費 500円　投句料 60円切手3枚
もくせい 川柳会	16日(月) 午後1時半より 横・錆びる・重い・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒560 豊中市旭丘8番87—2　田中正坊
堺川柳会	17日(火) 夕6時より 最初・咲く・三角・匙	堺青少年センター3F　阪堺線綾之町西南 〒593 堺市堀上緑町2—9—2　河内天笑
南海電鉄 川柳句会	19日(木) 夕6時より ホテル・宝石・名簿	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課　広井季雄 句会費 無料　投句料 60円切手1枚
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木) 午後1時より 自転車・不手際・自由吟	高槻市民会館301号室　阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3—19　辻 白渓子 句会費 500円　投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
富柳会	19日(木) 午後1時より 密やか・長い・メモ	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台3—22—18　藤田泰子
南大阪 川柳会	19日(木) 夕6時より 若気・一生・上役・遠足	寺田町高松会館　国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1—5—2　金井文秋 句会費 500円　投句料 180円(郵券可)
駒つなぎ 川柳会	23日(月) 夕6時より 地味・冒険・凄まじい・喉(のど)	寺田町高松会館　国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ一丁三筋目左へ駅より歩3分 〒572 寝屋川市成田町19—28　里　小路
東大阪 川柳同好会	28日(土) 夕6時より 雨・奇術・気まぐれ・青	東大阪市社会教育センター2階　近鉄布施駅北へ5分 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14　斉藤光利 句会費 500円　投句料 60円切手3枚

★特に記載なき場合　句会費 500円、投句料 300円（郵券可）、各題3句以内

原稿送り先（〆切・毎月20日　予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です）

〒596　岸和田市荒木町1—29—1　宮園射月芳

本社6月句会

日時　六月七日（土）午後六時

会場　メンズファッションセンター3階
東区内本町一―一　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

おはなし　橘高薫風

兼題「下積み」　榎本吐来選
「暗記」　松川杜的選
「比べる」　樫谷寿馬選
「牙」　高杉鬼遊選

席題二題　当日発表　各題三句以内厳守

会費　五百円

★投句は柳箋（4cm×19cm）に一葉一句。
投句料 300円（60円切手5枚）同封のこと。

川柳塔社

7月の兼題　「甘い」「熱」　「森」「恩師」

7月の本社句会は7日（月）

募集

八月号発表（6月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「炎天」　久家代仕男選
「追う」　松本忠三選
「潮時」　安藤寿美子選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

九月号発表（7月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「筋書」　中西兼治郎選
「輝く」　狭間希久志選
「波」　森井菁居選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

6月の常任理事会は2日（月）

暑中広告受付

★一口　千円（23cm×7cm大）
（本誌「柳界展望」の一段＝二、五〇〇円）
一頁＝一万二千五百円

★原稿締切・6月25日必着

★原稿及送金先
〒581　八尾市中田二―三〇二
高杉鬼遊方
川柳塔社会計室

定価　五百円（送料50円）
半年分　三千二百円（送料共）
一年分　六千三百円（送料共）
昭和六十一年五月二十五日印刷
昭和六十一年六月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六　ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六六一―六九一四番
振替口座大阪8―三三六八番

＝編集後記＝

☆政府主催の天皇在位六十年記念祝典が四月二十九日の午後、東京両国の国技館で行われた。

☆式典は約四十五分間で終り、児童合唱団が「花」や「赤とんぼ」などを合唱してお祝いしたというから、簡素ながら厳粛なうちにも和やかであったのだろう。

☆戦後、満年齢になるまで昭和と同い齢だった私は、共に激動期を過して来たので誠に感慨深かった。

☆二十で終戦を迎えるまでの人間形成期はずしりと重く、以後の四十年の歳月に匹敵するようにも思える。

☆家を焼かれ、軍隊生活も体験した。「改めて平和の尊さを痛感する」と仰言る陛下のお言葉には万感こもるものがあろうと、ニュースで見てさえ熱いものがこみ上げた。

☆路郎先生に薫陶を受けた七年余りが、その後の二十年余にまして印象深いのも何事によらず、その形成期の影響の如何に重いかが判る。私の川柳形成期は充実して幸せだった。

☆路郎先生の門下生が、櫛の歯のこぼれるようにこの世から去って行かれる。四月もまた、傍島静馬、国弘半休門両氏の訃報が舞い込んだ。吉岡通児氏の霊とともに深く哀悼申し上げる。

☆中国吟行の旅など大型のものばかりでなく、一泊程度の催しを希望する声が多いので、岳人さんに計画を練って貰った。

☆第一回勉強会と銘打って伊勢の答志島、サンピーチ鳥羽で開催する。別項の通りで、研究や作品の発表と観光・懇親の両方を兼ねた充実したものにしたい。回を重ねられる程のご参加をお願いします。

☆東京サミットは、わが国の貿易黒字に対する欧米の包囲網にまんまとはめられた形で終った。長年の植民地からの搾取で財を成した国と、たかだか数年の黒字での経済大国日本との富では桁が違う。「アメリカの悲しい花火大花火　甲吉」のような痛烈な批判句が、ここでも欲しい。（薫）

▼「歌会始と併せて句会始があってもおかしくはないのではないか。新聞だって雑誌だって、短歌欄と俳句欄は同じページを仲よく分け合っている。」と、作家の江国滋氏が〝勝手な空想〟と題して朝日新聞のコラムで個人的感想と断って書いている。これを知ったら川柳人は何と言うだろう。川柳始どころではない。新聞に、短歌、俳句と肩を並べるほどにもまだ認知されていないのである。

▼川柳が何故、新聞、雑誌に、短歌・俳句と肩を並べなければならないのか、と私は思う。桑原武夫氏に、第二芸術だと書かれ、頭にきた時代もあったらしいがそれは彼の見識であって何もそのことで卑屈になる要はない。川柳は芸術以前の存在だからマスコミでは、その取扱い方に困っているのだ。と思いたい。

▼宮中の儀式として行われるから短歌は格上で、下町の集会所で開かれるから川柳はけずだと決められるものではない。要はそれに関わる者の人格とその作品を問題にすべきだと思う。

▼先人はいいことを言ってくれた。「川柳は人間である」。また「川柳は人間陶冶の詩である」と。誰にこびることもない、誰に気がねすることもない。

▼これが文学だ、これが芸術だと、口にすることはない。私たちは川柳を書いているのだ。芸術をやっているのではない。（き）

☆わが家の近くの銭湯が大改装し、4月下旬の大安吉日に華々しくオープンした56年5月号の後記に書いたことのあるこの銭湯は、新聞にも紹介されたほどユニークな銭湯であったが、また更に一段と豪華になった☆まず二階建てというのが珍しい。一階には、ラドンドリームバス、カスケードバス、赤外線リラックスバス、ビュビナバス、バスクリン漢方薬湯、アスレチック、二階にはサウナ、オゾンスチームバス、森林露天風呂、冷水風呂等、なんと十二種もの風呂がある。

☆内部は女性像をデザインしたステンドグラスで仕切られ、脱衣場の天井にはシャンデリアが輝いている。体重計は最新式のデジタル表示である。

☆従来の銭湯のイメージを残しているものといえば、店の表と、男湯・女湯それぞれの入口の「のれん」ぐらいなものか。紺地に白く家紋や文字を染め抜いた、こののれんは、豪華且つ近代的なふん囲気の中で最初は違和感があったものの慣れるにつれ、それが却ってナウく見えるから不思議だ☆新装開店して約半月、目立った変化は、若者が断然多いこと、それに自転車で来る客がふえたこと。その限りでは経営者のねらいは一応成功したといえよう。

☆ただ残念なことに、デジタル体重計は五日目にして早くも故障してしまった。（史）

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和六十二年五月二十五日　印刷
昭和六十二年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七〇九号　川柳塔　六月号
定価　五百円（送料　五十円）

日刊
電波新聞

投稿欄案内

川柳　選者・橘高薫風
（掲載日）毎週水・土曜日

俳句　選者・小寺正三
（掲載日）毎週火・金曜日

短歌　選者・佐々木信夫
（掲載日）毎週月・木曜日

〈投稿規定〉
はがき一枚に三句（首）以内（川柳・俳句・短歌と明示すること）。投稿随時。
自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

〈投稿先〉
〒五三〇・大阪市北区中之島三―二・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

５つの個性・５つの色味!!
アイスキャンデー
ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時

なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
泉北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう百貨店
京阪モール店
サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店
なんば新川店
虹のまち店
ドーチカ店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店

551 HORAI

大阪・なんば
蓬莱
TEL 641―0551

雑誌　05703―6